

第五十條、第六十四條

條例規則ヲ新設改正スルハ市町村會之ヲ議決シ(市制第三十一條第一、町村制第三十三條第一、市制第二百一十一條第一及第二百二十三條第一、町村制第二百二十五條第一及第二百二十七條第一ニ依リ許可ヲ受シ可キモノトス但町村制第三十一條及第二百十四條ニ於テハ特例トシテ之ヲ郡參事會ノ議決ニ委任セリ是町村會ニ於テ此議決ヲ爲スヲ得ス又其議決ノ偏頗ニ失スルノ恐アルヲ以テナリ又本制施行ノ當初未ダ市町村會ヲ召集セサル間ニ於テ條例ヲ以テ規定ス可キ事項ノ處分法ハ市制第二百二十八條及町村制第三百一十一條ニ依ル其他條例規則ヲ論セズ公布ヲ竣テ初メテ他人ニ對シテ効力ヲ有スルハ一般ノ法理ニ照シテ疑ナキ所ナリ

市制町村制第二章 市會町村會

市町村ハ法人タル者ナレハ之ニ代テ思想ヲ發露シ之ニ代テ業務ヲ行フ所ノ機關ナカル可カラズ其機關ニ代議ノ機關ト行政ノ機關トノ二者アリ  
代議ノ機關トハ即市會町村會ニシテ其沿革ノ詳ナルハ今姑ク措キ往時町村ノ寄合ト稱セシモノニ起リ維新後ニ至テ府縣會ト同ク各地方ニ町村會ヲ開キタリ然レトモ其法律ヲ以テ制定シタルハ即明治十三年ノ區町村會法ヲ創始トシ其後明治十七年ノ改正ヲ經テ今日ニ及ヘリ然レトモ其法律ハ會議ノ大則ヲ定メタルニ過キスシテ餘ハ之ヲ各地方ノ適宜定ムル所ニ任セタリ又全國ノ町村盡ク之ヲ開設スルニ非ス小町村ノ如キ會議ヲ設ケサルモ亦少シトセ

ス今之ヲ改メテ會議ノ規則ヲ制定スト雖モ猶多少ノ酌量ヲ地方ニ任セ且小町村ノ如キハ代議會ヲ設ケサルヲ許シ代フルニ選舉人ノ總會ヲ以テセリ

第一款 組織及選舉

代議機關ハ完全ナル權利ヲ有セル市町村民ノ選舉ニ出ツルモノトス其組織ノ方法ニ至テハ外國ノ例ヲ參考スルニ各多少ノ異同アリ蓋國ノ情況ニ適合スル完備ノ法ヲ立ツルハ易カラサル所ナリト雖モ今古來ノ沿革時勢人情ヲ考察シ傍ラ外國ノ例ヲ參酌シテ以テ其宜ヲ制定ス其要點左ノ如シ

一 選舉權

選舉權ハ素ヨリ完全ナル權利ヲ有スル公民ニ限リテ之ヲ有ス可シ然ルニ此權利ヲ擴張シ特例トシテ之ヲ公民ナラサル者ニ與フルコトアリ(市制町村制第十二條)是其人ノ利害ニ關スル所最厚ク且市町村稅負擔ノ最重キカ故ナリ此點ハ上ニ之ヲ詳述セリ

二 被選舉權

被選舉權ハ選舉權ヲ有スル者ニ限リテ之ヲ有ス可シト雖モ其市町村ノ公民ニ非サル者ニ至テハ假令選舉權ヲ有スルモ被選舉權ヲ有セズ其他被選舉權ノ要件ヲ選舉權ノ要件ニ同クシテ別ニ之ヲ制限ヲ設ケサルハ適任ノ人物ヲ選擇スルノ區域ヲ徒ニ減縮セサランカ爲メナリ被選舉權ヲ與ヘサル制限ハ或ハ外國ノ例ヲ參酌シテ之ヲ取ルモノアリ或ハ地方ノ情況ニ照

シテ己ムヲ得サルモノアリ又本制ニ於テハ無給ノ市町村吏員ニ被選舉權ヲ與ヘタリ市町村ノ行政事務ヲ掌ル名譽職ヲ擔任シ公共事務ニ從事スル者ヲ代議會ニ加フルヲ許スハ穩當ナラサルカ如シト雖モ地方ニ依リテハ多ク適任ノ人ヲ得可カラサルヲ以テナリ行政ト代議ト最利害ノ抵觸シ易キ場合ニ關シテハ市制第三十八條、第四十三條、第六十六條、町村制第四十條第四十五條、第一百十三條ニ於テ豫メ之ニ處スルノ法ヲ設ケタリ

三 選舉等級

本制ニ於テハ納稅額ニ依テ選舉人ノ等級ヲ立テ選舉權ヲ以テ市町村稅負擔ノ輕重ニ伴隨セシム蓋名譽職ニ任スルハ町村公民ノ輕カラサル義務ナレハ資産アル者ニ非サレハ之ニ任スルコト能ハス又其稅額ノ多寡ハ姑ク之ヲ論セサルモ其專ラ自治ノ義務ヲ負擔スル者ニ相當ノ權力ヲ有セシムルハ固ヨリ當然ノ理ナリ今等級選舉法ヲ以テ常例トセルハ即此要旨ニ外ナラス等級選舉ノ例ハ本邦ニ於テハ創始ニ屬スト雖モ之ヲ外國ノ實例ニ照スニ明ニ其長結果タルヲ徵スルコ足ル本制被選舉權ノ資格ヲ廣クシテ而シテ其流弊ナキヲ信スル所以ノモノハ即此選舉法ニ依テ以テ細民ノ多數ニ制セラル、ノ弊ヲ防クコ足ルヘキヲ以テナリ各地方ノ狀況ヲ見ルコ都鄙ニ依テ貧富ヲ異ニシ地形ニ依テ產業ニ別アリ故ニ各地ニ通スル一定ノ稅額ヲ設ケテ等級ヲ分ツコト得ス又單ニ土地ノ所有ヲ以テ選舉權ノ標準ト爲スコト得ス是ヲ以テ等級法ヲ立テント欲スルニハ市町村內ニ於テ徵收スル市町村稅ノ總額ヲ標準

トシ各自納稅額ノ多寡ニ依テ其順序ヲ定メ等級ヲ立ツルノ外他ニ良法アルヲ知ラス然ルニ市ハ通シテ三級トシ町村ハ單ニ二級トセルハ市民ハ戶口多ク貧富ノ階級アルノト町村民ノ等差少キカ如キニ非サルヲ以テナリ(市制町村制第十三條)但町村ニシテ特別ノ事情アルモノアリ例ヘハ選舉人寡少ニシテ其稅額ノ等差モ亦少ク或ハ一二ノ納稅者アリテ非常ニ多額ノ稅ヲ納ムルカ或ハ大町村ニ於テ其納稅者ノ等差極メテ甚キノ類ニシテ二級選舉法ヲ適當トセサル場合モアル可シ此場合ニ於テハ町村條例ヲ以テ三級選舉法ヲ設ケルコトアル可ク或ハ等級ヲ設ケス或ハ更ニ他ノ方法ヲ立ツルコトヲ得セシメントス尤ニ二級若クハ三級選舉法ヲ以テ常例ト爲スカ故ニ不得已ノ事情アリテ許可ヲ受クルニ非サレハ此特別ヲ設ケルコトヲ得サル可シ

被選舉人ハ其區內級内ノ者ニ限ラスト爲スハ(市制第十三條、第十四條、町村制第十三條)市町村會ノ議員ハ全市町村ノ代表者タルノ原則ヨリ出ツルモノニシテ是亦實際ノ便宜トスル所ナリ

四 選舉ノ手續

選舉ノ事務タル其關スル所輕カラサルヲ以テ其細則ニ至ルマテ法律ヲ以テ之ヲ規定スルヲ要ス其單ニ手續ニ屬スル事項ト雖モ方メテ法律ニ之レヲ制定スル所以ノ者ハ選舉ノ公平確實ナルコトヲ保シ行政廳ノ干涉ヲ防キ或ハ干涉ノ疑ヲ避ケンカ爲メナリ其順序大略左ノ如シ

選舉ハ通例三年毎ニ之ヲ行フ之ヲ定期選舉トシ議員ノ半數ヲ改選ス其半數ヲ改選スルハ事務ニ熟練スル議員ヲ存續セシメノカ爲ナリ但解散ノ場合ハ此ノ如クナルヲ得ヌ又此法律施行ノ當初ニ於テ選舉セラレタル議員ハ初回ノ改選ニ方リ抽籤ヲ以テ半數ヲ退任セシムルニ依リ其半數ハ三年間在職スルモノトス此二箇ノ場合ヲ除キ議員ハ總テ六年間在職スルモノトス若シ議員任期中ニ死亡シ若クハ退職スルトキハ直ニ補闕員ヲ選舉シ前任者ノ任期ヲ襲カシメサル可カラズ之ヲ補闕選舉トス然レトモ屢選舉ヲ行フトキハ其煩ニ堪ヘサルカ故ニ補闕選舉ハ定期選舉ヲ待テ之ト同時ニ行フヲ通例トス假令一二ノ闕員アルモ事務ニ支障ナカルヘキヲ以テナリ然レトモ若シ多數ノ議員退任スル等已ムヲ得ス補闕員ヲ選舉スルノ必要アルトキハ市制町村制第十七條ニ於テ之レカ便法ヲ設ク

選舉ヲ爲スノ準備ニ屬スル事ハ之ヲ行政機關即町村長若クハ市長及參事會ニ委任セリ而シテ其事務ハ選舉ノ基礎タル選舉名簿ヲ調製スルヲ以テ第一トス本制ハ所謂永續名簿ノ法ニ依ラス選舉ヲ行フ毎ニ名簿ヲ新ニスルノ法ヲ取レリ(市制町村制第十八條)其調製シタル名簿ハ選舉前數日間關係者ノ縱覽ニ供シ異議アル者ハ市町村長ニ申立テ又ハ訴願若クハ行政訴訟ノ手續(市制第二十五條、町村制第二十七條)ヲ以テ誤テ正ス可キ便利ヲ與ヘタリ此ノ名簿ノ調製ハ選舉ヨリ數日前ニ終結ス可キカ故ニ其結了ノ時ニ行ヒタル裁決ハ之ヲ執行ス可シト雖モ各訴願ノ確定終局ニ至ル迄在再日ヲ曠クスルヲ得ヌ選舉ノ期日ニ至レハ其訴願

ニ拘ラス之ヲ執行ス若シ名簿ニ錯誤アルカ爲メ選舉ノ無効ニ歸スルコトアレハ更ニ之ヲ申立ツルコトヲ得可シ又被選舉人當選ヲ辭シ或ハ選舉ヲ無効ナリト斷定セラレタル時ト雖モ更ニ名簿ヲ調製スルヲ要セス判決ニ準據シテ舊名簿ヲ調正シタル上之ヲ用フルモノトシ之カ爲メニ更ニ關係人ノ縱覽ニ供シテ正誤申立ノ時間ヲ與フルコトアラズ唯名簿全体ノ不正ナルカ爲メ全選舉ヲ無効ナリトシタル時ニ至テハ新簿ヲ調製スルコト已ムヲ得サルナリ

選舉ノ期日ハ町村長市參事會之ヲ定ム本制ニ據レハ選舉人ヲ召喚スルニハ公告ヲ以テ足リトスト雖モ實際市町村ノ便宜ニ依リ各選舉人ニ對シ特ニ召集狀ヲ送付スルコトアルモ妨ケナシ其他投票時間ヲ定ムルハ市長村長ニ任シタルヲ以テ市長町村長ハ選舉人ノ多寡及地形等ヲ參酌シテ之ヲ定ム可シ

選舉事務ノ統轄ハ之ヲ自治ノ吏員ニ委任シ(市制町村制第二十條)監督官廳ハ特ニ之カ監督ヲ爲ス可キノミ(市制第二十八條、町村制第二十九條)而シテ選舉掛ハ集議体ニ編制セリ選舉掛ハ選舉人代理者ノ許否、投票ノ效力等直ニ之ヲ裁決セサルヲ得ヌシテ此ノ如キハ一個ノ吏員ニ委任スルコトヲ得サルヲ以テナリ固ヨリ選舉掛ニ於テハ右等ノ事件ヲ議決スト雖モ後ニ至リ選舉ノ無効ヲ申立ツル者アルトキハ之ヲ裁決スル官廳ニ於テハ右議決ニ拘ラヌ至當ノ裁決ヲ爲ス可キモノトス

選舉會ハ選舉人ニ取リテハ公會ナリト雖モ(市制町村制第二十一條)其選舉ハ全ク秘密投票

ノ法ヲ以テス即選舉掛ハ勿論其他何人ニテモ投票者ニ於テ何人ヲ選舉セントスルガチ知ラシメサルモノトス故ニ選舉ノ際ハ投票ヲ用ヒ票中ニ投票者ノ氏名ヲ記載セス又之ニ調印セシメス封緘シテ之レヲ差出サシム(市制町村制第二十二條、第二十三條)元來公選舉ト秘選舉トノ別アリ其利害得失ニ就テハ互ニ論アリト雖モ今特ニ地方自治區ノ選舉ニ就テ之ヲ考フルニ町村ノ事情タル居民常ニ相密接スルモノナレハ選舉ノ自由ヲ妨ケサランガ爲メニ寧ロ秘密選舉ヲ以テ良法ト爲ス而シテ選舉權ヲ有セサル者ノ投票又ハ重複ノ投票ヲ防カンガ爲メニハ選舉人自ラ出頭スルノ例アリ(市制町村制第二十四條)又名簿ニ照シテ之ヲ受クルノ法(市制町村制第二十二條)アリ選舉人自ラ出頭シテ選舉ヲ行フノ例ヲ設クルハ毫モ選舉ノ利害ニ關セサル輩ノ勸告ニ依テ之ニ投票ヲ託セントスルガ如キ者ヲ排除シ選舉ノ自由ヲ保護スル所以ナリ但市制町村制第二十四條第二項ニ掲グルモノハ己ムヲ得サルノ特例ナリトス選舉ヲ行フニ下級ヲ先キニシ上級ヲ後ニスルハ(市制町村制第十九條)下級ノ選舉人ヲシテ人ヲ擇フニ充分ノ區域ヲ得セシメンガ爲メナリ而シテ先ツ下級ノ選舉ヲ了ルノ後ニ上級ノ選舉ニ着手セシム可シ是一人ニシテ數級ノ選ニ當ルコトヲ防キ且上級ノ者ヲシテ下級ノ選舉ニ當ラサル候補者ヲ選擇スルコトヲ得セシムルモノナリ選舉ノ結果ヲ證スルガ爲メニ選舉錄ヲ製スルノ例(市制第二十六條町村制第二十七條)アルハ選舉ノ効力ヲ裁決スル證憑ヲ備ヘンカ爲メナリ

當選ノ認定ハ議員ノ選舉ニハ比較多數ノ法ヲ取リ(市制第二十五條、町村制第二十六條)市町村吏員ノ選舉ニハ過半數ノ法ヲ用フ(市制第四十四條、町村制第四十六條)元來總テ過半數ヲ以テスルヲ正則トスレトモ事宜ヲ計リテ便法ヲ設ケタルナリ

選舉ノ効力ニ關シ異議ヲ申立ツルノ權利ハ選舉人及市長町村長ノ外公益上ヨリシテ其効力ヲ監査スルガ爲メニ郡長及府縣知事モ又此權利ヲ有ス選舉人及市長町村長ノ異議アルモノハ參事會ノ裁決ニ任シ其郡參事會ノ裁決ニ不服アルトキハ府縣參事會ニ訴願スルコトヲ得其府縣參事會ノ裁決ニ不服アルトキハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得ルモノトス是實ニ利害上ノ争ニアラスノ權利ノ消長ニ關スレハナリ(市制第二十八條第三十五條、町村制第二十九條第三十七條)

一旦選舉ヲ有効ト定メ或ハ其効力ニ異議ナクシテ經過シタル後ト雖モ當選者被選舉權ノ要件ヲ選舉ノ當時ニ有セサリシコトヲ發覺シ或ハ其當時有シタル要件ヲ失フコトアル可シ斯ル場合ニ於テハ固ヨリ市制第二十九條、町村制第三十條ノ結果ヲ生ス可シ其裁決ノ手續ハ市制第三十五條、町村制第三十七條ニ據ル

五 名譽職

市制町村制第十六條、第二十條、第七十五條ニ依リ名譽職ヲ置クハ本制大体ノ原則ニ出ツルナリ

第二款 職務權限及處務規程

市會町村會ハ市町村ノ代表者ナリ其權限ハ市町村ノ事務ニ止マリ其他ノ事務ハ從來ノ委任ニ依リ又ハ將來法律勅令ニ依テ特ニ委任スル事項ニ限リテ參與スルモノトス若シ大政ニ論及スル等凡ソ此界限ヲ踰ユルモノハ則法律ニ悖戾スルモノナレハ法律上ノ權力ヲ以テ(市制第六十四條第二項第一、第二百十條、町村制第六十八條第一項第一、第二百二十四條)之ヲ制セサル可カラズ其他市制第百十八條、第百十九條、町村制第百二十二條、第百二十三條ハ皆市會町村會ノ怠慢ヲ防制スルノ權力ナリトス

市會町村會ハ代表機關ト爲スト雖モ(市制第三十條、町村制第三十二條)外部ニ對シテ市町村ヲ代表スルハ行政機關ノ任トス(市制第六十四條第二項第七、町村制第六十八條第二項第七)即市會町村會ハ專ラ行政機關ニ對シテ市町村ヲ代表スルモノナリ市制第三十一條以下及町村制第三十三條以下ニ列載シタル職務ハ皆此地位ニ依テ生スルモノトス

市會町村會ハ條例規則、歲計豫算、決算報告、市町村稅賦課法及財産管理上ノ重要事件等ヲ議決ス市制第百十八條、第百十九條、町村制第百二十二條、第百二十三條、場合ヲ除クノ外行政機關ハ議會ノ議決ニ依テ方針ヲ取ラサルヲ得ス但其議決上司ノ許可ヲ得可キモノハ市制第百二十一條ヨリ第百二十三條ニ至リ及町村制第百二十五條ヨリ第百二十七條ニ至ルノ各條ニ依ル

二 市會町村會ノ執行ス可キ選舉ハ載セテ市制第三十七條、第五十一條、第五十八條、第六十條及町村制第五十三條、第六十二條、第六十三條、第六十四條、第六十五條ニ在リ

三 市會町村會ハ市町村ノ行務ヲ監査スルノ權利ヲ有ス其監査ノ方法ハ書類及計算書ヲ檢閲シ町村長若シハ市參事會ニ對シテ事務報告ヲ要求スルノ類是ナリ此權利ニ對シテ町村長若シハ市參事會ハ之ニ應スルノ義務アリ若シ市會町村會ニ於テ意見アルトキハ之ヲ官廳ニ具狀スルコトヲ得可シ

四 市會町村會ニ於テ官廳ノ諮問ヲ受シルトキハ之ニ對シテ意見ヲ陳述スルハ其義務ナリトス

五 其他市會町村會ハ或場合ニ於テ公法上ノ爭論ニ付始審ノ裁決ヲ爲スノ權アリ(市制第三十五條、町村制第三十七條)

市會町村會ノ議員ハ其職務ヲ執行スルニ當テハ法令ヲ遵奉シ其範圍内ニ於テ不羈ノ精神ヲ以テ事ヲ評議ス可シ決シテ選舉人ノ指示若シハ委囑ヲ受ク可キモノニアラス(市制第三十六條、町村制第二十八條)是固ヨリ法理ニ於テ明ナル所ナリト雖モ議員ノ職務ヲ以テ選舉人

ノ委任ニ出ツルモノ、如ク視做シ議員ハ選舉人ノ示シタル條件ヲ恪遵ス可キモノト爲スノ誤ヲ來サシランカ爲メニ特ニ其明文ヲ掲クルナリ

處務規程ハ市制第三十七條ヨリ第四十七條ニ至リ町村制第三十九條ヨリ第四十九條ニ至ルノ各條ニ於テ之ヲ設ク此條規ハ概テ説明ヲ要セサル可シ只茲ニ一言ス可キハ町村會ハ通例町村長若クハ其代理者タル助役ヲ以テ議長トシ(町村制第二十九條)市會ハ別ニ互選シテ議長ヲ置ク(市制第二十七條)此區別ヲ爲シタル所以ハ町村ニ在テハ町村長及助役ノ外事務ニ熟練スル者多カラスシテ殊ニ議長ノ任ニ堪フル者ハ概テ少ク且一人一個ノ責任ヲ以テ行政ノ全体ニ任スル場合ニ於テハ成ル可ク議員ト密接ノ關係ヲ有セシムルコト必要ナレハナリ町村制第四十四條ノ場合ヲ除クノ外町村長及助役ニシテ議決權ヲ有スルハ其議員ヲ兼スル時ニ限ル可シ

市制町村制第三章 市町村行政

代議ト行政トハ各別個ノ機關ヲ設ケサル可カラサルハ己ニ之ヲ記述シタルカ如シ而シテ町村ノ行政ハ之ヲ町村長一人ニ任シ補助員即助役一名若シクハ數名ヲ置キ以テ之ヲ補助セシム市ニ於テハ之ヲ市參事會ニ任セリ市長ハ其會員ノ一人ニシテ其會ノ事務ヲ統理シ外部ニ對シテ參事會ヲ代表スルノ權ヲ有ス即町村ハ特任制ヲ取リ市ハ集議制ニ依ルモノナリ抑地方ノ自治行政ニハ集議制ヲ以テスルニ若クモノアラス然ルニ獨リ市ニ施シテ之ヲ町村ニ適用セサル所以ノモノハ集議制ハ特任制ニ比シ頗ル錯綜ニ涉ルノ弊アリ而シテ小町村ノ行政ハ力メテ簡易ノ編制ニ依ルヲ要スルヲ以テナリ且集議制ヲ行ハント欲スレハ名譽職ヲ以テ行政ニ參與ス可キ適任者ヲ多ク求メサルヲ得ス而シテ此事タル今日ノ情況ニテハ都會ノ地ニ非サレハ望ム可カラサレハナリ大町村ニ於テモ亦此集議制ヲ施行ス可キ必要アリヤ否又之ヲ施行シ得可キヤ否ハ姑ク將來ノ變遷ヲ俟テ知ル可キナリ

本制市町村行政ノ條規ハ力メテ活用ノ區域ヲ廣クシ以テ各地方ノ情況ヲ斟酌スルノ餘地アラシメンコトヲ務メタリ

町村長、助役、市參事會及市長ハ皆是市町村ノ機關ニシテ國ニ直隸スル機關ニアラス是ヲ以テ此機關ニ屬スル吏員ハ總テ市町村自ラ之ヲ選任スルヲ當然トス是各國ノ通則ニシテ其效益亦實際ノ經驗ニ著ハル、所ナレハ本制モ亦之ニ倣ヘリ(市制第五十一條、第五十八條、第五十九條、第六十條、第六十一條、町村制第五十三條、第六十二條、第六十三條、第六十四條、第六十五條)然レトモ市町村ハ又國ノ一部分ニシテ市町村ノ行政ハ一般ノ施政ニ關係ヲ及ホシ從テ國家ノ利害ニ關セサルコトナシ且市町村及其吏員ニ委任スルニ國政ニ屬スル事務ヲ以テスルコトアリ市制第七十四條、町村制第六十九條ノ如キ是ナリ市長ノ選任ハ市會ヨリ候補者ヲ推薦シ裁可ヲ求ムルノ例アルカ如キモ亦此理由アルニ依ル(市制第五十條)但其選任ノ例ヲ異ニスト雖モ市長ハ均ク市ノ機關ニシテ一ノ市吏員ナリ法律上ヨリ其地位ヲ論

スルトキハ一面ハ市ニ屬シ一面ハ國ニ隸ス猶町村長ノ町村ト國トニ兩屬スルカコトシ此資格ハ選任ノ例ヲ異ニスルガ爲メニ變更スルコトナシ其他樞要ノ市町村吏員即町村長、市町村助役、收入役ハ監督官廳ノ認可ヲ受ケシメ其ノ認可ヲ得サルトキハ其選舉ハ無効ニ屬スルカ故ニ(市制第五十二條、第五十八條、町村制自第五十九條、至第六十一條)國ノ治安ヲ保持スル上ニ就テハ十分ノ權力ヲ有スルヲ得可シ又之ヲ認可スルニ方テ徒ニ其活動ヲ牽制セサルコトヲ欲シ認可ヲ拒ムニ一定ノ理由ヲ示サス其地ノ事情ト人物トヲ參酌シテ其認可不認可ヲ決スルヲ得セシメントテ其裁決ノ權ハ專ラ地方分權ノ原則ニ準シ之ヲ郡長又ハ府縣知事ニ委任セリ然レトモ其公平ヲ失スルノ弊ヲ防カンカ爲メ若クハ偏私ノ誹ヲ免レンカ爲メニ其認可ヲ拒マントスルトキハ郡參事會又ハ府縣參事會ノ同意ヲ得ルヲ必要ト爲セリ又已ニ官廳ノ認可ヲ受ケシムルノ法ヲ設クルトキハ其結局ノ處分法ナカル可カラズ即其選舉遂ニ適任ノ人ヲ得スシテ已ムヲ得サルキハ官廳ヨリ其代理者ヲ特選シ若クハ官吏ヲ派遣シ市町村ノ事務ヲ執ラシムルヲ得可シ以上ノ例規ニ依リ市町村吏員ノ選舉ヲ以テ之レヲ市町村ニ委任スルモ國ノ治安統一ヲ保ツコトニ於テ憂フル可キノ弊ナキヲ信ス

町村ニ於テ吏員ヲ選任スルノ權ハ之ヲ町村會若クハ總會ニ委任シ唯使下ニ限り之ヲ町村長ニ委任シ(町村制第五十三條、第六十二條、第六十三條、第六十四條、第六十五條)市ニ於テハ之ヲ市參事會ニ委任シ參事會員、委員及收入役ノ選定ニ限り之ヲ市會ニ委任セリ(市制第五

十二條、第五十八條、第五十九條、第六十條、第六十一條)

市町村ノ吏員ヲ選任スルニ付テハ固ヨリ法律上ノ要件ヲ恪守セサル可カラズ其要件ハ市制第五十五條、第五十八條、第六十條、第六十一條、町村制第五十三條、第五十六條、第六十四條、第六十五條ニ在リ其他ノ制限ハ刑法等其他ノ法律ニ存ス

其他市町村吏員組織ノ大要ハ法律中ニ定ムルモノアリト雖モ各地方情況ヲ異ニスルヲ以テ市町村ノ自主權ニ廣濶ナル餘地ヲ與フルコトヲ得可ク又之ヲ與フルヲ要スルナリ

本制ニ定ムル市町村吏員ハ左ノ如シ

一 町村長

町村長ハ町村ノ統轄者ナリ即町村ノ名ヲ以テ委任ノ強制權ヲ執行スル者トス其強制權ノ幾部分ハ既ニ町村制中ニ制定セリト雖モ(例ヘハ町村制第一百二條ノ類)多クハ別法ヲ以テ之ヲ設ケサル可カラズ其他町村長ハ町村ノ事務ヲ管理スルノ任アリ故ニ一方ニ在テハ町村ニ對シテ其執行ノ責任ヲ帶ヒ一方ニ在テハ法律ノ範圍内並官廳ヨリ其權限内ニテ發シタル命令ノ範圍内ニ於テ百般ノ事項ニ涉リ町村ノ幸福ヲ增進シ安寧ヲ保護スルヲ務メトス而シテ町村長ニ於テ町村會ノ議決ニ遵依ス可キ程度ハ町村制第三十三條以下ニ詳ナリ同條記載ノ事件ニ就テハ町村長ハ議會ノ議決ニ依ラスシテ之ヲ施行スルヲ能ハサル而已ナラス猶其議事ヲ準備シ議決ヲ執行スルノ義務アリ故ニ町村會ニ於テ法律ニ背戾スルコトナク其權限内ニ

テ議決シタル事項ハ假令町村ノ爲メニ不便アリト認ルモ町村長ハ之レヲ執行セザルヲ得ス  
 唯町村長ト其議決ニ對シテ大ニ意見ヲ異ニシ公衆ノ利益ヲ害スト認ムルトキハ町村制第六  
 十八條第二項第一ニ從テ議決ノ執行ヲ停止スルノ權ヲ有ス即チ之レヲ停止シテ郡參事會ノ  
 裁決ヲ請フコトヲ得可シ其法律命令ニ背キ又ハ權限ヲ越ユルモノモ亦之ニ同シ尤僅ニ利害  
 ノ見込ヲ異ニシタルノミニテハ未タ以テ之ヲ停止スルノ理由ト爲スニ足ラス必公益ヲ損害  
 スト認ムル時ニ限ル可シ蓋公益ノ爲メニ町村長ヲシテ此停止權ヲ有セシムルハ或ハ之ヲ濫  
 用スルノ恐ナキニ非スト雖モ今日町村治ノ未タ整備セサルヨリ考フルトキハ姑ク此例ヲ存  
 スルノ己ムヲ得サルモノアリ又監督官廳ヨリ町村長ニ停止ヲ命スルハ國ノ利害ニ關シ己ム  
 ナ得サルモノニシテ監督官廳モ亦常ニ町村會議決ノ報告ヲ徵シテ其注意ヲ怠ラサル可シ其  
 停止權ヲ濫用スルノ弊ハ參事會ノ參與アルヲ以テ自ラ之ヲ防制スルコトヲ得可シ其行政裁  
 判所へ出訴スルノ權ヲ法律勅令ニ背戻シ及權限ヲ踰越スルノ場合ニ限リタルハ行政裁判所  
 ハ專ラ法律上ノ爭論ヲ判決ス可キモノニシテ公益ニ關スル事ハ一ニ利害ノ争ニ過キサレハ  
 ハナリ郡參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル  
 者ハ行政裁判所ニ出訴シ若クハ內務大臣ニ訴願スルヲ得可キコト町村制第一百十九條及第百  
 二十條ノ規定ニ依テ明ナリ  
 其他町村長ノ町村事務ハ町村制第六十八條第二項第二ヨリ第九ニ列載シタル條件ニ依テ明

ナリ其各條件ニ關シテハ茲ニ説明ヲ要セサル可シ町村會ノ定額豫算ニ關スル職權ニ依テ町  
 村長ノ權利ニ制限ヲ加フル所以ハ第四章ニ於テ之ヲ説明ス可シ又町村會ノ議決町村制第百  
 二十五條以下ニ從ヒ官ノ許可ヲ受ク可キモノハ之ヲ受クルノ前ニ施行スルヲ得サルコト固  
 ヲリ言テ俟タス且時宜ニ依リテハ監督官廳ノ懲戒權ヲ以テ之ヲ強制スルヲ得可シ  
 町村制第六十九條ニ列記シタル事務ニ關シテハ町村長ハ全ク前述ノ場合ト異ナリタル地位  
 ナ有スルモノトス己ニ前章ニ記述シタル如ク國ハ町村ヲシテ國政ニ關ラズ事務ニ參與セシ  
 ムルコトアル可シ之ヲ參與セシムルノ法ニアリ國政ニ屬スル事務ヲ以テ町村ニ委任シ其自  
 治權ヲ以テ之ヲ處辨セシムルモノアリ又其事務ヲ町村ニ委任セシテ直接ニ町村長其他町  
 村ノ吏員ヲ指定シテ之ヲ委任スルモノアリ此區別ノ緊要ナル點ハ第一ノ例ニ據レハ斯ル事  
 件ノ議決モ亦町村會ノ職權ニ歸シ町村長若クハ當該吏員ハ此事件ニ關シ町村會ニ對シテ責  
 任ヲ帶ヒ且常ニ其監視ヲ受クルモノトシ第二ノ例ニ據レハ町村長ハ直接ニ官命ニ依テ事務  
 ニ從事シ町村會ト相關セズ此事務ニ關スル指揮命令ハ直ニ所屬官廳ヨリ之ヲ受ケ特ニ其官  
 廳ニ對シテ責任ヲ帶ブルモノトス元來甲乙二例ヲ比較スルトキハ互ニ得失アリト雖モ今日  
 ノ情況ニ照シ事務ノ舉行ヲ期スルニ付テハ乙法ヲ行フニ如カス故ニ本制ハ乙法ヲ採リテ之  
 ヲ第六十九條ニ明言セリ但細則ニ涉ルモノハ別法ニ讓ラントス且此乙法ヲ行フニ至テハ其  
 委任ノ職務ニ付キ生スル所ノ費用ハ何レノ負擔ナルカチ明言セサルヲ得ス依テ同條末項ニ



之ヲ掲ク其他町村固有ノ事務ニ要スル費用ハ町村ノ自ラ負擔ス可キコト言テ俟タヌノ明ナリ

二 町村助役

助役ハ各町村ニ一名ヲ置クヲ通例トス然レトモ各地方ノ需要ニ應シテ或ハ之ヲ増加ス可キコトアリ之ヲ町村條例ノ定ムル所ニ任セリ(町村制第五十二條)助役ノ町村長ニ屬スルハ共ニ集議體ヲ爲スニアラス町村役場ノ事務ハ皆町村長ノ專決ニ在リ其責任モ亦町村長一人ニ屬ス故ニ助役ハ其補助員ニシテ一ニ町村長ノ指揮ニ從ヒ之ヲ補佐スルモノトス唯町村長故障アリテ之ヲ代理スル場合及委任ヲ受テ事務ヲ專任スル場合ニ限り自ラ其責任ヲ負フモノトス但事務ヲ委任スルニハ町村會ノ同意ヲ得ルヲ要シ(町村制第七十條)其町村長ニ委任ノ事務ニ係ルトキハ監督官廳ノ許可ヲ受クルヲ要ス(町村制第六十九條)

三 市參事會

市ニ於テハ市長及助役ヲ置クコト町村ノ制ニ同クシテ別ニ名譽職參事會員若干名ヲ置キ合セテ集議體ヲ組織シ之ヲ市參事會トス是町村ノ制ト異ナル所ナリ助役及名譽職參事會員ノ定員ハ市制四十九條ニ之ヲ定ムト雖モ市ノ情況ニ依リ増減ヲ要スルトキハ市條例ヲ以テ之ヲ増減スルコトヲ得可シ(市制第四十九條)市長ハ一箇ノ決議權ヲ有シ員數相半スル時ハ專決スルコトヲ得此集議會ノ職務ハ全ク町村長ノ職務ト其ノ例ヲ同クス(市制第六十四條)其詳細ノ說明ハ茲ニ要セサル可シ其處務規程ハ本例ニ於テ多ク設クルヲ要セス(市制自第六十

五條至第六十八條其細目ニ至テハ內務省令ヲ以テ之ヲ定ムルコトアル可シ

市長ハ市ノ固有ノ事務ヲ處理スルト委任ノ事務ヲ處理スルト各別段ノ地位ヲ占ムルモノトス即チ市ノ固有ノ事務ニ就テハ參事會ノ議事ヲ統理シ之レヲ準備シ議決ヲ執行シ時ニ臨テハ議決ノ執行ヲ停止シ(市制第六十五條)外部ニ對シテハ市ヲ代表スルモノニシテ唯急施ヲ要スル場合ニ限り議決ヲ俟タヌシテ專行スルコトヲ得可シ(市制第六十八條)然レトモ市制第七十四條ニ列載スル委任ノ事務ニ就テハ參事會ノ參與ヲ受ケスシテ專行スルモノトス此區別アルハ即前述ノ乙法ヲ取り之ヲ市ニ委任セスシテ特ニ市長ニ委任シタルニ依ル市助役及其他ノ參事會員ハ會中ニ在テハ市長ト同一ノ議權ヲ有スト雖モ議事外ニ在テハ町村助役ノ町村長ニ於ケルト同ク市長ニ對シテ補助員ノ地位ニ在ルモノトス(市制第六十九條)第七十四條(第二項)殊ニ都府ノ地ニ於テハ分業ノ必要ナル可キヲ以テ事務ヲ分テ參事會員ニ專任セシムルコト最緊要ナリトス此需要ニ應センカ爲メ本制ハ之ヲ市條例ノ適宜定ムル所ニ讓リ(市制第六十九條第三項)以テ各地方ノ便ニ從ハントス

四 委員

委員ヲ設クルハ市町人民ヲシテ自治ノ制ニ習熟セシメシカ爲メニ最效益アリ委員アルトキハ多數ノ公民ヲシテ市町村ノ公益ノ爲メニ力ヲ竭スコトヲ得セシメ自治ノ効用ヲ擧グルルコトヲ得可シ何トナレハ市町村公民ハ特リ會議又ハ參事會ニ加ハルノミナラス委員ノ列ニ入

リテ市町村ノ行政ニ參與シ之ニ依テ自ラ實務ノ經驗ヲ積ミ能ク施政ノ難易ヲ了知スルコトヲ得可シ又地方ノ事情ヲ表白スルノ機會ヲ得テ大ニ專務吏員ノ短處ヲ補フコトヲ得可シ蓋シ委員ハ自治ノ制ニ於テ緊要ナル地位ヲ占ムルモノニシテ本制施行ノ際委員ノ設ケヲ促シテ市町村公民ヲシテ之ニ參與セシメシムコトヲ務ム可シ委員ノ廢置ハ固ヨリ市會町村會ノ決議ニ在リ其組織及職務ノ市町村條例ノ定ムル所ニ在リト雖モ町村長及市參事會ハ正系ノ行政機關ニシテ委員ハ其一部分ニ參與スルニ過キサレハ委員ハ町村長若クハ市參事會ニ從屬シ概テ市長若クハ町村長ヲ以テ委員長ト爲シ參事會員ヲ以テ多ク之ニ加ヘ市會町村會議員モ亦成ル可ク此委員ニ列セシメシムコトヲ要ス市會町村會ノ議員ニシテ行政ノ事務ニ加ハルトキハ能ク施政ノ緩急利害ヲ辨識シ行政吏員ト互ニ協同シテ事務ヲ擔任スルノ慣習ヲ生シ自ラ代議機關ト行政機關トノ軋轢ヲ防制スルコトヲ得可シ

五 區長

區域廣濶又ハ人口稠密ノ地ハ施政ノ便ヲ計ランカ爲メ之ヲ數區ニ分ツノ必要アル可シ故ニ本制ハ市町村ニ區ヲ劃設スルコトヲ許シ之ニ區長及代理者ナル行政ノ機關ヲ設置セリ此機關ハ其市町村ノ行政廳ニ隸屬スルモノニシテ其指揮命令ヲ奉シテ事務ヲ區内ニ執行スルモノトス其委任事務ノ範圍ハ土地ノ情況ト市町村行政廳ノ酌量ニ在ルモノニシテ豫メ之ヲ定メスト雖モ區長ハ名譽職ニシテ別ニ區ノ附屬員ナル者アルニアラサレハ三府ヲ除クノ外實

際此事情ヲ斟酌セサル可カラヌ要スルニ區ハ市町村内別ニ特立シタル一ノ自治体タルニ非ス區長モ亦其固有ノ職權アルニ非スシテ單ニ町村長市參事會ノ事務ヲ補助執行スルノ便ニ供フルニ過キス故ニ區長ハ市町村ノ機關ニシテ區ノ機關ニ非ス區ハ法人ノ權利ヲ有セス、財産ヲ所有セス、歲計豫算ヲ設ケヌ又議會若クハ其他ノ機關ヲ存スルコトナシ蓋區ヲ設クルトキハ施政ノ周到ナルヲ得可シ、一市町村内ノ各部ニ於テ利害ノ軋轢スルヲ調和シ、市町村費賦課ノ不平衡ヲ矯メ又能ク行政ノ勞費ヲ節略スルヲ得可シ要スルニ區長ヲ設クルハ更ニ自治ノ頁元素ヲ市町村制中ニ加フルモノニシテ舊制ノ伍長組長等ノ例ヲ襲用セルナリ但從前ノ區内ニ存スル戸長ノ類ト混ス可カラヌ又區ニシテ從來固有ノ財産アル時ノ例ハ第五章ノ說明ニ詳述ス可シ

六 其他ノ市町村吏員

以上市町村吏員ノ外收入役アリ(市制第五十八條、町村制第六十二條)其職掌ハ市町村有財産ト連帶シテ說明ス可シ又書記其他技術上ニ要スル吏員アリ又使丁ナル者アリ機械的ニ使用スル者トス此等ノ吏員ヲ置キ相當ノ給料ヲ與フルハ市町村ノ義務トス(市制第一百七條、町村制第二十一條)

町村ニ於テハ書記其他ノ吏員ヲ置キ俸給ヲ支出スルノ義務アリト雖モ本制ハ小町村ノ爲メ一ノ便法ヲ設ケ町村長ニ一定ノ書記料ヲ給シテ其便宜ニ從ヒ書記ノ事務ヲ保擔スルヲ許サントス此便法ヲ設ケ及其書記料ノ額ヲ定ムルハ町村會ノ職權ニ在ル可キモノトス(町村制

第六十三條第一項(若シ町村長ニ於テ其金額ニ不足アリト爲ストキハ町村制第七十八條ニ依リ之ヲ郡參事會ニ申立ツルヲ得可シ其他ノ細目ハ今之ヲ制定セズ蓋書記料ヲ給與スルトキハ町村長ニ於テハ自ラ其事務費ヲ節約スルヲ得可シ監督官廳モ亦能ク是ニ注意シ公務上支障ナキ限リハ町村ニ說示シテ繁雜ヲ省キ冗費ヲ減センコトヲ務メサル可カラズ要スルニ本制ハ分權ノ主義ニ依リ名譽職ヲ設ケ從來ノ町村費ヲ節減センコトヲ期スト雖モ若シ市町村ニ於テ度外ノ節約ヲ行ヒ依テ公益ヲ害スルニ至ラントスルトキハ監督官廳ニ於テハ則チ之ヲ干涉スルノ道アリ

市ハ勿論其他大ナル町村ニ於テハ文化ノ進ムニ從ヒ高等ノ技術員(法律顧問、土木工師、建築技師、衛生技師等ノ類)ヲ使用ス可キ必要ヲ生スルニ至ル可シ之ヲ使用スルニハ或ハ通常雇入ノ契約ヲ以テシ或ハ市町村吏員ト爲スコトアル可シ又時宜ニ依リ之ヲ有給ノ助役トシテ任用スルノ便アリ本制ハ此件ニ關シテハ全ク市町村ノ自由ニ任セントス尤警察、學事等ノ爲メニ特別ノ人員ヲ置クニ付テハ別段ノ法規ヲ要ス可シト雖モ皆是別法ヲ以テ定ム可キモノナリ

市町村ノ公務ニ任スル者ハ名譽職ト專務職トノ二種ニ分ツト雖モ本制ニ於テ主トシテ名譽職ヲ擴張シタル理由ハ上ニ之ヲ論述シタルカ如シ又本制ニ於テ名譽職ト爲ス可キコトヲ規定シタル場合ニ於テハ市町村ハ必之ニ遵依ス可シ決シテ有給職ト爲スヲ得ズ然レトモ小町村ニ於テ名譽職ニ屬スルモノト雖モ大市町村ニ在テハ專務吏員ヲ置クヲ要スルコトアリ專務職トハ特別ノ技術若シハ學問上ノ養成ヲ要スル職務並事務繁多ニシテ本業ノ餘暇ヲ以テ無給ニテ負擔セシムルコト能ハサル職務ナリ此ノ如キ職務ハ有給吏員ト爲スヲ常例ト爲セリ此條理ノ範圍内ニ於テ市町村ハ自己ノ便宜ニ依リ有給吏員若クハ無給吏員ヲ置ク可キモノトス

今本制ニ於テハ市長市助役市町村收入役及市町村附屬員使丁ハ皆專務吏員ト爲ス可キ者トス町村長町村助役ハ名譽職ト爲スヲ原則トスト雖モ町村ノ情況ニ依テ之ヲ有給ノ專務職ト爲スヲ得セシム(町村制第五十五條第五十六條)市參事會員(市長助役ヲ除ク)委員區長ノ名譽職トス但三府ノ區長ハ有給吏員ト爲スコトアル可シ

專務吏員及名譽吏員ハ共ニ市町村吏員ナリ本制ニ於テ其區別ヲ爲サルモノハ總テ此兩種ニ適用スルモノトス又市町村吏員タル者ハ其何レノ種類ニ屬スルニ拘ラズ法律ニ準據シテ所屬ノ官廳及市町村廳ニ對シテ從順ナル可ク均ク懲戒法ニ服從ス可シ其懲戒ヲ行フハ町村長及市參事會(町村制第六十八條第二項第五、市制第六十四條第二項第五)及監督官廳(郡長、府縣知事)ノ任トス(町村制第二百二十八條、市制第二百二十四條)懲戒ノ罰トシテ本制ハ左ノ三種ヲ設ク

一 罷責

二 過怠金  
三 解職

誹責又ハ過怠金ニ處スルハ當該吏員ノ專決ニ屬シ其處分ニ對スル訴願モ均ク當該吏員ノ裁決ニ任シ其裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得セシム是專ラ懲戒權ノ執行ヲ嚴肅ナラシムル所以ナリ獨リ解職ノ處分ニ對シテハ大ニ保護ヲ加サル可ラス(但隨時解職シ得可キ吏員ハ懲戒裁判ノ法ニ依ラス解職スルヲ得セシム)故ニ本制ハ解職ノ理由ヲ指定セルノミナラス(但行狀ヲ索亂シ廉耻ヲ失フトハ公務上ニ止マラス私行ニ關スルヲモ含蓄スルモノナリ)郡參事會府縣參事會ナル集議体ノ裁決ニ任セリ(市制第二百二十四條、町村制第二百二十八條)

事務吏員及名譽職吏員ハ職務上大率ニ同一ノ權利義務ヲ有スト雖モ深ク其性質ニ就テ考フルトキハ互ニ相異ナル所ナリ專務職ヲ辭スルハ吏員ノ隨意ニ在リト雖モ名譽職ハ公民ノ義務トシテ之レニ應セサルヲ得ス其己ニ擔當シタル職務ヲ繼續スルノ義務アルト否トニ付テモ亦此差別アリ(市制第八條、第五十五條第三項、町村制第八條、第五十七條)又市制第五十六條第五十八條及町村制第五十八條、第六十二條ノ制限ノ如キハ專務吏員ニ非サレハ負擔セシムルヲ得ス市制第五十九條、町村制第六十三條ニ記載シタル吏員ハ其任用ノ時此等ノ關係ヲ約定スルヲ可トス有給職ニ任用スルニ其市町村ノ公民タル者ニ限ラサルハ徒ニ選

擇ノ區域ヲ減縮セサランカ爲メナリト雖モ高等ノ有給吏員ニハ其職ニ就クト同時ニ其市町村ノ公民權ヲ付與スルヲ當然ナリ(市制第五十三條第五十八條、町村制第五十六條第二項)專務吏員ハ一身ノ全力ヲ舉ケテ市町村ノ爲メニ盡ス可キヲ以テ相當ノ給料ヲ受クルハ元ヨリ至當ナリト雖モ名譽ノ爲メニ就職スル公民ニハ給料ヲ給セス(市制町村制第七十五條)尤市町村ノ公務ノ爲メニ要スル實費ハ之ヲ辨償セサルヲ得ス唯其名譽職ノ事務頗ル繁忙ニシテ本業ヲ妨ケラル、トキハ多少ノ報酬ヲ與フルハ當然ナリ其額ハ固ヨリ勤勞ニ相當セサル可カラズ此規則ハ町村長(町村制第五十五條第二項)ハ勿論町村助役及名譽職市參事會員ニシテ市町村事務ヲ分任スル者(市制第六十八條第二項、町村制)第五十五條第二項)ノ爲メニ之ヲ設ク其報酬額ハ市町村會之ヲ議定シ(市制町村制第七十五條)其額ニ關スル爭論ハ市制町村制第七十八條ニ依テ處分シ司法裁判ヲ求ムルヲ許サズ有給市町村吏員ノ財産上ノ要求ハ上ニ記載シタル理由アルニ依リ其職重ケレハ從テ其給料ニ關シテ官廳ノ干涉ヲ要スルコト多シトス尤給料額ハ元來市町村ノ自ラ定ムル所ニ任シ條例ヲ設ケテ之ヲ一定シ又ハ選任ノ前ニ方テ議會ヲ裁決ヲ以テ之ヲ定ム可シ然レドモ監督官廳ハ斯ク市町村ノ定ムル給料ヲ以テ多キニ過キ又ハ不足アリト爲ストキハ認可ヲ拒ミ所屬ノ參事會ヲシテ之ヲ斷定セシムルノ權利アリ有給市町村吏員ニハ退隱料ヲ給サルヲ當然トス然レモ市町村吏員ニ對シテ官吏ノ恩給令

適用スルコトヲ得ス是其地位ノ異ナルノミナラス市町村吏員ハ定期ヲ以テ選任セラレ任期  
 満限ノ後ハ再選若クハ再任ヲ受ルニ非レハ其職ニ在ラサルヲ以テナリ若シ其吏員任期滿  
 限後再選若クハ再任セラレサルトキハ遽ニ糊口ノ道ヲ失フニ至ル可シ故ニ此結果ヲ防ク  
 ニ非サレハ一方ニ在テハ有力ノ人進テ市町村ノ職ニ就クコトヲ屑シトセサル可ク一方ニ在  
 テハ再選ニ依テ生計ヲ求ムルカ如キ輩ヲシテ常ニ市町村會ノ鼻息ヲ窺ヒ以テ公益ヲ忘レシ  
 ムルコトヲナシトセス加フルニ市町村ノ職務ハ昇等増給ノ途少キヲ以テ其退隱料ヲ給スルハ  
 官吏ヨリ厚クスルヲ至當トス然レモ目下一定ノ法律ヲ以テ之ヲ定メヨリハ寧ロ市町村ノ  
 條例ヲ以テ之ヲ設定セシムルノ便ナルニ若カサルナリ  
 有給ト無給トヲ論セス凡市町村吏員ノ職務上ノ收入ハ市町村ノ負擔タルコト疑テ容レヌト  
 雖モ之カ明文ヲ掲クルモ亦無用ニアラサル可シ(市制町村制第八十條)  
 市町村ト吏員トノ間ニ起ル給料及退隱料ノ爭論ハ司法裁判ニ付セス市制町村制第七十八條  
 ニ依テ處分ス可キナリ其保護ハ此方法ヲ以テ足レリトス之ニ反シテ市長ト國庫トノ間ニ起  
 ル給料及退隱料ノ爭論ハ一般ノ法律規則ニ據テ處分ス可シ  
 結局ニ至テ猶注意ス可キコトアリ抑退隱料ノ規則ヲ設クルトキハ市町村ノ負擔ヲ加重スル  
 ノ恐アリト雖モ他國ノ實驗ニ據レハ決シテ多額ノ負擔ヲ爲スモノニアラス市町村ニ於テハ  
 多クハ適任ノ吏員ヲ再選シ吏員モ亦再選ヲ受ケサルトキハ必他ノ地位ヲ求メサル者アラサ

ル可シ故ニ實際退隱料ヲ支出スルノ場合ハ甚少ナル可キナリ又一方ヨリ論スルトキハ市町  
 村ノ盛衰ハ有爲ノ人材ヲ得ルノ多少ニ關シ有爲ノ人材ヲ得ルト得サルトハ其生計ヲ安全ナ  
 ラシムルト否トニ關スルモノニシテ市町村自治ノ權ヲ得ルニ於テハ退隱料負擔ノ如キハ之  
 ヲ重シト謂フ可カラズ況ヤ有給ノ町村長助役ヲ設ケサル町村ニ於テハ此負擔ヲ受クルノ場  
 合少キニ於テヤ又況ヤ名譽職ヲ設ケルニ於テハ行政ノ費用大ニ減少ス可キニ於テヤ蓋  
 市町村ノ繁榮ハ斯ノ如キ法アリテ始メテ將來ニ期望ス可キナリ

市制町村制第四章 市町村有財産ノ管理

市町村ニ於テ自ラ其事業ヲ執行スルニ付テハ必之ニ要スル所ノ資金ヲカカス故ニ各  
 市町村固有ノ經濟ヲ立テ以テ必要ノ費用ヲ支辨スルノ道ヲ設ク可シ則市町村ハ財産權ヲ有  
 スルコト概テ一個人ト同一ナリ然レトモ細ニ觀察スルトキハ其一個人又ハ私立組合ノ類ト  
 相異ナルモノハ市町村ノ事業及支出ノ大半ハ法律規則ニ依テ定マリ市町村民ニ對シテ其義  
 務トシテ負擔セシムルコトヲ得ルノ一點ニ在リ蓋シ市町村ノ經濟ハ之ヲ汎論スルトキハ一  
 而個人ト同一ノ權利ヲ有スルモノニシテ市町村ハ自ラ其經濟ヲ管理スルノ專權アリト謂フ可  
 シシテ之ニ二様ノ制限アリ第一市町村ノ資力ハ大ニ國家ノ消長ニ關係アルヲ以テ政府ハ須  
 シ此點ニ注意セサル可カラズ第二政府ハ市町村ノ經濟ヲ以テ國ノ財政ニ抵觸セサラシメ之  
 カ爲メニ國ノ財源ヲ涸竭セサランコトヲ務メサル可カラズ故ニ市町村ノ財政ヲ以テ立法ノ範

國ニ入レ立法權ヲ以テ市町村ノ財政ニ關スル法規ヲ設ケテ之ヲ恪遵セシム可キ而已ナラズ其經濟上ノ處分荷モ國ノ利害ニ關涉スルモノハ皆政府ノ許可ヲ得セシメントス以上ノ論點ニ關スル規定ハ市制第四章及第六章并町村制第四章及第七章ニ載ス抑市町村ノ經濟ニ對シ政府ノ干渉スル所ノ程度ハ自治制度ヲ論ズル者ノ視ル所ニ依テ各異ナル所アル可シト雖モ要スルニ市町村ノ行政ニ對シ官廳ノ監視ヲ重シテ之ヲ拘束スルニ過クルトキハ其弊ヤ遂ニ市町村ノ便宜ヲ妨ケ其自ラ進テ幸福ヲ求ムルノ道ヲ阻碍スルヲ免レサラントス然レトモ一方ヨリ見ルトキハ自ラ從來ノ慣行アリテ遽ニ之ヲ變シ難キモノアリ故ニ漸チ以テ市町村ノ自主ヲ擴張スルヲ是ナリトス此點ニ於テハ本制ハ最慎重ヲ加ヘ今日ノ情勢ニ照シテ適度ヲ得タリトスル所ヲ以テ制定セリ

市町村ノ法人タルハ已ニ法律ノ認ムル所ナレハ市町村ノ財產ヲ所有スルノ權利ヲ有ス可キニト固ヨリ疑ヲ容レズ而シテ市町村財產ニ二組ノ別アリ(甲)市町村ノ費用ヲ支辨スルカ爲メニ消費スルモノアリ例ヘハ土地家屋等ノ貸渡料、營業ノ所得、市町村稅及手數料等ノ如キ是ナリ又基本財產ト稱スルモノアリ基本財產ハ其入額ヲ使用スルニ止マリ其原物ヲ消耗セサルモノトス蓋此區別ヲ立ツルハ市町村ノ資力ヲ維持スルカ爲メニ極メテ緊要ナルモノニシテ國家ハ特ニ市町村ノ基本財產ヲ保護シテ其濫費ヲ防カサル可カラズ且經常歲入ノ外ニ臨時ノ收入例ヘハ寄附金數ノ如キハ成ル可ク經常歲費ニ充テシメサルヲ要ス唯寄附者ニ於

テ寄附金支出ノ目的ヲ定メタルカ或ハ非常ノ水害若クハ凶荒等ノ爲メ經常ノ收入ヲ以テ其費途ニ充ツルニ足ラサルカ如キノ場合ハ固ヨリ別段ナリト雖モ是亦上司ノ許可ヲ受クルヲ要スト爲スハ其經濟上ノ處分ヲ重スル所以ナリ市制第八十一條、第二百二十三條第二、町村制第八十一條、第二百二十七條第二(乙)凡市町村ノ財產ハ市町村一般ノ爲メニ使用スルコト固ヨリ言テ俟タズ故ニ特ニ之ヲ法律ニ掲載スルヲ要セスト雖モ若シ住民中其財產ニ對シテ特別ノ權利ヲ有スル者アルトキハ自ラ其證明ヲ立ツルノ義務アリ即民法上其證明ヲ認ムルニ於テハ特別ノ權利ヲ有スルモノトシ其證明ナキモノハ即一般ノ使用權アルモノトス

(市制町村制第八十二條)

市町村ノ所有ニ屬スル不動産ノ使用ヲ直接ニ住民ニ許スハ從來ノ實例少シトセス故ニ其舊慣アルモノハ特ニ之ヲ存シ今ヨリ後ハ概シテ新ニ使用ヲ許スヲ禁セリ(市制町村制第八十三條、第八十四條)又一方ニ於テハ使用權ニ相當スル納稅義務ヲ定メ(市制町村制第八十五條)且條例ニ依リ使用者ヨリ金圓ヲ徵收スルコトヲ許セリ(市制町村制第八十四條)然レトモ其使用ヲ許シタル物件ハ元來市町村ノ所有物ニシテ使用ノ權利ハ市町村住民タル資格ニ隨伴スルモノナレハ市町村ハ固ヨリ使用權ヲ制限シ若クハ取上クルノ權利ナカル可カラス(市制町村制第八十六條)但其議決ハ上司ノ許可ヲ受クルヲ要スト爲スハ(市制第二百二十三條第四、町村制第二百二十七條第四)細民無產ノ徒ノ不利トナル可キモノヲ防カンカ爲メナリ之ヲ

要スルニ以上ノ規定ハ市町村住民タル資格ニ附隨スル使用權ニノミ用フルモノニシテ民法上ノ使用權ニハ關係ナキモノトス蓋此使用權ハ民法ニ據テ論定ス可キモノニシテ其爭論モ亦司法裁判所ノ判決ニ屬ス可キモノトス而シテ前段ノ使用權ニ關スル爭論ハ市制町村制第百五條ニ依テ處分ス可キナリ

市町村財産ノ管理ハ町村長及市參事會ノ擔任トス(町村制第六十八條、市制第六十四條)其管理上市町村會ノ議決ニ依ル可キハ町村制第三十三條、市制第三十一條及市制町村制第八十七條等ニ於テ又上司ノ許可ヲ受ク可キ條件ハ載セテ市制第二十三條、町村制第二百二十七條等ニ在リ

市町村ハ其住民ヲシテ市町村ノ爲メニ義務ヲ盡サシムルノ權利ナカル可カラズシテ此權利ナキトキハ共同ノ目的ヲ達スルコト能ハサルハ上既ニ之ヲ論述セリ其義務ノ廣狹ハ市町村事業ノ範圍ニ從ハサル可ラス其事業ハ全國ノ公益ノ爲メニスルモノアリ或ハ一市町村局部ノ公益ヨリ生スルモノアリ其全國ノ公益ニ出ツルモノハ軍事、警察、教育等ノ類ニシテ是皆別ニ規定ス可キモノトス其局部ノ公益ヨリ生スルモノ即共同事務ハ各地方ノ情況ニ從テ異同アレハ茲ニ枚舉スルニ暇アラズト雖モ農業經濟、交通事務衛生事務、等ノ如キハ其最重要ナルモノトス之ヲ要スルニ一市町村ノ公益上ニ於テ必要ナル事項ハ悉ク共同事務ニ屬ス可キナリ本制ニ於テ設ケタル委任ノ國政事務ト固有ノ事務即共同事務トノ區別ハ專ラ市町村

長ノ地位ノ兩岐ニ分ル、所ニシテ且市町村ノ必要事務ト隨意事務トノ區別ヲ立ツルノ根據トナルモノナリ即此區別ハ官權ノ及フ可キ限界ヲ立ツルニ在リテ必要事務ハ監督官廳ニ於テ強制豫算ノ權利(市制第一百八條、町村制第百廿二條)アルモノトス而シテ必要事務トハ委任ノ國政事務ハ勿論共同事務中市町村ノ需要ニ於テ闕ク可カラサルモノニ限リ必要事務ト謂フヲ得可シ市制町村制第八十八條ノ規定ハ實ニ此精神ニ出テタルモノニシテ市制第一百八條、町村制第百二十二條ニ云フ所ノモノモ亦同シ此ノ如キ規定アルトキハ共同行政上ノ事件ニ至ルマテ市町村ノ意向ヲ顧ミスシテ負擔ヲ受ケシムルコトヲ得從テ官ノ監督權ハ重キニ過クシテ恐アリト雖モ一方ヨリ考フルトキハ全ク檢束ヲ解キテ市町村ノ自由ニ任スルハ却テ將來ノ爲ノ顧慮スル所アリ故ニ市町村ノ公益上己ムヲ得サルモノハ姑ク市町村會ノ意見ニ拘ラス監督官廳ノ命令ヲ以テ之ヲ決行スルノ權利ヲ存セサルヲ得ス但其處分ニ對シテハ上訴ヲ許シタルヲ以テ專制ノ弊ヲ免ル、ヲ得可シ其他必要ノ支出ハ本制市町村ノ組織ニ關スル條件中ニ含有セリ隨意事務ニ就テハ市町村ニ十分ノ自由ヲ與フト雖モ若シ過度ノ負擔ヲ爲スニ至テハ之レヲ制スルニハ市制第百二十三條第六、町村制第百二十七條第六ノ規定ヲ適用スルヲ得可シ

市町村ニ於テ其費途ヲ支辨スルカ爲メニ左ノ歲入アリ  
一 不動産、資金、營業(瓦斯局、水道等ノ類)ノ所得

二 市町村ノ金庫ニ收入スル過怠金、料料(市制第四十八條、第六十四條第二項第五、第九十一條、第二百二十四條、町村制第五十條、第六十八條第二項第五、第九十一條、第二百十八條)

三 手数料、使用料

四 市税、町村税

手数料トハ市町村吏員ノ職務上ニ於テ一箇人ノ爲メ特ニ手数料ヲ要スルカ爲メ市町村ニ收入スルモノヲ謂ヒ使用料トハ一箇人ニ於テ市町村ノ營造物等ヲ使用スルカ爲メ其料金ヲ市町村ニ收入スルモノヲ謂フ例ヘハ手数料トハ帳簿記入又ハ警察事務上ニ於テ特ニ調査ヲ爲ストキノ收入ヲ謂ヒ使用料トハ道路錢橋錢等ノ類ヲ謂フ

手数料、使用料ノ額ハ法律勅令ニ定ムルモノ、外市町村會ノ議決ヲ以テ定ムヘキモノナリ(市制第三十一條第五、町村制第三十三條第五)尤市町村條例ヲ以テ一般ノ規定ヲ設ケ(市制町村制第九十一條)其地ノ慣行ニ依リ相當ノ手續ヲ以テ公告スヘキモノトス

且若シ手数料使用料ヲ新設シ又ハ舊來ノ額ヲ増加シ又ハ其徵收ノ法ヲ變更スルキハ内務大臣ノ許可ヲ受クルヲ要ス(市制第二百二十二條第二、町村制第二百二十六條第二)但徵收ノ法ヲ改ムルコトナクシテ唯其額ヲ減スルニ過キサルトキハ其許可ヲ受クルヲ要セズ  
手数料ヲ納ムルノ義務アルハ行政上ノ手数料ヲ要スル者ニシテ使用料ヲ納ムルノ義務アルハ

營造物等ヲ使用スル者トス之レヲ免除スルハ市制町村制第九十七條、第九十八條ノ場合ニ限ル可シ第九十六條ノ場合ハ町村ノ課税ヲ免除スルニ止リテ手数料、使用料等ノ事ニ及ハサルナリ

町村税ニ關シテハ本制ハ成ルヘク現行法ヲ存スルノ精神ナリ町村税十分ニ改正セントスレハ先ツ國稅徵收法ヲ改正セサル可カラズ故ニ本制ニ於テハ現行ノ原則ニ依リ多少ノ修補ヲ加ヘタルニ過キス現今町村費ノ賦課目即地價割戸別割營業割等ノ如キ皆國稅府縣稅ニ附加シテ徵收スル者ニ外ナラス又或ハ特別ノ町村稅アリ故ニ本制ニ定ムル所ノ課目ハ現行ノ課目ヲ存スルニ於テ妨ケナキモノナリ

附加稅トハ定率ヲ以テ國稅府縣稅ニ附加スルモノニシテ納稅ノ負擔ニ偏輕偏重ノ患ナカラシメンカ爲メニ其標準ヲ均一ニスルヲ例則トセリ(市制町村制第九十條)其賦課法ヲ定ムルハ市町村會ノ職權ニ屬ス故ニ市町村會ハ臨時ノ議決又ハ豫算議定ノ際ニ之ヲ議決スヘキナリ若シ此例則ノ外ニ於テ課法ヲ設ケント欲スルトキハ郡參事會(町村制第二百二十七條第七)若クハ府縣參事會(市制第二百二十三條第七)ノ許可ヲ受クルヲ要ス

稅率ノ定限ハ豫メ之ヲ設ケスト雖モ獨リ地租及直接國稅ニ於テハ市制第二百二十二條第三、町村制第二百二十六條第三ニ定メタル制限ヲ越エントスルトキハ内務大臣ノ認可ヲ受クルヲ要ス是レ國庫ノ財源ニ關係スル所アルヲ以テナリ就中地租ノ如キハ從前此定限ヲ超



過スルヲ得ルハ非常特別ノ場合ニ限レリ而シテ特別許可ノ道ヲ存セサルカ如キハ地方ニ依テハ却テ課税ノ平均ヲ得サルノ弊アリ是レ本制現行ノ例ヲ移シテ多少ノ便法ヲ開キタル所以ナリ間接税ハ概シテ市町村ノ附加税ヲ課スルニ便ナラス故ニ市制第二百二十二條第四及ヒ町村制第百廿六條第四ニ從ヒ渾テ官ノ許可ヲ要ストセリ各種國稅府縣稅ノ内何レヲ直稅トシ又何レヲ間稅トス可キカハ往々疑點ヲ生スルコトアリ此區別ニ就テハ今內務大藏兩省ノ省令ヲ以テ之ヲ定ムルコト、セリ(市制第二百三十一條、町村制第三百三十六條)

附加税ノ特別税ニ優ル所以ノモノハ附加税ニ在テハ納稅者既ニ國稅又ハ府縣稅ノ賦課ヲ受クルヲ以テ別ニ其收益等ノ調査ヲ爲スヲ要セサルニ在リ唯々其町村稅ハ免除セサルモ國稅府縣稅ノ賦課ヲ受ケサル者(一個人又ハ法人)ニ限リ更ニ其調査ヲ要ス可キニ付此場合ニ於テハ町村長若クハ市參事會ニ於テ其ノ國稅府縣稅ノ徵收ノ規則ニ據リ其ノ調査ヲ爲サ、ル可カラス

特別税ハ市制町村制第九十一條ニ從ヒ條例ヲ以テ之ヲ規定セサル可カラス此點ニ於テハ既ニ手數料ニ就テ説明シタル所ニ同シ但特別税ハ市町村必要ノ費用ヲ支辨スルニ附加税ヲ以テシ猶足ラサルトキニ限リ始メテ之ヲ徵收スル者トス(市制町村制第九十條)

市町村稅ヲ納ムルノ義務ヲ負擔スル者ニ就テハ一個人ト法人トヲ區別セサル可カラス即チ左ノ如シ

甲 一個人

凡ソ納稅義務ハ市町村ノ住民籍ニ原クモノトス(市制町村制第六條第二項)故ニ此義務ハ市町村内ニ住居ヲ定ムルト同時ニ起ルモノナリ故ニ一旦住居ヲ定メタル者ハ時々他ノ市町村ニ滞在スルコトアリト雖モ納稅義務ヲ免ルヘキニ非ス若シ之ニ反シテ住居ヲ定メスシテ一時滞在スルニ止マルモノハ未タ此義務ヲ帶ヒス唯三ヶ月以上滞在スルトキハ住居ヲ占ムルト同ク納稅ノ義務ヲ生スルモノトス(市制町村制第九十二條)又假令ヒ市町村内ニ住居若クハ滞在セスト雖モ其市町村内ニ土地家屋ヲ所有シ又ハ店舗ヲ定メテ營業ヲ爲ス者ハ均ク其市町村ノ利益ヲ蒙ルニ依リ共ニ納稅ノ義務アリトス但此義務ハ一般ノ負擔ニ涉ラズ唯其土地家屋營業若クハ是ヨリ生スル所得ニ賦課ス可キ市町村稅ニ限リテ負擔ノ義務アルモノトス(市制町村制第九十三條)住居ト滞在トハ常ニ必ス同一ニ歸セサルヲ以テ或ハ重複ノ課稅ヲ受クルノ患ナシトセス此弊害ヲ防クカ爲ニハ則チ市制町村制第九十四條、第九十五條ノ規定アリ他國ニ於テハ往々住居ヲ定ムル市町村ニ特權ヲ與フルノ例アリト雖モ本制ハ特ニ例ニ倣ハヌ要スルニ此ノ如キハ皆施行規則中ニ適宜ノ便法ヲ定ム可キコト、ス

市町村稅ノ免除ヲ受クルハ市制町村制第九十六條及第九十八條ニ掲載シタル人員ニ限レリ

乙 法人

法人ハ市制町村制第九十三條ニ從ヒ唯其所有ノ土地家屋若クハ之ヲ依テ生スル所得ニ賦課

スル市町村税ニ限リ納税ス可キモノトス抑法人トハ政府、府縣(郡)モ亦郡制々定ノ上ハ法人ト爲スノ見込ナリ)市町村、公共組合(例ハ水利土功ノ組合、社寺宗教ノ組合ノ類)慈善協會其他民法及商法ニ從ヒ法人タル權利ヲ有ス可キ私法上ノ結社ヲ謂フ其私法上ノ結社ハ市制町村制第九十七條ノ免稅ノ部ニ入レヌ又官設ノ鐵道電信ノ如キハ官ノ營業ニ屬スト雖モ是等ハ特ニ國家ノ公益ノ爲ニ免稅トス(市制町村制第九十三條)私設鐵道ニ至テハ各市町村ニ於テ其收益ヲ調査スル頗ル難キヲ以テ施行規則中ニ於テ詳ニ之レヲ規定スルヲ要ス凡ソ納稅義務者ニ課稅スルハ總テ平等ナル可キナリ唯市制町村制第八十五條ハ此例外トシテ使用ノ土地物件ニ係ル費用ヲ其使用者ニ課セリ又一市町村ノ數部若クハ數區ニ分レタルトキ其一部一區ノ專用ニ屬スル營造物ノ費用ハ其一部一區ノ負擔トセリ(市制町村制第十九條第二項)尤其一部一區ニ特別ノ財產アルトキハ先ツ其收入ヲ以テ其費用ニ充ツ猶足ラサル時特別ニ其一部一區ノ人民ニ課シ又ハ一般全市町村税中ニ區別ヲ立テ其準率ヲ高クス可シ之ニ反シテ第九十九條第一項ノ場合ニ於テ數個人ノ專用ニ屬スル營造物ノ費用ハ必其數個人ノ負擔トシ之ヲ他人ニ賦課スルコトヲ得サルモノトス但市町村税ハ總テノ納稅義務者ト平等ニ賦課スルヲ以テ例則ト爲カ故ニ若シ此例則ニ違ハントスルトキハ官ノ許可ヲ受クルヲ要ス(市制第二百二十三條第八、町村制第二百二十七條第八)

各納稅者ノ稅額ヲ査定スルハ法律規則ニ依リ市制町村制第百條ノ規定ニ從ヒ町村長(町村

制第六十八條第八)及市參事會(市制第六十四條第八)ノ擔任トス大ナル町村及市ニ於テハ之ガ爲メ專務ノ委員ヲ設クルヲ便宜トス

社會經濟法ノ稍進歩シタル今日ニ在テハ舊時ノ夫役現品ニ代ヘテ金納法ヲ行フニ至レリ然レモ町村費ノ課出ニ於テハ夫役現品ノ法ヲ存スルハ特ニ必要ナルノミナラス往々便利ナルモノアリ且古來ノ慣行今日ニ傳フル者其例少カラス夫役賦課ハ專ラ道路、河溝、堤防ノ修築防火水又ハ學校、病院ノ修繕等ノ爲メニ行フモノナリ殊ニ村落ニ在テハ農隙ノ時ヲ以テ夫役ヲ課スルトキハ租稅ノ負擔ヲ輕減センカ爲メニ大ニ便益トスル所アリ農民ノ如キハ季節ニ依リ夫役ニ應スルヲ得ルノ間隙アルコト市民ト其趣ヲ異ニス且地方道路ノ開通ヲ要スルモノ將來必少カラサル可キヲ以テ夫役賦課ノ法ヲ存スルトキハ幾許カ市町村ノ負擔ヲ輕減スルノ效アルコト必セリ依テ市制町村制第一條ニ於テ市町村ニ許スニ夫役賦課ノ法ヲ以テセリ但此點ニ於テハ今日ノ經濟ニ適應セシメンカ爲メ本制ハ本人自ラ其役ニ從事スルト適當ノ代理者ヲ出シ又ハ金額ヲ納ムルトヲ以テ義務者ノ選擇ニ任セリ其金額ヲ算出スルハ其地ノ日雇賃ニ準シ日數ヲ以テ等差ヲ立ツルヲ通例トス唯火災水害等ノ如キ急迫ノ場合ニ於テハ金納ヲ禁スルコトヲ得可シト雖モ代人ヲ出スハ本人ノ隨意ニ在ルモノトス

夫役ハ總テ市町村税ヲ納ム可キ者ニ賦課シ其多寡ハ直接市町村税ノ納額ニ準スルモノトス若シ此準率ニ依ラサルトキハ郡參事會(町村制第二百二十七條第九)及府縣參事會(市制第百

二十二條第九)ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス此場合ノ外ハ總テ市町村限り許可ヲ受ケスシテ之ヲ賦課スルコトヲ得可シ

一般ニ夫役ヲ賦課スルト賦課セサルト及夫役ノ種類并範圍ヲ定ムルハ市町村會ノ職權(市制第三十一條第五、町村制第三十二條第五)ニ屬シ之ヲ各個人ニ割賦スルコトハ町村長(町村制第六十八條第八)及市參事會(市制第六十四條第八)ノ擔任トス

以上市町村ノ收入ハ皆公法上ノ收入ニ屬スルモノニシテ其徵收ハ市制町村制第百二條ヨリ第百五條ニ準據スヘキモノトス而シテ其賦課徵收上ノ不服ハ司法裁判所ニ提出スルヲ許サズ郡參事會府縣參事會ノ裁決ヲ經テ結局ノ裁決ハ行政裁判所ニ屬ス此公法上ノ收入ハ私法上ノ收入ト相混同スヘカラス例ヘハ市町村有ノ地所ヲ一個人ニ貸渡シタルトキ其借地料ハ民法及訴訟法ニ準據シテ徵收ス可キナリ

將來市町村ノ事業漸ク發達スルニ從ヒ經常ノ歲入ヲ以テ支辦スルコト能ハサル所ノ大事業ノ起ル可キハ勢ノ免レサル所ナリ然レトモ豫メ其費用ニ備ヘンカ爲メ資本ヲ蓄積セントスルコトモ亦極メテ難ガル可シ故ニ經常歲入ヲ以テ支ヘ能ハサル所ノ需要ニ應セント欲スレハ市町村ヲシテ豫メ將來ノ歲入ヲ使用スルコトヲ得セシムルノ道ヲ開クノ外ナカル可シ即公債募集ノ方法はナリ抑公債募集ノ利益ハ收入時期ノ未タ到來セサルニ先テ豫メ歲入ヲ使用シテ以テ町村住民ノ爲メニ大事業ヲ起シ其經濟及納稅力ヲ奨誘シ且以テ納稅者ノ負擔ヲ

輕減スルニ在ルナリ公債ノ事タル利益ノ在ル所斯ノ如シト雖モ之ニ伴フ所ノ弊害モ亦自ラ免レサルモノアリ若シ市町村ニ於テ此方法ニ依リ豫メ將來ノ歲入ヲ使用スルトキハ則其元利償却ニ充ツル所ノ金額ハ將來ノ歲入中ヨリ減却スルモノナレハ負債額ノ多寡ト償還期限ノ長短トニ從ヒ市町村ノ財政ニ影響スル所少カラス又市町村會ニ於テハ資本ノ得易キカ爲メニ輕忽ニ其市町村ノ實力ニ相當セサル事業ヲ起スノ傾向ヲ爲シ又ハ今日ニ負擔ス可キノ義務ヲ漫リニ後年ニ傳ヘントスルノ弊害ナキコト能ハス是最モ行政官ノ注意ス可キ所ニシテ市制第百六條第百二十二條第一及町村制第百六條第百二十六條第一ノ規定アルハ以上ノ論旨ニ起因スルモノトス

本制ハ公債募集ノ事項ヲ逐一列舉セズ唯己ムヲ得サルノ必要若クハ永久ノ利益ト云フヲ以テ之レカ制限ヲ立テタリ若シ此制限ニ適合スルノ證明ナキモノハ許可ヲ與フ可カラス若シ又償還期限三年以内ニシテ許可ヲ要セサルモノハ町村制第六十八條第一及市制第六十四條第一ニ依テ相當ノ處分ヲ爲ス可キナリ其必要己ムヲ得サルノ支出トハ舊債ヲ償還シ又ハ傳染病流行若クハ水害等不慮ノ災厄ニ遭遇シテ一時ノ窮ヲ救ハントスルトキ又ハ學校ヲ開設シ道路ヲ修築スル等法律上ノ義務ヲ盡サントスルカ如キ場合ヲ謂ヒ永久ノ利益トナル可キ支出トハ市町村ノ力ニ堪フ可キ事業ヲ起シ以テ市町村有財産ノ生産力若クハ住民ノ經濟力ヲ増進シ假令一時ノ負擔ヲ増スモ永遠ノ利益ヲ生ス可キ場合ヲ謂フナリ尤何レノ場合ニ於

テモ一時ノ歳入ヲ以テ支辨シ能ハサル時ニ限ルモノトス但年々要スル所ノ常費ハ必經常ノ歳入ヲ以テ支辨ス可キモノニシテ公債ヲ募ルヲ得ス公債募集ニ當テハ深ク注意ヲ加ヘ成ルヘク住民ノ負擔ヲ輕クシ利息ハ時ノ相場ニ準シ隨時償還ノ約ヲ立テ、市町村ニ便利ヲ與ヘサル可カラズ到底償還方法ノ確定スルニ非サレハ募集ヲ許サズ又公債ハ成ル可ク市町村ノ財政ニ適準シ償還期限ハ長キニ過ク可カラズ故ニ本制ニ於テハ償還ハ三年以内ニ始マルモノトシ年々ノ償還歩合ヲ定メ且募集ノ時ヨリ三十年以内ニ還了スルヲ以テ例規ト爲セリ若シ此例規ニ違ハントスルトキハ必官ノ許可ヲ要ス(市制第二百二十二條第一、町村制第二百二十六條第一)元來許可ヲ要セサル公債ノ種類ト雖モ右ノ例規ニ違フトキハ亦官ノ許可ヲ請フ可シ

公債ヲ起スト起サ、ルト及其方法ノ如何ハ市町村會ノ議決ニ屬ス(市制第三十二條第八、町村制第三十三條第八)唯定額豫算内ノ支出ヲ爲スガ爲メニシテ一會計年度内ニ償還ス可キ公債ハ市ニ於テハ市會ノ議決ヲ要セス市參事會ノ意見ヲ以テ募集スルヲ得ト雖モ(市制第三百六條第三項)町村ニ於テハ町村會ノ同意ヲ要スルコト勿論ナリ蓋斯ノ如キ公債ハ收入支出ノ多キ市ノ如キニ在テハ自然己ム可カラサルモノニシテ其支出ノ時期ト收入期限ト常ニ相合一セサルカ故ナリ

凡公債ヲ募集スルニ付許可ヲ受ク可キハ右ニ陳述シタル場合及曾テ負債ナキニ新ニ公債ヲ起シ又ハ舊債ヲ増額スルトキニ在リ故ニ前記ノ如キ一時ノ借入金ヲ爲シ又ハ舊債償還ノ爲メニスル公債ニシテ其規約舊債ヨリ負擔ヲ輕クスルトキノ如キハ渾テ許可ヲ要セス其他ハ償還期限三年以内ノモノヲ除クノ外内務大臣ノ許可ヲ受ク可シ

既ニ募集シタル公債ヲ豫定ノ目的外ニ使用セントスルトキハ市町村會ノ議決ヲ要シ且若シ其公債ニシテ官許ヲ要スルトキハ許可ヲ受ク可キコト言テ俟タス市町村ノ財政ハ政府ノ財政ニ於ケルト均ク三個ノ要件アリ即チ

甲 定額豫算表ヲ調製スル事

乙 收支ヲ爲ス事

丙 決算報告ヲ爲ス事

以上ノ三要件ニシテ法律中ニ細目ヲ設ク可キ必要アルモノハ本制第四條第二款ニ於テ之ヲ規定セリ

甲

財政ヲ整理シ收支ノ平衡ヲ保ツニハ定額豫算表ヲ設ケサル可カラズ本制ハ(市制町村制第百七條)市町村ヲシテ豫算表調製ノ義務ヲ負ハシム故ニ若シ市町村ニ於テ此義務ヲ盡サ、ルトキハ法律上ノ權力ヲ以テ之ヲ強制スルヲ得可ク若シ之ヲ議決セサルトキハ府縣參事會郡參事會ノ決議ヲ以テ之ヲ補フコトヲ得可シ(市制第十九條、町村制第二百二十三條)此義

務ハ決シテ免ル可カラサルモノナレハ狹小ノ町村ト雖モ猶之ヲ負擔セサルヲ得ス其豫算表  
ハ一年ノ見積ヲ以テ之ヲ設ケ其會計年度ハ政府ノ會計年度ニ同クセリ其他本制ハ豫算表調  
製ノ細目ヲ定メス要スルニ一切ノ收支及收入不足ノ場合ニ方リ支辨方法ヲ定ムルヲ以テ足  
レリトス但財政整理上ニ於テ其市町村ノ資力ヲ酌量ス可キ必要ノ細目ハ省令ヲ以テ之ヲ定  
ムルコトアル可シ

定額豫算ノ案ヲ調製スルコトハ町村長及市參事會ノ擔任ニシテ之ヲ議決スルハ市町村會ノ  
職權ニ屬ス收支ヲ許可スルコトハ市町村會ノ全權ニ任セシテ法律上ノ檢束ヲ設クルモノ  
アリ即當然支出ス可キモノヲ否決シタルトキハ監督官廳ニ於テ強制豫算ヲ令スルノ權(市  
制第百十八條、町村制第百二十二條)アリ又其議決ノ越權ニ涉リ又ハ公益ヲ害スルモノハ其  
議決ヲ停止スルノ權(市制第六十四條第一、町村制第六十八條第一)アリ事項ニ依リテハ官  
ノ許可ヲ要スルカ故ニ(市制第百二十二條、第百二十三條第五第六、町村制第百二十六條第  
百二十七條第五第六)市町村住民ノ爲メニ過度ノ負擔ヲ制止スルノ方法ハ十分備ハレリト  
謂フ可シ故ニ豫算表ハ市町村會ノ議決スル所ニ依リ其全体ニ於テ許可ヲ受クルヲ要セズ唯  
右ニ記載シタル場合ニ限リ許可ヲ受クルヲ要スルノミ凡定額豫算表ハ二様ノ效力アリ即一  
方ニ於テハ理事者ヲ豫定ノ收支ヲ爲スノ權利ヲ得セシメ一方ニ於テハ踰越ス可カラサル  
ノ制限ヲ負ハシムル者ナリ殊ニ豫算外ノ支出豫算超過ノ支出若クハ費目ノ流用ヲ爲スニ當

テハ更ニ市町村會ノ議決ヲ經可キモノトス此場合ニ於テ市町村會ハ當初豫算ヲ議定スルト  
同一ノ規定ニ從テ之レヲ議決ス可キナリ其追加豫算若クハ豫算ノ變更ヲ議決スルニ當リ其  
事項タル官ノ許可ヲ要スルトキハ均ク其許可ヲ受ク可キコト、ス豫備費ヲ設ク可キト否ト  
及其ノ額、如何ハ市町村會ノ議定ニ在リト雖モ己ニ之ヲ設ケタルトキハ市制町村制第百九  
條ノ制限ヲ除クノ外町村長及市參事會ノ之ヲ使用スルニ任ス但其決算報告ヲ爲ス可キハ固  
ヨリナリトス

乙

市町村收支ノ事務ハ之ヲ官吏ニ委任セシテ之ヲ市町村ノ吏員即收入役ヲ置テ之ニ委任ス  
是多ク各國ニ行ハル、所ノ實例ニシテ其吏員ハ市町村ニ於テ之ヲ選任シ有給吏員ト爲セリ  
要スルニ本刻ノ旨趣ハ收支命令者ト實地ノ出納者トヲ分離獨立セシメント欲スルニ在リ故  
ニ收入役ノ事務ヲ町村長ニ委任スルハ本制ノ敢テ希望スル所ニ非スシテ此ノ如キ場合ハ極  
メテ罕ナル可シ若シ町村ノ情況ニ依リ別ニ有給ノ收入役ヲ置クヲ要セサルトキハ寧ロ之ヲ  
助役ニ委任スルヲ可トス又比隣ノ小町村ハ町村制第百十六條ニ從ヒ共同シテ收入役一名ヲ  
置クモ亦便宜ニ任ス

收支命令權ハ町村長若クハ市參事會及監督官廳ニ屬ス收支命令ハ書面ヲ以テセサル可カラ  
ズ收支命令ヲ受ケスシテ爲シタル支拂ハ市町村ニ於テ之ヲ認定スルヲ要セス抑收支命令ト

實地ノ出納トチ分離スルハ支拂前ニ於テ其豫算ニ違フ所ナキヤチ監査スルニ便ナルカ爲メナリ元來決算報告ヲ爲スハ即此目的ニ外ナラスト雖モ既ニ支拂後ニ係ルヲ以テ其監査ハ往々時機ニ後ル、ノ憾アリ故ニ本制ハ(市制町村制第百十條)收入役ニ負ハシムルニ其ノ命令ノ正否ヲ査スルノ義務ヲ以テシ其命令若シ定額豫算又ハ追加豫算若クハ豫算變更ノ決議ニ適合セズ又豫算費ヨリ仕拂フ可キトキ該費目ノ支出ニ關スル規定ヲ遵守セサルニ於テハ之ヲ支出スルヲ得サルモノトス此義務ハ收入役ノ賠償責任ト懲戒處分ノ制裁ヲ以テ十分ニ之ヲ盡サシムルヲ得ベシ

若シ町村長ニ收入役ノ事務ヲ擔任セシムルトキハ收支命令ト仕拂トノ別ハ自ラ消滅シ隨テ上ニ記載シタル監査ノ法モ亦之レナキニ至ル可シ

收入役ヲシテ右ノ義務ヲ行ヒ易カラシメンカ爲メ定額豫算表ハ勿論追加豫算若クハ豫算變更ノ議決ハ必之ヲ收入役ニ通報セサル可カラズ其豫算表及臨時ノ議決ハ併セテ簿記ノ標準ト爲ルモノナリ本制ハ簿記ノ事ニ就テハ規定ヲ立ツルコトナシト雖モ簿記及一般出納事務ニ就テハ追テ訓令ヲ以テ原則ヲ示スコトアル可シ又本制ハ出納ヲ檢査スルヲ以テ市町村ノ義務ト爲セリ(市制町村制第百十一條)若シ理事者ニ於テ此義務ヲ行ハズ又ハ檢査ヲ行フテ盡サ、ル所アルカ爲メ市町村ニ損害ヲ釀シタルトキハ市町村ニ對シテ賠償義務ヲ負ハシム可キナリ此賠償義務ノ外懲戒ヲ加ヘ得可キハ言ヲ俟タズ

丙

決算報告ノ目的ハニアリ左ノ如シ

- 一 計算ノ當否及計算ト收支命令ト適合スルヤ否ヲ審査スル事(會計審査)
  - 二 出納ト定額豫算表又ハ追加豫算若クハ豫算變更ノ議決又ハ法律命令ト適合スルヤ否ヲ査定スル事(行政審査)
- 會計審査ハ會計主任者(即收入役又ハ收入役ノ事務ヲ擔任スル助役若クハ町村長)ニ對シ行フモノニシテ行政審査ハ市町村ノ理事者即町村長若クハ市參事會ニ對シテ行フモノナリ其會計審査ハ先ツ町村長 但町村長ニ於テ會計ヲ兼掌スルトキハ此限ニ在ラス、及市參事會ニ於テ之ヲ行ヒ次テ市町村會ニ於テ右ニ様ノ目的ヲ以テ會計ヲ審査ス(市制町村制第百十二條)是故ニ收支命令者(市町村長、助役、參事會員)ニシテ市町村會ノ議員ヲ兼スルトキハ其議決ニ加ハルコトヲ得ス(市制第四十三條、町村制第四十五條)若シ又議長タルトキハ其議事 中議長席ニ居ルコトヲ得サルモノトス(市制第百十二條、町村制第百十三條)是利害ノ互ニ抵觸スルヲ以テナリ
- 決算報告ノ時會計ニ不足アルトキハ市制第百二十五條若クハ町村制第百二十九條ヲ適用ス可シ

市制町村制第五章

市町村内特別ノ財産ヲ有スル市區又ハ各部ノ行政

行政ノ便利ノ爲メニ畫シタル區ト一市町村内ニ於テ獨立ノ法人タル權利ヲ有スル各部トノ區別アルハ固ヨリ言ヲ待タズ本制ハ一市町村ノ統一ヲ尙フモノニシテ一市町村内ニ獨立スル小組織ヲ存續シ又ハ造成スルコトヲ欲スルニアラス然レトモ強テ此原則ヲ斷行セントスルトキハ一地方ニ於テ正當ニ享有スル利益ヲ傷害スルノ恐レアリ故ニ概シテ此旨趣ニ依テ論ズ可カラサルモノアリ大市町村ニ於テハ現今既ニ特別ノ財産ヲ有スル部落アリ現今ノ小町村ヲ合併スルトキハ更ニ又此ノ如キ部落ヲ現出ス可シ其部落ハ即獨立ノ權利ヲ存スルモノト謂フ可シ又他ノ一方ヨリ論スルトキハ市制町村制第九十九條ノ原則ニ依リ其部落ハ義務ヲ負擔スルコトアリト雖モ之レカ爲メ直ニ別段ノ組織ヲ要スルコトナカル可シ其特別財産又ハ營造物ノ管理ハ之ヲ其全市町村ノ理事者タル町村長又ハ市參事會ニ委任スルモ妨ケナシ(市制第百十四條、町村制第百十五條)若シ區長ヲ置クトキハ町村長又ハ市參事會ニ於テ區長ニ指揮シテ其管理ノ事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得可シ尤其一部ノ權利ヲ傷害ス可カラサルハ言ヲ俟タズ本制ニ於テ其一部ノ出納及會計ノ事務ヲ分別ス可キモノトスルハ即是カ爲メナリ議會ノ職掌ヲ論スレハ(市制自第三十條至第三十五條、町村制自第三十二條至第三十七條)特別事務ト雖モ總テ之ヲ市町村會ニ委任スルモ妨ケナキ而已ナラス却テ希望ス可キ所ナリ然レトモ地方ニ依リテハ全市町村ト其各部落トノ利害ハ互ニ相抵觸スル

コト往々之レアリ其甚キニ至テハ多數ノ爲メニ壓抑ヲ蒙ルコトアリ依テ其一部限リノ選舉ヲ以テ特別ノ議會ヲ起シ以テ其議事ヲ委任スルコトヲ得可シ其之ヲ起スノ利害ニ就テハ一般ノ原則ヲ設ケ難キカ故ニ姑ク條例ノ規定ニ任セサル可カラズ但此條例ハ固ヨリ普通ノ規定ニ依ル可クシテ特別ノモノニ非スト雖モ其之ヲ設ケ並其事項ヲ定ムルハ市町村會ノ議決ニ任セスシテ之ヲ郡若クハ府縣參事會ニ委任セリ何トナレハ利害ノ相抵觸スルカ爲メ偏頗ノ處置アラソコトヲ恐ルレハナリ唯市町村會ノ意見ヲ徵ス可キハ勿論ナリ要スルニ區會ハ市町村會又ハ區内人民ノ情願ニ依リ之ヲ設クルヲ當然トス

區會ノ構成ハ本制ニ規定シタル市町村會ノ組織ニ依準シ條例中ニ之ヲ定ム可キモノトス區會ノ職掌ハ市町村會ノ職掌ニ同シ唯其特別事件ニ限ルノミ

町村制第六章 町村組合

本制ノ希望スル如ク有力ノ町村ヲ造成シ又郡ヲ以テ自治體ト爲ストキハ其他別ニ區畫ヲ設クルノ必要ナカル可キナリ殊ニ一事件アル毎ニ特別ノ聯合ヲ設クルヲ要セサル可シ若シ漫ニ聯合ヲ設クルトキハ行政事務簡明ナラス其組織錯綜ヲ極メ費用モ亦隨テ増加スルヲ免レサルハ英國ノ實例ヲ以テ證スルニ足ル可シ獨リ水利土功ノ聯合又ハ小町村ニ於テ學校ノ聯合ヲ設クルカ如キハ萬已ムヲ得サルモノニシテ皆別法ヲ以テ規定セサル可カラズ然レトモ其別法ノ發布セサル間ハ本制ニ於テ豫メ之カ方法ヲ設ケサル可カラズ又此必要アルノ外往

々町村組合ヲ設クルノ活路ヲ示ス可キモノナリ即本制ニ於テハ關係町村ノ協議ヲ以テ其組合ヲ爲スノ目的、組合會議ノ組織、事務管理ノ方法及費用ノ支辨方法等ヲ定ムルモハ(町村制第一百六條第一項、第一百七條第一項)監督官廳即郡長ノ許可ヲ得テ組合ヲ成スコトヲ許セリ町村ニ於テ相當ノ資力ヲ有セサルトキ組合ヲ爲サシムルヲ必要ト爲スカ如キ是ナリ此ノ如キ場合アルトキハ町村制第四條ニ於テ合併ス可キコトヲ規定スト雖モ事情ニ依リテハ合併ヲ施ス可カラヌ又ハ之ヲ不便ト爲スコトナシトセス例ハ該町村ノ互ニ相遠隔スルカ如キ又ハ古來ノ慣習ニ於テ調合ヲ得サルカ如キノ類アリ此ノ如キニ至テハ其町村ノ異議アルニモ拘ラス事務共同ノ爲メ組合ヲ成サシムルノ權力ナカル可カラヌ其組合ヲ成ストキハ第四條ノ場合ニ異ニシテ其各町村ノ獨立ヲ存シ又別ニ町村長及町村會若クハ町村總會ノ有ス可キ理ナリ然レトモ其組合ヲ成ス所ノ共同事務ノ多寡及種類ハ其組合ニ依テ互ニ異ナルモノトス

抑協議ニ依ラスシテ組合ヲ設クルハ町村ノ獨立權ヲ傷クルノ恐レアルニ依リ郡參事會ノ議決ニ任スルヲ妥當ナリトス(町村制第一百六條第二項)果シテ其共同事務ノ區域ヲ定メ強制ヲ以テ組合ヲ成サシメタルトキハ議會ノ組織、事務管理ノ方法、費用支辨ノ方法就中分擔ノ方法ニ至テハ先ツ關係町村ニ於テ之ヲ協議スルヲ要ス若シ其協議調ハサルニ及テハ郡參事會ニ於テ之ヲ議決スルノ外ナシ

組合議會ノ組織、事務管理ノ方法、費用支辨ノ方法特ニ分擔ノ割合ハ本制ニ於テ豫メ之ヲ規定セヌ實際ノ場合ニ於テ便宜其方法ヲ制ス可シ故ニ組合ハ特別ノ議會ヲ設ケ或ハ各町村會ヲ合シテ會議ヲ開キ或ハ互選ノ委員ヲ以テ議會ヲ組織シ或ハ各町村會別個ニ會議ヲ爲シ其各議會ノ一致ヲ以テ全組合ノ議決ト爲スノ類各其宜キニ從フ可シ又町村長ノ如キモ組合ニ一ノ町村長ヲ置キ且之ヲ永久獨立トシ或ハ各町村長ノ交番ト爲ステ得可シ又組合ノ費用ハ或ハ特別ノ組合費トシテ之ヲ各國人ニ賦課シ或ハ之ヲ各町村ニ賦課シ以テ其賦課徵收ノ法ヲ各町村ノ便宜ニ任スルヲ得可シ各町村分擔ノ割合ハ利害ノ輕重、土地ノ廣狹、人口ノ多寡及納稅力ノ厚薄ヲ以テ標準ト爲ス可シ但其納稅力ノ詮定方ニ至テモ亦之ヲ一定スルコト能ハサル可シ以上ノ各事項ニ關シ本制ハ全ク實地宜キニ從フヲ許セリ故ニ各地方ニ於テ其便ト爲ス所ヲ採擇ス可シ

組合町村ハ之ヲ解クノ議決ヲ爲ステ得ト雖モ郡長ノ許可ヲ得ルヲ要ス(町村制第一百八條)

#### 市制第六章町村制第七章 市町村行政ノ監督

監督ノ目的及方法ハ本説明中各處ニ之ヲ論セリ故ニ復々之ヲ贅セス唯茲ニ其要點ヲ概括セントス

#### (第一)監督ノ目的ハ左ノ如シ

一 法律ハ有效ノ命令及官廳ヨリ其權限内ニテ爲シタル處分ヲ遵守スルヤ否ヲ監視スル事



- 二 事務ノ錯亂澁滞セサルヤ否ヲ監視シ時宜ニ依テハ強制ヲ施ス事(市制第一百七七條町村制第二百一十一條)
- 三 公益ノ妨害ヲ防キ殊ニ市町村ノ資力ヲ保持スル事以上ノ目的ヲ達スルカ爲メニハ左ノ方法アリ
  - 一 市町村ノ重役ヲ認可シ又ハ臨時町村長助役ヲ選任スル事(市制第五十條、第五十一條、第五十二條、町村制第五十九條、第六十條、第六十一條、第六十二條)
  - 二 議決ヲ許可スル事(市制第二百二十二條、第二百二十三條、町村制第二百十六條、第二百二十七條)
  - 三 行政事務ノ報告ヲ爲サシメ書類帳簿ヲ査閲シ事務ノ現況ヲ視察シ並出納ヲ檢閲スル事(市制第一百七七條、町村制第二百一十一條)
  - 四 強制豫算ヲ命スル事(市制第一百十八條、町村制第二百二十二條)
  - 五 上斑ノ參事會ニ於テ代テ議決ヲ爲ス事(市制第一百十九條、町村制第二百二十三條)
  - 六 市町村會及市參事會ノ議決ヲ停止スル事(市制第六十四條第一、第六十五條、町村制第六十八條第一)
  - 七 懲戒處分ヲ行フ事(市制第二百二十四條、第二百二十五條、町村制第二百二十八條、第二百二十九條)
  - 八 市町村會ヲ解散スル事(市制第二百二十條、町村制第二百二十四條)

(第二)監督官廳ハ左ノ如シ

町村ニ對シテハ

一 郡長

二 知事

三 內務大臣

市ニ對シテハ

一 知事

二 內務大臣

法律ニ明文アル場合ニ於テハ郡長若クハ知事ハ郡參事會若クハ府縣參事會ノ同意ヲ求ムルヲ要ス但參事會ヲ開設スルマテハ郡長知事ノ專決ニ任ス(市制第二百二十七條、町村制第二百三十條)

市町村吏員ノ處分若クハ議決ニ對スル訴願ニ就テハ先ツ市町村ノ事務ト市制第七十四條、町村制第六十九條ニ記載シタル事務トノ間ニ區別ヲ立テサル可カラス市制第七十四條、町村制第六十九條ニ記載シタル事務ニ關シテ訴願ヲ許スト否トハ一般ノ法律規則ニ從フモノトス之ニ反シ市町村ノ事務ニ關シテハ此法律ニ明文アル場合ニ限レリ(市制第八條第四項、第二十九條、第三十五條、第六十四條第一、第七十八條、第二百五條、第二百二十四條、町村制第八條第四項、第二十九條、第三十七條、第六十八條第一、第七十八條、第二百五條、第二百二十四條、町村制第八條第四項、第二十九條、第三十七條、第六十八條第一、第七十八條、第二百五條、第二百二十四條)本制ハ訴願ノ必要ナル場合ヲ列載シ悉シタルモノトス又監督官廳ハ自己ノ發意ニ依リ其職權ヲ以テ監督權ヲ行フヲ得ルノミナラス人ノ告知ニ依テ亦之ヲ行フコトヲ得可シ而シテ其

告知ハ本制ニ所謂訴願ノ種類ニアラサレハ期限ヲ定メヌ又前キノ處分若クハ議決ノ執行ヲ停止スルコトヲ得サルナリ(市制第百十六條第二項、第五項、町村制第百二十條第二項、第五項)

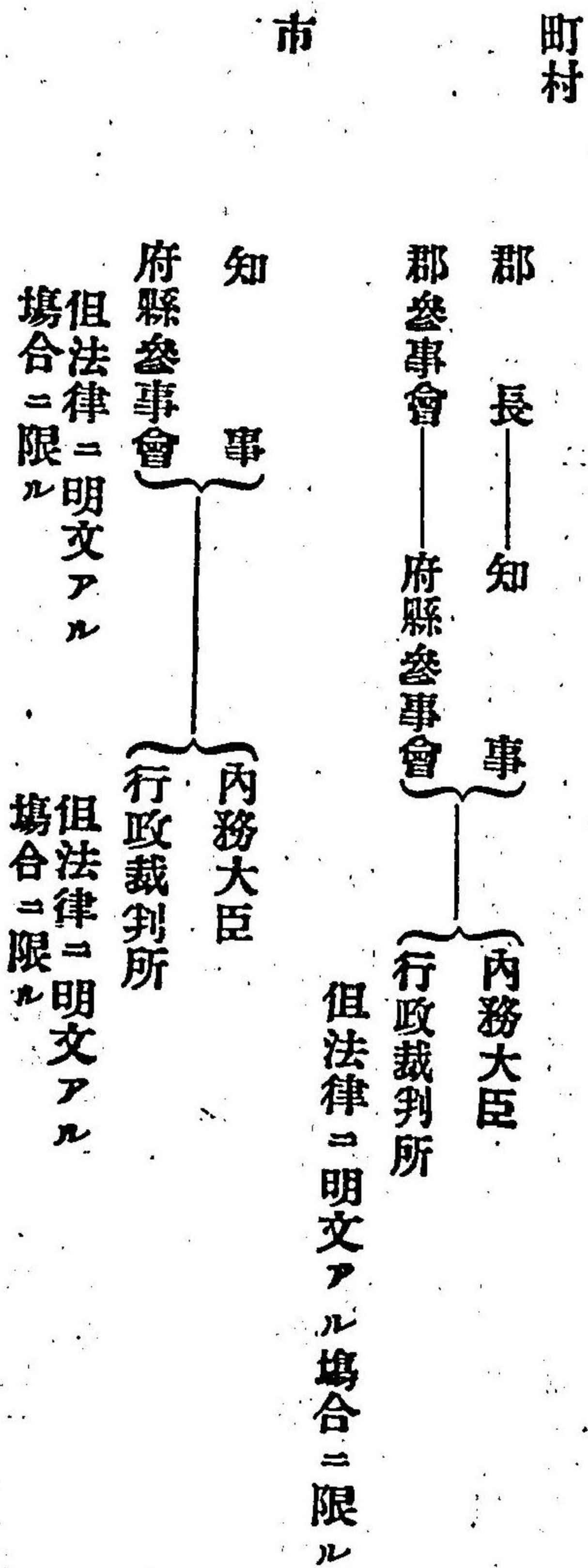
市町村ノ行政事務ニ關シ郡長若クハ府縣知事ノ第一次又ハ第二次ニ於テ爲シタル處分若クハ裁決ニ對シテハ其參事會ノ同意ヲ得ルト否トニ拘ラス一般ニ訴願ヲ爲スヲ許セリ特ニ法律ニ明文アル場合ニ限リテ之ヲ許サ、ルモノトス(市制第百十六條第一項、町村制第百二十條第一項)若シ其處分又ハ裁決郡長ヨリ發シタルモノナルトキハ之ニ對スル訴願ハ知事之ヲ裁決シ郡參事會ヨリ發シタルモノナルトキハ府縣參事會之ヲ裁決ス知事及府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ共ニ內務大臣ニ訴願スルモノトス而シテ權利ノ消長ニ關スル結局ノ裁決ハ之ヲ行政裁判所ニ委任スルヲ妥當ト爲スハ上來屢々之ヲ説明セリ但權利ノ爭論ハ一般ニ行政訴訟ヲ許スニアラズ之ヲ許ス可キノ必要アル場合ニ限リ特ニ之レカ明文ヲ掲ク故ニ其明文ナキ場合ニ於テハ結局ノ裁決ハ常ニ內務大臣ニ屬スルモノトス(三)シテ行政訴訟ヲ許シタル場合ニ於テハ內務大臣ニ訴願スルヲ許サズ最上官衙ノ裁決ヲ以テ法司ノ審判ニ付スルヲ欲セサルカ故ナリ但本制ニ於テ行政裁判所ノ權限ヲ規定シタルハ市町村ノ行政事務ニ關スル事ニ止マリ其他ノ事務ニ涉ル權限ハ他日別法ヲ以テ定ムヘキコト、ス又目下行政裁判所ノ設ナキヲ以テ之ヲ開設スル迄ノ間ハ內閣ニ於テ其職務ヲ擔任ス可キコト止ムヲ得

サルナリ(市制第百廿七條町村制第百二十條)

以上記述スル所ノ要旨ハ則左之如シ

(第一)市町村ノ行政事務ニ屬セサル事件ニ對スル訴願及其順序ハ一般ノ法律規則ニ從フモノトス

(第二)市町村ノ行政事務ニ關スト雖モ市町村吏員處分若クハ裁決ニ對シテハ本制ニ明文ヲ掲ケタル場合ニ限リ訴願ヲ許シ之ニ反シテ監督官廳又ハ郡府縣參事會之處分若クハ裁決ニ對シテハ一般ニ訴願ヲ許ス其訴願ノ順序ハ左圖ノ如シ



前圖ノ順序ハ必履行セサル可カラサルモノニシテ内務大臣ニ訴願シ又ハ行政裁判所ニ出訴  
セントスルニハ必其前段ノ順序ヲ經由シタル後ニ在ル可キモノトス

【(一)一九(備荒儲蓄法) (明治三十三年六月十五日)】

第一條 備荒儲蓄金ハ非常ノ凶荒不慮ノ災害ニ罹リタル窮民ニ食料小屋掛料農具料種穀料  
ヲ給シ又罹災ノ爲メ地租(現況ノ部)分ニ限ルヲ納ムル能ハサル者ノ租額ヲ補助シ或ハ貸與スルモノト  
ス

第二條 各府縣ハ土地ヲ有スル人民ヨリ地租ノ幾分ニ當ル額ヲ公儲セシメ以テ儲蓄金ヲ設  
ク可シ各人ヨリ公儲スルノ割合ハ府縣令ノ議決ヲ以テ之ヲ定メ其總額ハ政府ヨリ配付ス  
ル金額ヨリ少カラサルヲ要ス  
但市街ハ府縣令ノ議決ヲ以テ政府ノ許可ヲ得郡村ト其徵收法ヲ異ニスルヲ得

第三條 政府ハ毎歲百二十萬圓ヲ支出シテ儲蓄金ヲ補助スヘシ

第四條 政府ヨリ補助スル金額ノ内三十萬圓ハ中央儲蓄金トシテ大藏卿之ヲ管掌シ九十萬  
圓ハ各府縣ノ地租額ニ應シテ之ヲ配付スヘシ

第五條 府縣儲蓄金ヲ徵收シ管守シ支給シ及ヒ之ヲ一處ニ集儲シ數所ニ分儲シ或ハ米穀ヲ  
購入スルノ方法ハ府知事縣令ヨリ之ヲ府縣會ニ付シ其議決ヲ取り内務大藏兩卿ニ具狀シ

其許可ヲ得テ之ヲ施行スヘシ但シ米穀ヲ儲積スルハ儲蓄金ノ半額ヲ超ユヘカラス他ノ半  
額ハ公債證書ニ交換シ置クヘキ者トス

第六條 府縣會ニ於テ議決スル儲蓄金支給ノ方法左ノ制限ヲ超ユヘカラス

第一 食料ヲ給スルハ罹災ノ爲メ自ラ生存スル能ハサル者ニ限ル其日數ハ三十日以内ト  
ス又同上ノ窮民ニ小屋掛料ヲ給スルハ一戸十圓以内農具料種穀料ヲ給スルハ一戸二十  
圓以内トス

第二 地租ヲ補助及ヒ貸與スルハ罹災ノ爲メ土地家屋ヲ賣却スルニアラサレハ地租ヲ納  
ムル能ハサル者ニ限ル

第七條 各府縣窮民ノ救助地租ノ補助及ヒ貸與ノ金額府縣ノ儲蓄金三分以上ヲ供用支出ス  
ルハ府知事縣令ノ具申ニ依リ内務大藏兩卿ノ協議ヲ以テ中央儲蓄金ヨリ補助スヘシ

第八條 従前人民公儲ノ儲蓄金アル府縣郡區町村ハ之ヲ以テ今般施行スル所ノ備荒儲蓄金  
ニ補充スルコトヲ得

第九條 各府縣内儲蓄金ノ出納ハ大藏卿歲次或ハ臨時ニ之ヲ検査スヘシ

第十條 府知事縣令ハ毎年七月中ニ其府縣儲蓄金ノ出納ヲ内務大藏兩卿ニ報告シ兩卿ハ每  
年中央及ヒ府縣儲蓄金ノ出納ヲ全國ニ公布スヘシ

第十一條 此方法ハ二十ヶ年施行スルモノトス滿期ノ後ニ至リ各府縣ニ存在スル儲蓄金ハ

府縣會ノ議決ヲ以テ其保存方法ヲ定ムヘシ

〔七二二〇〕西洋形船信號法(明治八年九月二十四日)

今般德國內西洋形蒸氣帆前船共普通信號貫用可致ニ付テハ郵名信處符字附點ノ議並万国船  
舶信號書及信號旗共海軍省ニ於テ可頒布候條右船舶官有私有共別冊万国船舶信號法告諭第  
三條ニ照準シ其船證書相副同省へ可申出此旨布告候事

別冊

万国船舶信號法告諭

第一條 海上ニ於テ用フル普通信號ノ方法ヲ設定スルノ緊要タルハ歐米ノ諸海國之レヲ論  
シ既ニ英國政府ニ於テ「イニテルナシヨナル、コード、シクナル」ヲ撰定シ以テ刊行シタリ  
是ニ於テ佛蘭西米利堅連國和蘭瑞典魯西亞希臘以太利澳智利日耳曼西班牙葡萄牙巴西ノ  
如キ諸海國ノ政府ニ於テ或ハ之ヲ翻譯刊行シ以テ其軍艦商船及ヒ陸上信號場ニ於テ專ラ  
之レヲ用ヒシム因テ今我國海軍省ニ於テモ之レヲ翻譯セシメ万国船舶信號書ト題シ刊行  
シ以テ軍艦及ヒ西洋形ノ官船商船及ヒ燈臺ノ如キ信號場ニ於テ互ニ通信應答ヲ爲ス一般  
ノ法トス故ニ此信號書ヲ備フルニ於テハ以後「コルエツト」氏著述ノ信號書ヲ備フルヲ要  
セス

第二條 此信號法ハ素ヨリ艦船ノ保護及ヒ互ノ通信便利ノ爲メニ設定セル者タルヲ以テ右

諸海國一般ニ之レヲ用フルカ故ニ西洋形ノ船舶ヲ有スル諸省使府縣及ヒ船主ハ篤ク其意  
ヲ昧シ其船舶ニ此信號書及ヒ信號旗ヲ備ヘ其船長及ヒ士官ヲシテ此用方ヲ習熟セシメ又  
以後船長及士官ヲ選舉スル時ハ此者之レヲ了解シタルヤ否ヲ詳細ニ檢査スヘシ抑此信號  
書ノ欠ク可カラサルコトハ既ニ外國ノ或ル信號場ニ於テ海上航行ノ船暗礁ニ觸ントスルヲ  
看出シタルニ因リ直ニ其場ノ士官万国船舶信號旗ヲ掲ケ以テ其危險ノ事ヲ通知シタレバ  
其船此信號ヲ了解ス可キ書ヲ有セサリシヲ以テ之レニ注意セズ遂ニ危難ニ罹リ破船沈没  
シタルノ例往々許多有リ豈ニ鑑戒ト爲サハル可カラヌヤ

第三條 船名信號符字願書ノ法

一 今般海軍省ニ於テ船名ヲ指示スル爲メニ必要ナル信號符字ヲ請求スル者ハ官船ニ於  
テハ其所轄廳ヨリ左ニ掲載セル甲ノ書式ニ其船證書ヲ附シテ海軍省ニ出ス可ク商船  
ニ於テハ其船主ヨリ乙ノ書式ニ其船證書ヲ附シ所轄廳ヲ經テ海軍省へ願出可シ然ル  
時ハ海軍省ニ於テ其信號符字ヲ其船證書ノ表ニ記入シ授與ス可シ  
甲ノ請求書式

當省(或ハ使府縣)所轄ノ汽船(或ハ帆船)何丸信號符字點附有之度別紙船證書相副此段及進  
達候也

明治 年 月 日

省使府縣長官印

農商務卿某殿

乙ノ願書々式

私所有ノ汽船(或ハ帆船)何九信號符字點附被下度別紙船證書相副此段奉願候也

使府縣管下何大區何小區何町村何番地

華士族平民

明治 年 月 日

何 某 印

農商務卿某殿

前書之通願出候間此段申副候也

使府縣長官 印

第四條 萬國船舶信號場 燈臺之レヲ管掌ス

一 前條ノ如ク我國信號場ニ於テモ唯萬國船舶信號法而已ヲ用ユルコトス然レハ此場ヲ通過スル内外ノ諸船舶此信號法ヲ以テ其船名ヲ指示スル時ハ之レヲ新聞中船舶報告ト題セル部ニ記載シ刊行シ以テ普ク世上ニ報告ス可シ又船主ヨリ其航行セル船ニ急用ノ消息等ヲ送ラントスル時ハ其船名或ハ信號字ニ附シテ其要件ヲ記シ之レヲ電信或ハ郵便ヲ以テ地方信號場ニ送ル可シ然ル時ハ其信號場ニ於テ其船ヲ認メ次第此信號法ヲ以

テ之レニ通知シ而シ其艦ヨリ其應答ヲ要スル時ハ之レヲ船主ニ報ス可キコトス

第五條 船名錄

一 此船名錄ハ萬國船舶信號書ノ附録ニシテ艦船ニ授與セル信號符字ト艦名トヲ記載シ以テ陸上信號場及シ軍艦官船商船ノ船長ヲシテ其相遇フ所ノ艦船ニ信號ヲ爲シ及ヒ自己ノ船名ヲ通知スルノ便ニ供スル者トス

第六條 海軍省ニテ前月此信號符字ヲ授與セル船舶ノ名號ハ後月ニ至リテ之レヲ集メ新聞紙中船舶報告ノ部ニ記載シ以テ世ニ公布シ諸船長ヲシテ其船名及ヒ信號符字ヲ知ラシムルニ供シ又毎年其前年中ノ分ヲ編集シ船名錄増補ト號シテ發行ス

第七條 信號旗及ヒ信號書

一 萬國船舶信號旗及ヒ信號書ハ海軍省ニ於テ完備ノ者ヲ下附セシムルカ故ニ船主或ハ長必ス之レヲ購求ヲ願出ツ可シ

旗ノ寸法		旒ノ寸法	
小ハ	豎四尺六寸	橫六尺	豎三尺
中ハ	同五尺	同七尺	同四尺
大ハ	同六尺	同八尺	同五尺
			橫十一尺
			同十三尺
			同十五尺

但シ「マリエット」氏ノ万国海上信號旗一式ヲ有スル船ニ於テハ其旗ノ中ヲ以テ多分  
此信號ノ用ニ充テ得可ク唯MQVWノ旗ト信號示流トノ五旗ヲ新調スルニ於テハ其  
便用ヲ得可シ

第八條 海上士官ヲ望ム者ヲ検査スルノ個條

一 検査ノ要目左ノ如シ

第一 此信號法ノ各綱領ヲ了解シ得ルヤノ事

第二 旗信號、距離信號、及ヒ端舟信號ヲ容易且敏捷ニ爲シ及ヒ應答シ得ヘキヤノ事

第三 電信局信號器ヲ以テ信號ヲ爲シ得可キヤノ事

一 検査トハ検査官ノ有スル信號書及ヒ其雛形ノ旗ヲ以テ士官ヲランコトヲ望ム者ヲシテ實  
地ノ施行ヲ爲サシメ試験スル事ナリ

第九條 信號法

一 万国船舶信號ニ用フル旗ハ十八個ト信號示流即チ回答旗一個トナリ

燕尾旗 一個

旗 四個

方旗 十三個

一 此十八旗ハbヨリw迄ノ子韻符ニ代用ス而シテ此旗二個或ハ三個或ハ四個ヲ聯結シ掲ク

ル時ハ諸語句或ハ文章ノ意ヲ表スル者トス  
一 此旗旗ノ種類ハ左ノ如シ

燕尾旗

b 紅ノ燕尾

旗

c 白地ニ紅丸

d 藍地ニ白丸

f 紅地ニ白丸

g 黄ト藍(豎)

方旗

h 白ト紅(豎)

j 藍ト白ト藍(豎)

k 黄ト藍(豎)

l 藍ト黄(四個ノ石疊)

m 藍地ニ白ノ斜十字

n 藍ト白(十六個ノ石疊)

- p 藍地ニ白方
- q 黃
- r 紅地ニ黃ノ正角十字
- s 白地ニ藍方
- t 經ト白ト藍(堅)
- v 白地ニ紅ノ斜十字
- w 外郭藍中郭白心紅方

信號示施即チ回答施 紅ト白ト堅條

一 此信號書ハbcヨリ始メテfgmdニ至ル迄旗ノ聯結ノ順次ヲ逐書シタルナリ故ニ信號ヲ爲サントスル其意思ノ文ヲ索メンニハ此順次ニ就テ見ル可シ

第一編

- ①信號ニテ爲シ得可キ諸般ノ通信及ヒ尋問ノ爲メニ緊要ナル語句及ヒ文章
- ②地理信號及ヒ數表但シ是レハ現今未タ譯成ニ至ラス

第二編

①第一編ノ信號ノ類語集ニシテ第一編中ニ在ラサルモノハ伊呂波ノ順次ノ四旗信號ニテ増補セリ而シテ前後ノ二部ニ分ツ即チ前部ハ原文ノ翻譯後部ハ我伊

呂波ノ順次ヲ逐テ其事ノ種類ヲ區別シテ編集セル者ナリ

②信號ヲ爲サントスル時ハ必ス此第二編ノ後部ニ就テ爲ス可シ然レ此二部其譯成編集共ニ未タ完備セサレハ假ニ伊呂波順次ノ看出目錄ヲ未附シ以テ第二編ノ代用ニ供ス故ニ此目錄ニ就テ第一編中ヲ索ム可キナリ

第三編

端舟信號、距離信號、電信局信號器信號及ヒ佛國葡萄牙及ヒ以太利ノ電信局信號器信號場及ヒ信號場ノ名錄ヲ記載セリ但シ佛國葡萄牙以太利電信局信號器信號場等ノ名錄ハ現今未タ譯成ニ至ラス

第四編

衝突豫防規則、暴風雨豫報信號、溺者救法立弗布立ノ水路信號等ヲ記載セリ但シ立弗布立ノ水路信號ハ未タ譯成ニ至ラス

第五編

軍艦及ヒ船舶ノ名ヲ報知スル信號符字ヲ有スル者ハ船舶名錄集ナリ

一 万国船舶信號法ノ最モ稱揚スヘキ所ハ其簡易輕便ナルト區別分明ナルトニ在リ

第十條 信號方法

一 此万国船舶信號書ヲ以テ信號ヲ爲サント欲スル時ハ其以前ニ「ガフ」ニ上ケル國旗ノ下

ニ必ス信號示流ヲ掲ケ置ク可シ

一 信號示流或ハc 旒或ハd 旒ヲ唯一個用フル時ハ左ノ意ヲ表ス

○ 信號示流ハ回答旒ナリ

○ c 旒ハ 然リ

○ d 旒ハ 否

一 右信號ヲ除クノ外總テノ信號ハ二旗或ハ三旗或ハ四旗ヲ以テ爲ス可ク而シテ信號ノ種類ハ最上ノ旗ヲ以テ之ヲ識別セシム

○ 二信號

○ 燕尾最上ナルハ注意信號

○ 旒最上ナルハ方位信號

○ 方旗最上ナルハ緊急及ヒ危險信號

○ 三旗信號

○ 尋問、通信、經緯度及ヒ日月時等ノ如キ信號

○ 四旗信號

○ 燕尾最上ナルハ地理信號

○ c q 或ハ f 旒ノ最上ナルハ綴字及ヒ語信號

○ g 旒最上ナルハ軍艦ノ名

○ 方旗最上ナルハ官船商船ノ名

明治八年三月略ス

(一一二)西洋形船大小砲設備方(明治八年五月三十一日)

海軍官船ヲ除クノ外西洋形船へ賊難防禦ヲ爲大小砲設備ノ儀差許候條左ノ通可相心得此旨報告候事

第一條 海軍官船ヲ除ク外諸省使府縣所轄ノ西洋形官船並ニ人民所持ノ西洋形商船へ大砲徑四寸以内二門小銃三十挺設備スル事苦シカラズ但船ノ噸數ニ因リ本文ニ掲クル銃砲ノ數ヲ減スルカ又ハ銃砲ノ種類ヲ取捨スルハ其便宜ニ任スト雖モ若シ増置セントスルトキハ更ニ願出許可ヲ受クヘシ

第二條 大砲一門ニ彈藥五十發小銃一挺ニ同百發ヲ越ユヘカラス

第三條 船内へ銃砲ヲ設備スル時省使ハ正院へ上請シ府縣ハ內務省へ申出許可ヲ受クヘシ但人民所持船ノ分ハ其管轄廳へ願出許可ヲ受クヘシ而シテ該廳ニ於テハ免許狀ヲ與ヘ其旨內務省へ届出ヘシ

第四條 銃砲ノ設備ヲ許可セシキハ其旨海軍省へ通知スル事トス尤省使ノ分ハ正院ヨリシ



府縣並ニ人民ノ分ハ内務省ヨリ通知スヘシ

第五條 諸省使府縣並ニ人民ニ於テ外國ヨリ買入レノ船内ニ附屬セシ分モ前條ノ手續ニ依ルヘシ但銃砲彈藥等買入ル、節ハ明治五年正月第廿八號布告銃砲取締規則ニ從フヘシ

(一三二)船舶積量測度規則(明治十七年四月二十四日第十號布告)

第一條 凡ソ船舶海軍艦船ヲ除クノ積量ハ此規則ニ依リ測度スル者トス

第二條 船舶ノ積量ヲ測度スルハ總テ曲尺ヲ用ヒ尺位ヲ以テ單位トシ其尺度ハ分位ニ止ムヘシ

第三條 西洋形船ノ積量ハ百立方尺ヲ以テ一噸トシ日本形船ノ積量ハ十立方尺ヲ以テ一石トス

第四條 西洋形船ニシテ甲板一層ノ者ハ其甲板ヲ以テ量噸甲板トシ二層ノ者ハ其上層ヲ以テ量噸甲板トシ三層以上ノ者其最下ヨリ第二層ニアル者ヲ以テ量噸甲板トス

第五條 西洋形船ニシテ甲板一層若クハ二層ノ者ハ量噸甲板下ノ噸數ニ量噸甲板上諸室ノ噸數ヲ合セテ之ヲ該船ノ總噸數トシ又甲板三層以上ノ者ハ量噸甲板下ノ噸數ニ量噸甲板上各甲板間ノ噸數及ヒ最上甲板上諸室ノ噸數ヲ合セテ之ヲ該船ノ總噸數トス  
甲板ナキ者ハ舷端以下ノ噸數ヲ以テ該船ノ總噸數トシ又舷端以上ニ船室アレハ其噸數ヲ

合セテ之ヲ該船ノ總噸數トス

第六條 漁船ノ登簿噸數ハ總噸數ヨリ乗組人常用室及機關室ノ噸數ヲ除キタル者トス

帆船ノ登簿噸數ハ總噸數ヨリ乗組人常用室ノ噸數ヲ除キタル者トス

第七條 乗組人常用室トシテ除クヘキ噸數ハ總噸數ノ百分ノ六トス

第八條 機關室トシテ除クヘキ噸數ノ割合ハ左ノ如シ

外車汽船機關室ノ噸數該船總噸數ノ百分ノ二ヨリ三十マテハ總噸數ノ百分ノ三十七

暗車汽船機關室ノ噸數該船總噸數ノ百分ノ十三ヨリ二十マテハ總噸數ノ百分ノ三十二

機關室ノ廣狹ニ依リ前項ノ割合ニ適セサル者ハ該室ノ噸數ニ外車汽船ナレハ其二分ノ一

ヲ加ヘ暗車汽船ナレハ其四分ノ三ヲ加ヘタル者トス

第九條 日本形回漕船ハ船梁上下船艙ノ石數ヲ以テ該船ノ積石トシ又其構造回漕船ニ異ナル者ハ舷端以下ノ石數ヲ以テ該船ノ積石トス

第十條 船舶ノ噸數及ヒ積石測度ノ方法ハ布達ヲ以テ定ムヘシ

(一三三)樞密院議長及顧問官ノ年俸(明治廿一年四月廿八日)  
朕茲ニ樞密院議長及顧問官ノ年俸ヲ裁可ス

御名 御璽

樞密院議長及顧問官年俸  
 樞密院議長 六千圓  
 樞密院副議長 五千圓  
 樞密院顧問官 四千五百圓

第二編 民法並登記法

(一) 登記法(明治十九年法律第一號)

第一章 總別

明治二十年法律第二十號修正

- 第一條 地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ヲ爲ス者ハ本法ニ從ヒ地所建物ハ其所在地船舶ハ其定繫場ノ登記所ニ登記ヲ請フヘシ
- 第二條 地所建物船舶賣買讓與質入書入ノ登記ハ始審裁判所長之ヲ監督スヘシ
- 第三條 登記事務ハ治安裁判所ニ於テ之ヲ取扱フモノトス治安裁判所遠隔ノ地方ニ於テハ郡區役所其他司法大臣指定スル所ニ於テ之ヲ取扱ハシム
- 第四條 登記所ノ位置及其管轄ノ區域ハ司法大臣之ヲ定ム
- 第五條 登記官吏ハ登記事務取扱ニ付テハ始審裁判所長ノ監督ヲ受クルモノトス
- 第六條 登記簿ニ登記ヲ爲サル地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ハ第三者ニ對シ法律上其効ナキモノトス
- 第七條 地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ニ付キ登記ス可キ概目左ノ如シ

- 第一 地所ハ郡區町村名、字、番地、地目、反別若クハ坪數地券面ノ價格
- 第二 建物ハ郡區町村名、字、番地、地目、構造ノ種類、建坪、造作ノ有無
- 第三 西洋形船舶ハ汽船、風帆船ノ區別、船名、番號、登簿噸數、公稱馬力、汽機及汽罐ノ種類端船其他必要ノ所屬品
- 第四 日本形船舶ハ船名、番號、積石數、間數、端船其他必要ノ所屬品
- 第五 登記ノ事由
- 第六 金額
- 第七 質入書入ハ其期限及利息
- 第八 所有者及登記ヲ受クルモノ、氏名住所
- 第九 一筆ノ地所又ハ一棟ノ建物ヲ區別シ賣買讓與質入書入ヲ爲ストキハ其事實
- 第十 二番以後ノ書入ヲ爲シ又ハ書入ニ爲シタルモノヲ質入ト爲シ質入ニ爲シタルモノヲ書入ト爲ストキハ其事實
- 第十一 登記ノ年月日
- 第八條 登記ヲ請フ者アルトキハ登記官吏直ニ前條ノ概目ヲ審査シテ登記簿ニ登記シ本人ニ之ヲ示シ又ハ讀聞セタル上本人ヲシテ署名捺印セシメ且之ニ署名捺印ス可シ
- 第九條 地所建物船舶ニ關スル差押假差留處分及地所建物ノ収益差押ニ付テハ裁判所ノ命

同上

- 令書ニ依リ登記簿ニ其記入ヲ爲ス可シ
- 前項ノ記入ハ裁判所ノ命令アルトキニ非サレハ之ヲ取消スコトヲ得ス
- 第十條 登記ハ第一條第二項第十五條第二項第十六條第十七條及第十八條ヲ除クノ外契約者双方ノ請求若クハ裁判所ノ命令アルトキニ非レハ之ヲ爲シ又ハ變更シ又ハ取消ス可トヲ得ス
- 第十一條 登記ノ謄本又ハ抜書又ハ一覽ヲ要スル者ハ其登記所ニ出頭シテ之ヲ請求スルコトヲ得
- 第十二條 登記官吏ノ職務執行上ニ關シ不服アル者ハ管轄始審裁判所ニ抗告スルコトヲ得
- 第十三條 登記ニ關スル取扱ノ手續及登記簿ノ書式ハ司法大臣之ヲ定ム
- 第二章 賣買讓與
- 第十四條 地所建物船舶ノ賣買讓與ニ付キ登記ヲ請フトキハ契約者雙方出頭シ其證書ヲ示ス可シ
- 前項ノ場合ニ於テ其物件質入書入中ニ係ルトキハ買受人讓受人ニ於テ之ヲ了知セル旨ヲ申出其記入ヲ請フ可シ
- 第十五條 家督相續ニ因リ地所建物船舶ノ登記ヲ請フトキハ雙方出頭シ其證書ヲ示ス可シ
- 死亡者失踪者若クハ離縁戶主ノ遺留シタル地所建物船舶ヲ相續スル者登記ヲ請フトキハ

親屬又親屬ナキトキハ近隣ノ戸主二名以上連署ノ書面ヲ差出シ且証明書類アルモノハ之ヲ示スヘシ

第十六條 行政官廳ノ公賣處分ニ因リ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者登記ヲ請フトキハ落札達書及其代金完納證書ヲ示ス可シ

第十七條 官有ノ地所建物船舶ノ拂下又ハ無代價下渡ヲ受ケ登記ヲ請フトキハ其指令ノ本書若クハ達書ヲ示ス可シ

第十八條 民有ノ地所建物船舶ヲ官有ト爲シタルトキハ其官廳ハ第七條ノ概目ヲ示シテ登記ヲ求ム可シ

第十九條 裁判執行上ノ糶賣若クハ入札ニ因テ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者アルトキハ裁判所ノ命令ニ依リ其登記ヲ爲ス可シ

第二十條 地所船舶ノ賣買讓與ニ因リ地券鑑札ノ下付若クハ書換ヲ請フモノハ登記所ヨリ登記濟ノ証ヲ受クヘシ

第三章 質入書入

第二十一條 地所建物船舶ノ質入書入ニ付キ登記ヲ請フトキハ契約者雙方出頭シ其證書ヲ示ス可シ

貸借ノ爲メニ非スシテ義務ヲ果ス可キ保證ノ爲メ地所建物船舶ヲ質入書入ト爲シ其登記

同上

ヲ請フ者モ亦前項ノ規定ニ依ル可シ

第二十二條 書入ノ地所建物船舶ヲ重テ書入ト爲ストキハ第二債主ニ於テ之ヲ了知セル旨ヲ申出其記入ヲ請フ可シ書入ト爲リタル地所ヲ質入ト爲シ又ハ質入ト爲リタル地所ヲ書入ト爲ストキ亦同シ

第二十三條 質入書入契約ノ全部若クハ一部ノ解除又ハ變更ニ付キ登記ヲ請フトキハ契約者雙方出頭シ其證書ヲ示スヘシ

第二十四條 同一ノ地所建物船舶ニ付キ數個ノ登記ヲ爲ストキハ其登記ヲ請フ日時ノ前後ニ因リ登記ノ順序ヲ定ムルモノトス

第四章 登記料及手數料

第二十五條 地所建物船舶賣買ノ登記ニ付テハ其買受人左ノ賣買代價ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其登記料ヲ納ムヘシ

賣買代價

登記料

五圓未滿

五錢

五圓以上拾圓未滿

拾錢

拾圓以上貳拾五圓未滿

貳拾五錢

貳拾五圓以上五拾圓未滿

五拾錢

五拾圓以上百圓未滿 壹圓  
 百圓以上貳百圓未滿 貳圓  
 貳百圓以上三百圓未滿 三圓  
 三百圓以上四百圓未滿 四圓  
 四百圓以上五百圓未滿 五圓  
 五百圓以上七百五拾圓未滿 六圓  
 七百五拾圓以上千圓未滿 七圓  
 千圓以上千五百圓未滿 八圓  
 千五百圓以上貳千圓未滿 九圓  
 貳千圓以上五千圓未滿 拾圓  
 五千圓以上壹萬圓迄 拾貳圓  
 以上五千圓迄毎ニ貳圓ヲ增加ス

第二十六條 地所建物船舶讓與ノ登記ニ付テハ其讓渡人讓受人ニ於テ時價相當ノ價格ヲ定メ前條ニ掲タル金額ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其讓受人ヨリ登記料ヲ納ム可シ

第二十七條 地所建物船舶質入書入ノ登記ニ付テハ其質入人書入人ハ第二十五條ニ掲クル金額ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其登記料ノ半額ヲ納ム可シ

但一件ニ付金五錢ヨリ下スコトヲ得ス

第二十八條 第二十一條第二項ノ登記ニ付テハ價格ヲ定メ前條ノ例ニ依リ其登記料ヲ納ム

第九條第一項ノ記入ニ付テハ其價格ノ定マリタル物件ハ其價格又其價格ノ定マラサル物件ハ時々相當ノ價格ヲ定メ前條ノ例ニ依リ其登記料ヲ納ムヘシ

第二十九條 第十五條ノ登記ニ付テハ時價相當ノ價格ヲ定メ第二十五條ニ掲クル金額ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其登記料ノ五分一ヲ納ムヘシ

但一件ニ付キ金五錢ヨリ下スコトヲ得ス

第三十條 左ニ掲クル者ハ手数料トシテ金五錢ヲ納ムヘシ

第一 登記事件ノ取消又ハ其變更ノ登記ヲ請フ者ハ每一件

第二 登記ノ謄本若クハ抜書ヲ請フ者ハ每一枚

第三 登記ノ一覽ヲ請フ者

第三十一條 左ニ掲クルモノハ登記料及手数料ヲ要セス

第一 官廳ノ請求ニ係ル登記

第二 公立ノ學校病院公園及養育院ニ係ル登記

第三 社寺堂宇及墳墓地ニ係ル登記

第四 人民共有ノ用悪水路、溜池敷、堤敷、井溝敷、及公衆ノ間ニ供スル道路ニ係ル登記

第三十二條 登記所ニ於テ第二十五條第二十六條第二十八條第二項及第二十九條ニ從ヒ届出タル價格ヲ不相當ト認ムルトキハ其事件ニ關係ナキ者三名ヲ撰ヒ之ヲ評價人ト爲シテ其價格ヲ評定セシムヘシ

第三十三條 評價人ノ評價シタル價格届出ノ價格ヨリ増加スルトキハ其評價ニ關スル費用ハ其登記料ヲ納ムル者之ヲ負擔スヘシ若シ其價格届出ノ價格ト同價又ハ低下ナルキハ該費用ハ其登記用所ニ於テ之ヲ支辨スヘシ

第三十四條 評定人ニ撰ハレタル者ハ正當ノ事由ナクシテ之ヲ辨スルコトヲ得ス

第三十五條 評定人ノ日當ハ登記所ノ見込ヲ以テ一日金貳拾錢ヨリ五拾錢迄ヲ給スヘシ

○第五章 罰則

第三十六條 詐偽ノ所爲ヲ以テ登記料ヲ減脱シ及ヒ之ヲ通謀シタル者ハ貳圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

附則

第三十八條 明治十年第二十八號布告船舶買賣書入質手續同十三年第五十三號布告土地買賣讓渡規則同十四年第三十號布告地券証印稅則其他從前ノ法律規則中本法ニ抵觸スルモ

ノハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

第三十九條 地所賣買讓與荒地起返開墾鐵下年期明等總ス地券下付書換ニ係ル手續及其手數料ハ大藏大臣之ヲ定ム

第四十條 登記所ノ登記簿ニ未ダ登記セサル地所建物船舶ニ付キ登記ヲ請フ者ハ地所建物ハ其所在地船舶ハ其定繫場ノ戶長ノ證書ヲ以テ其所有者タルコト及其物件ニ故障ナキコトヲ示スヘシ

第四十一條 本法ハ明治二十年二月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治二十年六月十三日勅令第廿四號

登記法第三條ニ依リ郡區役所其他司法大臣ノ指定スル所ニ於テ取扱フ登記事務ノ費用ハ本年七月一日ヨリ國庫ノ支出トス

(二)登記法手續(明治十九年十二月)  
(司法省令甲第五號)

本年(八月)法律第一號ヲ以テ登記法創定ニ付キ明治二十年第二月以後登記ヲ請フ者ハ左ノ手續ニ依ルヘシ

第一條 登記ヲ請フ者ハ第一號書式ニ準シ登記ノ件目等ヲ記載シ實印ヲ押シタル名刺ヲ登記所ニ差出スヘシ

登記簿ノ謄本若クハ抜書又ハ登記簿ノ閲覧ヲ請フ者亦同シ

第二條 後見人ヨリ登記ヲ請フキハ後見人タルノ證書ヲ登記所ニ差出スヘシ

代人ヲ以テ登記ヲ請フキハ代理ノ委任狀ヲ付與シ之ヲ登記所ニ差出サシムヘシ

第三條 初テ登記ヲ請フ者ハ第二處書式ニ準シ區戸長ノ証明シタル印鑑ヲ登記所ニ差出スヘシ

第四條 地所ニ付キ初テ登記ヲ請フ者ハ地券ヲ登記所ニ示スヘシ

但現ニ質入中ノ地所ニ付テハ此限ニ在ラス

船舶ニ付テハ鑑札ヲ示スヘシ

但船舶ニ釘付シタルモノハ此限ニ在ラス

第五條 建物付ニ登記ヲ請フキハ其圖面ヲ登記所ニ差出スヘシ

建物ノ圖面ハ邸地ノ形狀坪數(段別)方位及建物ノ形狀間尺位置等ヲ記シ登記ヲ受クヘキ建物ノ圖ハ黒引黒字ト爲ス登記外ナル建物アルトキハ其圖ハ朱引朱字ト爲スヘシ

建物ノ圖面ニハ登記法第九條第十六條第十七條第十八條第十九條ノ場合ヲ除クノ外結約者双方之ニ署名捺印スヘシ

但同第十五條第二項ノ場合ニ於テ親屬又ハ近隣戸主之ニ連署スヘシ

地所船舶ニ付圖面アルキモ亦前項ニ定メタル署名捺印若クハ連署ヲ要ス

第六條 地所ヲ分割シテ賣買讓與シ又ハ質入書入ト爲ストキハ前條ニ準シ其圖面ヲ差出スヘシ

第七條 裁判執行上ノ糶賣若クハ入札ニ因リ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者其登記ヲ

請ヒ又ハ地所建物船舶ニ關スル差押、假差押、差留、假差留、假處分、及地所建物ノ収益

差押ニ付キ記入若クハ取消ヲ請フニハ裁判所ヨリ其命令書ヲ受ケ之ヲ登記所ニ示スヘシ

シ裁判言渡ニ依リ登記、變更若クハ取消ヲ請フキ亦前項ニ同シ

第八條 登記法第三十二條ニ依リ評價ヲ要スルキハ登記所ノ命令ニ從ヒ登記料ヲ納ムル者ヨリ評價費用ノ見積金額ヲ豫納スヘシ

第九條 登記濟ノ証ヲ請フ者ハ第三號書式ニ準シ物件等ヲ記載セル願書ヲ登記所ニ差出スヘシ

第十條 登記ヲ受タル物件ノ全部若クハ一部毀壞燒失流亡等ニ依リテ消滅シタルキハ其

物件ノ所有者ヨリ登記ヲ爲シタル登記所ニ書面ヲ以テ其旨ヲ届出ツヘシ

但其物件質入書入又ハ差押差留等ニ依ルキハ債主又ハ差押差留等ノ權利者ノ連印ヲ

要ス地目變換ノ場合ニ於テモ亦前項ノ例ニ準シ届出ヲ爲スヘシ

第十一條 船舶ノ定繫所ヲ更改シタルキハ原登記所ヨリ登記簿ノ謄本ヲ受ケ之ヲ轉入地

ノ登記所ニ差出シ其登記ヲ請フベシ同一ノ登記所ニ屬スル町村ニ轉入シタル場合ニ於

テハ其登記所ニ登記ノ變更ヲ請フヘシ  
第一號書式(用紙半紙半截)

住所

賣渡人 氏 名 印

住所

買受人 氏 名 印

船舶所 賣買(讓與)ニ付登記願  
此代價金何圓

此登記料金何圓何錢

年月日

又ハ

何々買入ニ付登記願  
此貸借金何圓

此登記料金何圓何錢

又ハ

家督 遺產相續ニ付登記願  
此價格金何圓

此登記料金何圓何錢

又ハ

何々拂下ヲ得候ニ付登記願  
此拂下代價金何圓

此登記料金何圓何錢

又ハ

何々登記ノ謄本書ハ拔書下付願  
此手數料金何錢

又ハ

又ハ

何々登記簿閱願  
此手數料金何錢

又ハ

又ハ

登記取消又ハ變更願  
此手數料金何錢

他皆以上ノ例ニ倣ヒ各別ニ認ムヘシ

第二號書式(印鑑用紙縦五寸横一寸但厚紙ヲ用フヘシ)



印鑑証明願

區役所又  
戸長役  
場ノ印

印鑑

何國何郡何町何番地

何 某

右印鑑御證明被成下度奉願候也

住所 氏 名 〇

某區  
戸長何某殿

某區長 何 某 官印

年月日

(三)登記官吏(明治十九年十二月三日  
司法省訓令第卅一號)

登記法第三條ニ基キ登記事務ハ治安裁判所判事及ヒ登記所所在ノ郡役所戸長役場ノ郡長戸長ヲシテ之ヲ取扱ハシム但治安裁判所書記郡書記及戸長役場吏員ハ判事郡長戸長ノ命ヲ受ケ事務ノ補助ヲ爲スコトヲ得

(四)登記法取扱規則(明治十九年十二月三日  
司法省訓令第卅三號)

本年法律第一號ヲ以テ登記法創定ニ付登記法取扱規則左ノ通之ヲ定ム

登記法取扱規則

第一章 登記所印章及ヒ登記簿

第一條 登記所ハ隸書ヲ以テ其署名ヲ刻シタル印章大小二顆ヲ調製シ其印影ヲ管轄始審裁判所ニ届ケ置ク可シ

第二條 登記簿ハ地所建物船舶ヲ分テ別冊ト爲ス可シ

登記簿ハ前項ノ外町村毎ニ冊ヲ分テ之ヲ設ク可シ但事件寡少ナル町村ニ付テハ數町村ヲ合セ一冊ト爲スコトヲ得此場合ニ於テハ各町村毎ニ見出シ付ス可シ

第三條 登記簿ハ一用紙毎ニ登記物件ノ番號ヲ付シ且其一用紙ヲ表題登記簿用紙中物件ノ欄ヲ設ケタル所ヲ云フ以下準之及ヒ甲乙丙ノ三區ニ分テ仍ホ其表題及ヒ各區ヲ數欄ニ分ツモノトス

其表題ハ登記法第七條ノ一二三四ニ掲ケタル項目ヲ登記スルノ所トス

其甲區ハ所有權ノ得有即チ買賣讓與等ヲ登記スルノ所トス

其乙區ハ抵當即チ質入書入ヲ登記スルノ所トス

其丙區ハ執行上ノ抵當即チ登記法第九條ニ記載シタル諸件ヲ記入スルノ所トス

第四條 登記簿ハ登記所ノ請求ニ因リ始審裁判所長之ヲ渡スモノトス

第五條 登記簿ハ始審裁判所長其枚數ヲ表紙ノ裡面ニ記載シテ之ニ氏名ヲ署シ官印ヲ捺シ且毎葉ニ契印ス可シ

第六條 町村ノ分合アリタル場合ニ於テハ登記所ハ其旨ヲ始審裁判所長ニ申告シ更ニ分合セシ町村ニ對スル登記簿ノ下付ヲ受ク可シ

前項ノ場合ニ於テ舊登記簿其他之ニ屬スル帳簿ハ現状ノ儘之ヲ保存シ己ニ登記シアル事件ノ變更取消ハ其登記簿ニ登記ス可シ

第二章 登記手續

第七條 登記所ニ於テハ受付帳ヲ製シ置キ登記ノ出願若クハ請求等ノ順序ニ從ヒ之ニ其受付事件ヲ記載シ番號ヲ付ス可シ

第八條 登記官ハ受付番號ノ順次ニ從ヒ願人ヲ取調ヘ又ハ請求書等ヲ審査シ且登記簿ニ就キ本人ノ所有物件ナルコトヲ確認シ仍ホ質入書入又ハ差押差留等ノ記入ノ有無ヲ調査シ若シ是等ノ登記アルトキハ之ヲ本人ニ示シタル上登記ノ手續ヲ爲ス可シ

登記官ハ登記ヲ爲ス前本人ノ印影ヲ檢シ區長ノ證明アル印鑑ト符合スルニ非レハ登記ヲ爲ス可カラズ

第九條 登記簿ニ未タ登記セサル地所建物船舶ニ付キ初メテ登記ヲ爲ス場合ニ於テ治安裁判所及ヒ郡役所ニアル登記所ハ地券鑑札及ヒ所管ノ公簿並ニ登記法第四十條ニ記載スル

證書ニ依リ戶長役場ニアル登記所ハ地券鑑札及ヒ所管ノ公簿並ニ其戶長役場ノ公簿若クハ登記法第四十條ニ記載スル證書ニ依リ物件ノ所有者ヲ確認シ其物件故障ナキニ於テハ先ツ登記簿表題ノ部ニ其物件ヲ記載シ所有者ヲシテ之ニ認印セシメタルト各區ニ登記ノ手續ヲ爲ス可シ

第十條 抵當ヲ登記スル場合ニ於テ未タ物件及ヒ所有者ノ登記アラサルトキハ前條ノ手續ヲ爲シタル上甲區中登記事由ノ欄内ニ書入若クハ質入ノ登記出願ニ付キ何々ノ證書地券鑑札及ヒ登記法第四十條ニ記載セシ證書ヲ云フ 及ヒ何々ノ公簿前條ノ公簿ヲ云フニ依リ記載セシ旨ヲ記シ負債者即チ物件ノ所有者ヲシテ所有者ノ欄内ニ署名捺印セシメタル上乙區中ニ出願事件ノ登記ヲ爲ス可シ

執行上ノ抵當ヲ記入スル場合ニ於テ未タ所有者ノ登記アラサルトキハ登記官ニ於テ前條及ヒ本條前項ノ手續ヲ爲シ物件及ヒ所有者ノ氏名ヲ記載シ其側ニ認印シタル上内區中ニ命令事件ノ記入ヲ爲ス可シ但後日其物件ニ關シ所有者ヨリ他ノ登記ヲ出願シタルトキハ所有者ヲシテ物件ニ認印シ及ヒ其氏名ノ下ニ捺印セシム可シ

第十一條 登記物件ノ番號ハ初メテ其物件ヲ記載スル毎ニ出願若クハ請求ノ順序ニ從ヒ之ヲ付スルモノトス但其番號ハ町村毎ニ之ヲ區別シ仍ホ地所建物船舶ヲ區別シテ之ヲ付ス可シ

同時ニ登記ヲ求メ且ツ同一ノ所有者ニ屬スル同種類ノ物件ハ同町村内ニ在リテ且合録ノ

爲メ混雜ヲ生スルノ憂ナキニ於テハ同番號中ニ記載ス可シ若シ其物件多數ニシテ同番號中ニ記載スル能ハサルトキハ所有者ノ意見ヲ聽キ便宜分割シテ之ヲ次ノ番號中ニ記載スルコトヲ得

第十二條 一番號中ニ登記セシ數物件ヲ分テ又ハ一物件ヲ割テ賣買讓與スルトキハ表題部中取消ノ欄内ニ其要領及ヒ第何號ニ移シタルコトヲ記載シ分割シタル物件ハ未ダ登記ヲ爲サ、ル用紙ニ記載シテ新番號ヲ付シ且第何號ヨリ移シタルコトヲ付記ス可シ其他ノ手續ハ通常ノ場合ニ同シ

前項ノ場合ニ於テ舊番號中分割セラレタル物件ハ之ヲ抹ス可シ若シ一物件ヲ割キタルトキハ更ニ殘餘ノ現狀ヲ記載ス可シ

數番號ニ登記セシ物件ヲ合併シテ賣買讓與スルトキハ各番號中甲區登記事由ノ欄内ニ其旨ヲ明記シテ登記ヲ爲ス可シ

第十三條 一番號中ノ物件ヲ分割シテ質入書入ト爲シ若クハ差押差留等ト爲ストキハ乙區若クハ丙區抵當事由欄内ニ何々ノ物件ヲ質入書入若クハ差押差留等ト爲シタルコトヲ明記シテ登記ヲ爲ス可シ

數番號ニ屬スル物件ヲ合併シテ質入書入ト爲ストキハ各番號中乙區抵當事由ノ欄内ニ其旨ヲ明記シテ登記ヲ爲ス可シ

第十四條 質入書入ト爲リタル物件ヲ賣買讓與スルトキハ甲區登記事由欄内ニ買受人讓受人ニ於テ登記第二十二條ノ場合ニ於テモ前項ノ例ニ準據ス可シ

第十五條 物件ヲ分割シテ賣買讓與スル爲メ第十二條ノ手續ヲ爲ス場合ニ於テ新ニ番號ヲ付スヘキ物件己ニ舊番號ノ物件ト共ニ書入質入ト爲リタルモノナルトキハ新番號ノ表題中物件ヲ記載シタル側ニ第何號舊番號ヲ云フノ物件ト連帶シテ抵當物トナリタルモノナルコトヲ付記ス可シ

其抵當ヲ取消シタル場合ニ於テハ前項ノ付記ヲ抹ス可シ

第十六條 質入書入ノ權ヲ賣買讓與相續ノ場合同除ク又ハ他人ニ於テ負債者ノ負債ヲ辨濟シテ債主ノ權ニ代ル等抵當權ノ他人ニ移リタル場合ニ於テ負債者承諾ノ上登記ヲ出願シタルトキハ之ヲ乙區變更ノ欄内ニ登記ス可シ

質入書入ノ債主負債者ト協議ノ上抵當物件ヲ引取り所有者ト爲リタル場合ニ於テハ乙區抵當取消ノ欄内及ヒ甲區登記事由ノ欄内ニ其要旨ヲ登記ス可シ

第十七條 質入ヲ變更シテ書入ト爲シ書入ヲ變更シテ質入ト爲シ又ハ利息期限等ニ變更シタル場合ニ於テハ之ヲ乙區變更ノ欄内ニ登記ス可シ

第十八條 登記法第十五條ノ場合ニ於テ登記ヲ爲ス可キ土地若シ華族世襲財產ナルトキハ地券及ヒ同第四十條ニ記載スル證書ニ依リ世襲財產タルコトヲ認メ其旨ヲ表題部中物件ノ側ニ記入ス可シ

第十九條 買賣讓與其他ノ方法ニ因リ曾テ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者其所有權ノ登記ヲ出願スルトキハ第九條ノ例ニ準シ之ヲ登記ス可シ

第二十條 従前ノ公證書ニ登記セシ書入質入ノ取消ヲ願出タルトキハ手数料ヲ徴收セス舊手續ニ依リ之ヲ終結ス可シ

若シ變更ノ登記ヲ願出タルトキハ第十條ノ例ニ準シ所有者及ヒ原契約ヲ登記シタル上乙區變更ノ欄内ニ其登記ヲ爲ス可シ此場合ニ於テハ變更ノ手数料ヲ徴收ス可キモノトス

第二十一條 登記ヲ受タル物件ノ全部若クハ一部毀壞燒失流亡等ニ依リテ消滅シ其旨ヲ届出タルトキハ表題部中取消ノ欄内ニ之ヲ登記シ其物件ハ朱抹ス可シ若シ殘餘アルトキハ

第十二條第二項ノ例ニ準シ其現狀ヲ記載ス可シ  
地目變換ヲ届出タルトキハ表題部中ニ記載シタル地目ヲ更正シ其旨ヲ付記ス可シ

前二項ノ場合ニ於テハ手数料ヲ徴收セサルモノトス  
第二十二條 登記所ノ同管内ニ在リテ船舶ノ定繫所ヲ更改シ其登記ヲ請フ者アルトキハ轉

入セシ町村ノ登記簿ニ其物件及ヒ所有者ヲ轉寫シ表題部中物件ヲ記載シタル側ニ某町村ヨリ轉入セシ旨ヲ付記シ若シ船舶既ニ抵當物トナリタルモノナルトキハ其旨ヲモ付記ス

可シ轉出セシ町村ノ登記簿ニハ其表題部中取消ノ欄内ニ轉出ノ旨ヲ記載シテ其物件ハ朱抹ス可シ

若シ他ノ登記所ニ屬スル町村ニ轉入スルトキハ原登記所ヨリ登記簿謄本ニ其旨ヲ付記シ之ヲ本人ニ下付シテ轉入スル登記所ニ差出サシメ其登記所ハ其謄本ニ依リ登記ヲ爲シ登

記簿ノ通知書ヲ原登記所ニ送致ス可シ原登記所ハ其通知ニ依リ取消ノ手續ヲ爲ス可シ  
前二項ノ場合ニ於テハ登記法第三十條第一第二ノ規則ニ依リ變更及ヒ謄本ノ手数料ヲ徴

收スルモノトス  
第二十三條 登記簿ニ記載スル願人ノ氏名ハ本人ヲシテ自署セシメ其名下ニ捺印セシム可

シ若シ自署スル能ハサルトキハ登記官代書シ其旨ヲ付記ス可シ  
第二十四條 登記事件ニ附屬スル圖面アルトキハ登記簿表題部中ニ其旨ヲ記載シ其圖面ニ

登記物件ノ番號ヲ記シ登記官之ニ認印シ帳簿ニ編入ス可シ  
第二十五條 登記ノ爲メ差出タル契約書ニハ登記簿ノ上登記官之ニ登記物件ノ番號ヲ記載

シ且ツ認印シテ本人ニ還付ス可シ  
第二十六條 登記簿ノ一用紙中或ル欄内更ニ登記ヲ爲スヘキ餘白ナキニ至リタルトキハ其

登記簿中未ダ登記ヲ爲サシル他ノ用紙ニ原番號ヲ轉寫シ之ニ其番號ノ第二ナルコトヲ付記シ原用紙番號ノ下ニハ第一ノ文字ヲ追加シ且第何冊何丁ニ續ク旨ヲ記載ス可シ第三以

下ノ續ヲ設クルトキ亦此例ニ準ス  
前項ノ場合ニ於テ新用紙ニハ原用紙ニ記載アル登記ノ順番ヲ繼續シテ之ヲ付ス可シ

第二十七條 登記簿ニ登記ヲ爲ス字體ハ楷書ヲ用ヒ鮮明ナルヲ要ス又金錢物品ノ員數及ヒ年月日ヲ記スルニハ必ス壹貳參拾ノ文字ヲ用フ可シ

登記ヲ爲スニハ之ヲ墨書ス可ク訂正若シハ挿入等ヲ爲スニハ之ヲ朱書ス可シ文字ハ之ヲ改竄ス可カラズ若シ刪除スルトキハ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存ス可シ

訂正挿入削除等ヲ爲シタルトキハ本人ヲシテ之ニ認印セシム可シ

第二十八條 後見人若クハ代人ヨリ登記ヲ出願セシトキハ後見人タルノ證若クハ代理ノ委任狀ヲ出サシメ之ヲ帳簿ニ編入ス可シ

前項ノ證書ヲ差出サ、ルトキハ登記ヲ爲ス可カラズ

第二十九條 登記官自己ノ權利義務ヲ登記ス可キ場合ニ於テハ治安判事及ヒ郡長ハ書記戶長ハ次席吏員ヲシテ代テ登記ヲ爲サシム可シ

第三章 帳簿

第三十條 登記所使用ノ帳簿ハ左ノ如シ

- 一 地所登記簿
- 二 建物登記簿
- 三 船舶登記簿
- 四 受付帳

五 登記見出帳三

六 印鑑簿區戶長ノ證明シタル印鑑ヲ挿入シタルモノ

七 謄本下付帳

八 登記濟證下付帳

九 圖面綴込帳

十 請求書綴込帳行政廳ノ登記請求書ヲ綴込タルモノ

十一 登記願書綴込帳登記法第十五條第二項ノ書面ヲ綴込タルモノ

十二 證明書綴込帳登記法第四十條ノ證書及ヒ印鑑證明書等ヲ綴込タルモノ

十三 名刺綴込帳

十四 代理證書綴込帳

十五 屆書綴込帳

第三十一條 登記簿ノ謄本若クハ拔書ヲ請フ者アルトキハ其用紙ニ寫シ謄本下付帳ト割印シテ之ヲ下付ス可シ但手數料ヲ領收セサル前ニ謄本又ハ拔書ヲ下付スルコトヲ得ス

第三十二條 謄本ハ登記簿一用紙ノ全部ヲ遺漏ナク謄寫シテ之ヲ作ル可シ

第三十三條 登記濟ノ證ヲ請フ者アルトキハ其願書ニ記載アル物件ヲ登記簿ト照査シタル上登記濟ノ旨ヲ朱記シ登記濟證下付帳ト割印シテ之ヲ下付ス可シ

第三十四條 登記見出帳ハ地所建物ニ付テハ地所ノ番號ニ依リ船舶ニ付テハ鑑札ノ番號ニ依リ登記物件ノ番號ヲ付スル毎ニ各番號ヲ記入スルモノトス

同番號ノ地所ニシテ數筆ニ分レタルモノアルトキハ地券面ノ符號ヲ番地ノ下ニ記載ス可ク同番地ニアル建物ニシテ棟ヲ異ニシタルトキハ建物ノ番號ヲ番地ノ下ニ記載シテ之ヲ區別ス可シ番號若クハ符合ヲ同フスル地所又ハ番地若クハ棟ヲ同フスル建物ヲ分割シテ賣買讓與質入書入ト爲ストキハ其各部ノ地所若クハ建物ニ子丑寅卯ノ符號ヲ付シテ之ヲ區別ス可シ

前二項ノ區別ハ登記簿ニモ亦之ヲ記載ス可キモノトス

第三十五條 登記ニ關スル帳簿ハ常ニ書籍ニ藏メ其封緘ヲ嚴ニシ非常持退ノ準備ヲ爲シ勉テ紛亂毀損ヲ豫防ス可シ

登記ニ關スル帳簿ハ裁判所ノ命令アルニ非サレハ登記所外ニ出スコトヲ得ス

第三十六條 登記簿ノ閱覽ヲ請フ者アルトキハ官吏ノ職務ヲ以テ閱覽スルトキハ外吏員ノ面前ニ於テ之ヲ閱覽セシム可シ

第三十七條 登記所ニ於テハ毎月登記件數表ヲ調製シ翌月五日マテニ其地ヲ發シ管轄始審裁判所ニ送致ス可ク其裁判所ニ於テハ之ヲ取纏メ合計表ヲ付シ其月末マテニ其應ヲ發シ司法省ニ差出ス可シ

第四章 登記料手数料及ヒ評價費用

第三十八條 登記料ハ登記ヲ爲ス前之ヲ納メシム可シ登記事件ノ取消若クハ變更ノ登記ヲ請フ者ノ納ム可キ手数料ニ付テモ亦同シ

第三十九條 登記法第三十二條ニ依リ評價ヲ要スル場合ニ於テハ登記所ハ其費用ヲ見積リ登記料ヲ納ムル者ヨリ之ヲ豫納セシム可シ

第四十條 登記所ニ於テハ評價人ヲシテ速ニ物件ノ所在ニ就キ價格ヲ評定シ其評價書ヲ差出サシム可シ

評價人中ノ一名意見ヲ異ニスルトキハ他ノ二名ノ意見ニ依リ價格ヲ定ム可ク若シ各自意見ヲ異ニスルトキハ更ニ評價人ヲ選定ス可シ

第四十一條 登記法第三十三條ニ依リ評價ノ費用ヲ本人ニ負擔セシム可キトキハ豫納金ヲ以テ之ヲ支辨シ殘額アルトキハ之ヲ還付ス可ク不足スルトキハ之ヲ納完スルマテ登記ヲ爲ス可カフス若シ登記所ニ於テ費用ヲ負擔ス可キトキハ豫納金ノ全額ヲ還付ス可シ

(五)登記簿及登記帳簿程式



第 壹 號						
順番	名稱	金額	利息	期限	抵當ノ事	登記日
第一番	書入	金何圓	年何分	明治何年何月何日	明治何年何月何日 付書入証書ニ依リ 登記ス	明治何年何月何日
第二番	書入	金何圓	年何分	明治何年何月何日	明治何年何月何日 付ノ書入証書ニ依 リ登記ス	明治何年何月何日
第三番						

六百七十一

第 壹 甲 區				
由	格價	登記日	利權	取消
	賣買代價何圓	明治何年何月何日	何國何郡何村何番 甲 某	
	評價々格(評價シタル例)何圓	明治何年何月何日	何國何郡何村何番 乙 某	乙某ヨリ丙某ニ對スル何何ノ訴訟ニ付明治何年何月何日某裁判所ノ下ニテ命令書ニ依リ取消ス 明治何年何月何日 官氏名
		明治何年何月何日		
	届出價格何圓	明治何年何月何日		

六百七十



第 壹 號 第 壹 區 丙				第 壹 區			
消 取	日 記 入 付	事 由	上 抵 行 執 行	金 額	順 番	消 取	消 取
明治何年何月何日 官氏名印	明治何年何月何日	何某ノ命書ニ依リ 官氏名印	寅某ノ有スル書入付 ニ對シテ命書ニ依リ 何某ノ命書ニ依リ 官氏名印	差 留 金 何 圓	第 壹 番	明治何年何月何日 官氏名印	明治何年何月何日 官氏名印
明治何年何月何日 官氏名印	明治何年何月何日	何某ノ命書ニ依リ 官氏名印	付某裁判所ノ下 何某ノ命書ニ依リ 官氏名印	差 押 金 何 圓	第 貳 番		
	年				第 參 番	明治何年何月何日 官氏名印	明治何年何月何日 官氏名印
	月 日				第 肆 番		
	年				第 伍 番		
	月 日				第 陸 番		

六百七十

第 壹 乙		
更 取	變 記 登	者 債 負
	明治何年何月何日 官氏名印 何國何番地 乙 丑 子 氏 某 某 某 印 印 印 印	何國何郡何村何番地 乙 某 印
		何國何郡何村何番地 乙 某 印

六百七十二

第 貳 番		順番		件
事ノ記登	者有所	第 壹 番	第 貳 番	
明治何年何月何日 付ノ買取書ニ依 リ登記ス 官氏名印	何國何郡何村何番地 庚 某印	何國何郡何村何番地 辛 某印		
裁判執行ノ入札拂 ニ付辛某へ落札セ シテ以テ明治何年 何月何日某裁判所 ノ下シタル命令書 ニ依リ登記ス 官氏名印				消

六百七十五

第 貳 號		物件番號
物		
何郡何村 何番地 何畝歩印 何年月何日 明治何年何月何日 第壹號ヨリ裂地ニ付キ記ス 官氏名印		
取		

六百七十四

第 貳 號							
主 債	登 記 日 付	由 事 當 抵	期 限	利 息	金 額	名 稱	順 番
	年 月 日		年 月 日				第 番
	年 月 日		年 月 日				第 番
	年 月 日		年 月 日				第 番
	年 月 日		年 月 日				第 番

六百七十七

第 一 甲 區				
消 取	者 付 移 利 權	登 記 日 付	格 價	由
	何國何區何町何番地 丁某印	明治何年何月何日	賣買代價 何 圓	
		明治何年何月何日	落札代價 何 圓	
		年 月 日		
		年 月 日		

六百七十六

第 貳 號 第 一 丙 區				區			
消	取	記入 日付	事由	金額	順番	消	取
明治何年何月何日 令書ニ依リ取消スル命 明治何年何月何日 官氏名印	明治何年何月何日 令書ニ依リ取消スル命 明治何年何月何日 官氏名印	明治何年何月何日	執行 上抵 當ノ 爲メニ 記入ス 官氏名印	差押 金 何 圓	第 壹 番 第 一 番 第 一 番		
		年 月 日					
		年 月 日					
		年 月 日					

六百七十九

第 壹 乙 區		
消	取	者 債 負

六百七十八

第 壹 號 第 貳 式			
格 價	由 事	者 有 所	順 番
何 圓 買上代價	官 氏 名 印 何年何月何日以テ明治 ノ登記請求書ニ依リ 登記ス	某 縣 廳	第 五 番
何 圓 届出價格	官 氏 名 印 明治何年何月何日付 某縣廳ノ無代價下渡 指令書ニ依リ登記ス	何國何區何町何番地 戊 某 印	第 六 番
			第 七 番
代 價 何 圓	官 氏 名 印 右約定証書ニ依リ 登記ス	何國何郡何村 已 某 印	第 七 番
	明治何年何月何日付 ノ約定証書ヲ以テ質 入ノ返濟ニ充ツル爲 メ己某へ引取リタリ		

六百八十一

第 壹 號 第 貳 式		番 物 件
件 物		
消 取		

六百八十

號		主 債		日登記		由事ノ當抵		期限		利息	
X		X		年		X		年		X	
				月日				月日			
地何國何郡何村何番		已 某		明治何年何月何日		官 氏 名		明治何年何月何日		X	
地何國何郡何村何番		辰 某		明治何年何月何日		官 氏 名		明治何年何月何日		年 何 分	
				年 月 日				年 月 日			

六百八十三

第 區 甲					
金額	名稱	順番	消 取	者付移利權	日登記
X		第 番		何國何區何町何番地 (此住所氏名ハ登記 官ニ於テ記スヘシ)	明治何年何月何日
質入 金何圓		第 參 番		某 縣 廳 (上欄ニ準ス)	明治何年何月何日
書入 金何圓		第 番	X	X	年 月 日
		第 番		何國何區何町何番地 戊 一 某 印	明治何年何月何日

六百八十二



第 三 號		順 番		件
事	登 記	者 有 所	第 壹 番	
	本號地所書入登記 出願ニ付地券及何 國何郡何(町)村何 長何某ノ証明書ニ 依リ登記ス 官氏名印	何國何郡何村何番地 甲 某印	第 壹 番	
			第 貳 番	
	明治何年何月何日 明治何年何月何日 付ノ讓與証書ニ依リ 登記ス但讓受人ニ於 テ該地所仁某書入 トシテ知ス 官氏名印 (但以下ノ朱線ハ負債ノ 義務ヲ終ヘタル中ニ施 スモノトス)	何國何郡何町何番地 乙 某印 丙 某印 丁 某印 戊 某印 己 某印 庚 某印 全 某印 全 某印	第 貳 番	消
		何國何郡何村何番地 辛 某印 壬 某印 癸 某印 全 某印 (共有者數多アリテ上欄ニ 記入スル能ハサル中ハ 線ヲ施スト本例ノ如クニ)	第 參 番	

第 號 第			物件 番號
物			
一 畑何町何反何畝步 地價金何圓	同 字何村 何番地何村 何町何反何畝步 地價金何圓	何郡何村 何番地何村 何町何反何畝步 地價金何圓	
取			



號		第					
主	債	登記日付	事由	期限	利息	金額	順番
何國何郡何村何番地	仁某印	明治何年何月何日	明治何年何月何日 官氏名印	明治何年何月何日	利息	金何圓	第壹番
		年		年			第
		月日		月日			番
		年		年			第
		年月日		年月日			番
		年		年			第
		年月日		年月日			番

六百八十九

區 甲 第					
消	取	者付移利權	登記日付	價格	由
			明治何年何月何日		
			年		
			月日		
		何國何郡何番地 甲某	明治何年何月何日	評價々格 何圓	
			年		
			年月日		

六百八十八

區 丙 第 號 三 第					區
消 取	日 記 入 付	事 當 上 執 行 抵	金 名 順 額 稱 番	消 取	
	年		第		
	月 日		番 第		
	年		第		
	月 日		番 第		
	年 月 日		番 第		
	年 月 日		番 第		
	年 月 日		番 第		

六百九十一

乙 第			者 債 負
消 取	記 登	登 付 右 日 限 双	何 國 何 郡 何 村 何 番 地
		登 付 右 日 限 双 記 ノ 明 迄 ヲ 方 ス 約 治 延 明 協 官 何 年 何 期 治 議 氏 何 月 何 年 何 上 某 某 名 何 何 何 書 印 印 日 日 何 入 日 日 何 期	甲 某 印 何 國 何 郡 何 村 何 番 地
		登 付 右 日 限 双 記 ノ 明 迄 ヲ 方 ス 約 治 延 明 協 官 何 年 何 期 治 議 氏 何 月 何 年 何 上 某 某 名 何 何 何 書 印 印 日 日 何 入 日 日 何 期	甲 某 印 何 國 何 郡 何 村 何 番 地
		登 付 右 日 限 双 記 ノ 明 迄 ヲ 方 ス 約 治 延 明 協 官 何 年 何 期 治 議 氏 何 月 何 年 何 上 某 某 名 何 何 何 書 印 印 日 日 何 入 日 日 何 期	甲 某 印 何 國 何 郡 何 村 何 番 地

六百九十

第 一 號			件
事ノ記登	者有所	順番	
		第 一 番	消
		第 二 番	
		第 三 番	
		第 四 番	

六百九十三

第 一 號			物件番號
物			
同番宅地第何號	一煉化石二階家	建坪何拾何坪	何區何町 何番宅地第何號 壹棟印
同番宅地第何號	一木造瓦葺平家	建坪何拾何坪	壹棟印
同番宅地第何號	一土藏	建坪何坪	壹棟印
取			
何番宅地第何號			
一木造瓦葺平屋 壹棟印			
右明治何年何月何日全部燒失シタルニ依リ取消ス			
官 氏 名 印			

六百九十三

第一號						
主債	登記日付	事由、當抵	期限	利息	金額名稱	順番
	年月日		年月日			第 番
	年月日		年月日			第 番
	年月日		年月日			第 番
	年月日		年月日			第 番

六百九十五

甲區第				
消取	者付移利權	登記日付	格價	由
		年月日		
		年月日		
		年月日		
		年月日		

六百九十四

區 丙 第 號 一 第					區
消 取	日 記 付 入	事 當 上 執 由 行 抵 行	金 名 額 稱	順 番	消 取
	年 月 日			第 番	
	年 月 日			第 番	
	年 月 日			第 番	
	年 月 日			第 番	

六百九十七

乙 第		
更 取	變 登	者 債 負

六百九十六

第 號		順番	件
事ノ記登	者有所		
		第	消
		番	
		第	
		番	
		第	
		番	
		第	
		番	

六百九十九

第 號 一 第		番號	物件
物			
何々	何々	端船	瀛鐘
何々	何々	瀛機	公稱馬力
何々	何々	登簿噸數	深
何々	何々	何噸	幅
何々	何々	何尺	長
何々	何々	何本	檣
何々	何々	何々	第一西洋形瀛船
何々	何々	何々	定繫所何
何々	何々	何々	第何號(鑑札番號)
何々	何々	何々	何々九印
取			

六百九十八

號		第						
主	債	日登	由事、當抵	期限	利息	金額	名稱	順番
		年月日		年月日				第 番
		年月日		年月日				第 番
		年月日		年月日				第 番
		年月日		年月日				第 番

七百二

區 甲 第					
消	取	者付移利權	日登	格價	由
			年月日		
			年月日		
			年月日		
			年月日		

七百三

第 第 號 丙 區					區
消 取	日 記 付 入	事 當 上 執 由 行 抵	金 名 順 額 稱 番	第	消 取
	年 月 日			第 番	
	年 月 日			第 番	
	年 月 日			第 番	
	年 月 日			第 番	

七百三

第 乙 第		
更 變	者 債 負	
消 取	記 登	

七百二



第 號		順番	件
事	登 記 者 有 所		
		第 番	消
		第 番	
		第 番	
		第 番	

七百五

第 號 貳 第		物件 番號
物		
定繫所何 第何號(鑑札番號) 一日本形漁船印	石數	何石積
長	何間	
幅	何間	
深	何間	
端船	何艘	
何々	何々	
何々	何々	
長	何間	
何々	何々	
取		

七百四

第 號							
主 債	日 登 記	由 事 當 抵	期 限	利 息	金 額	名 稱	順 番
	年 月 日		年 月 日				第 番
	年 月 日		年 月 日				第 番
	年 月 日		年 月 日				第 番
	年 月 日		年 月 日				第 番

七百七

區 甲 第				
消 取	者 付 移 利 權	日 登 記	格 價	由
		年 月 日		
		年 月 日		
		年 月 日		
		年 月 日		

七百六

第 第 號 第 區 丙					區		
消	取	日記 付入	事當上執 由，抵行	金額	順 番	消	取
		年 月 日			第 番		
		年 月 日			第 番		
		年 月 日			第 番		
		年 月 日			第 番		

七百九

第 乙 第		
更 變		者 債 負
消	取	記 登

七百八

(六)登記料及手数料収納手續(明治十九年十二月十四日)

登記料及手数料収納手續

第一條 登記料ハ第二部歳入科目ノ手数料ノ項中初行ヘ登記料及手数料ノ目ヲ設ケ整理スルモノトス

第二條 登記所ハ國庫金取扱所又ハ現金仕拂所ニ於テ登記料預リ證ニ押用スル印鑑ヲ徴シ置ク可シ

第三條 登記所ニ於テ登記料又ハ手数料ヲ上納セシムルニハ登記願人ヲシテ國庫金取扱所若クハ現金仕拂所ヘ現金ヲ預ケ入レ其預リ證ヲ以テ登記所ニ差出サシム可シ

第四條 登記所ニ於テハ前條預リ證ノ證印ヲ檢シ收入簿ニ記入シタル上領收證ヲ登記願人ニ付與スヘシ但シ領收證及收入簿ハ左ノ雛形ニ準據スヘシ

第五條 治安裁判所ノ登記官ハ本年閣令第三號歳入歳出納規則第二十七條ニ據リ納付書ニ預リ證ヲ添ヘ更ニ國庫金取扱所若クハ現金仕拂所ヘ納付シ其領收ヲ證シタル納付書ハ遞付書ヲ以テ會計主務官ヘ送付報告ス會計主務官ハ大藏省令第四號歳入取扱順序第二十三條ニ依リ整理スルモノトス

第六條 郡役所戸長役場ニアル登記所ニ於テハ第五條ノ手續ニ依リ國庫金取扱所又ハ現金仕拂所ニ納付シ其領收ヲ證シタル納付書ハ一箇月毎ニ取纏メ翌月五日以内ニ其管轄始審

裁判所ニ送納ス可シ

第七條 國庫金取扱所又ハ現金仕拂所ナキ地方ノ登記所ニ於テハ現金ヲ以テ收入シ十日毎ニ(金額五拾圓ニ充ツ)取纏メ納付書ヲ添ヘ便宜ノ國庫金取扱所又ハ現金仕拂所ヘ納付シタル上前二條ノ手續ヲ爲ス可シ

第八條 始審裁判所ニ於テ郡區役所戸長役場ニアル登記所ヨリ送納ヲ受ケタルトキハ會計主務官ニ於テ登記件數表ト照合帳記ノ上大藏省令第四號歳入取扱順序第二十三條ニ據リ整理スルモノトス

表

明治何年何月  
登記料及手数料收入簿

某 登記 所

明治十九年十二月四日

司法省訓令第三十四號附屬雛形

裏 說明

一 雛形ニ「」印ヲ付スルモノハ記入ノ一例ヲ示スモノナリ用紙ハ朱截半紙ヲ用フヘシ  
一 ①印ハ登記所角印章②印ハ其長印章ニシテ③印ハ登記官ノ認印ナリ明治年月日トアル

第二編 登記料及手数料収納手續

ハ收入セシ日附ヲ記スヘシ  
 一番號ハ此領收證ノ順ヲ追ヒ一號ヨリ起シ記載スヘシ尤會計年度ヲ以テ改メヘシ  
 一種類ノ欄内ニハ地所賣買家屋讓與等其收入ノ性質ヲ記スヘシ  
 二乙形ハ領收證トシテ納人ニ渡シ甲雌形ハ登記料及手數料收入簿トシテ一箇月毎ニ表紙  
 ヲ附シ一冊ニ綴リ登記所ニ備置クヘシ

甲		明治	年	月	日
號番	第	號			
名氏人納		何			
金		何圓			
種類		地所讓與			

乙		號番	第	號	納人	何	某
金		何圓					

登記料及手數料

右領收候也

明治 年 月 日

〔某〕登記所 ①

(七)登記簿調製手續(明治十九年十二月十五日司)

登記簿調製手續

- 第一 登記簿、登記簿謄本、登記簿抜書及ヒ登記件數表ノ用紙ハ美濃紙ヲ用ヒ登記料及手數料領收證ノ用紙ハ半截ノ半紙ヲ用ヒ始審裁判所ニ於テ調製シ下渡ス可シ但登記簿及ヒ謄本ハ紙數三枚ヲ以テ一用紙ト爲スモノトス
- 第二 登記受付帳、登記見出帳、登記簿謄本下付帳、登記濟證下付帳、印鑑簿ノ用紙及ヒ圖面綴込帳其他帳簿ノ表紙ハ始審裁判所ヨリ之ヲ下渡ス可シ但治安裁判所ニ付テハ此限ニ在ラズ
- 第三 登記所ニ於テハ左ノ書式ニ準シ凡一箇年間ニ要スヘキ帳簿用紙及ヒ表紙ヲ豫算シ毎年十一月十五日マテニ始審裁判所ニ請求ス可シ但治安裁判所ニ付テハ書式中第五以下ノ記載ヲ要セサルモノトス

書式

請求書

一 登記簿

何冊

内

何冊

紙數何枚

何冊

紙數何枚

一 登記簿謄本用紙

何部

一 登記簿抜書用紙

何枚

一 登記件數表用紙

何枚

一 登記料及領收證用紙

何枚

一 登記受付帳用紙

何枚

一 登記見出帳用紙

何枚

一 登記簿謄本下付帳用紙

何枚

一 登記濟證下付帳用紙

何枚

一 印鑑簿用紙

何枚

一 帳簿ノ表紙

何枚

右及請求候也

明治 年 月 日

某登記所

某始審裁判所

御中

第四 前項ノ帳簿用紙及ヒ表紙ハ本年ニ限リ明治二十年二月ヨリ同年十二月マテニ要スルキ分ヲ豫算シ本年十二月十五日マテニ其請求ヲ爲ス可シ

(八)登記手續ニ付命令書下付方(明治十九年十二月四日 司法省訓令第廿六號)

登記法施行ニ付テハ本年當省令甲第五號第七條ニ依リ命令書ノ下付ヲ請フ者アル場合ニ於テ之ヲ相當ナリトスル時ハ其請求者ニ命令書ヲ下付スル儀ト心得可シ

(九)登記法位置變更届出方(明治十九年十二月四日 司法省訓令第廿四號)

本年當省令甲第四號ヲ以テ登記所位置及ヒ管轄區域相定候ニ付テハ自今郡區町村ノ分合改稱等アル時ハ其旨當省へ届出ツ可シ

(一〇)登記所ニ於テ郡區役所ヨリ帳簿受取期限(明治十九年十二月四日 司法省訓令第廿八號)

第二編 登記手續ニ付命令書下付方 登記法位置變更届出方 登記所ニ於テ郡區役所ヨリ帳簿受取期限 七百十五

本年<sup>十二</sup>内務省訓令第二十七號ヲ以テ從前區役所戶長役場ニ於テ取扱タル地所賣買讓渡質入書入與書割印帳並ニ建物船舶賣買讓渡書入質記載帳及ヒ右物件ニ關スル差押又ハ公證猶豫願ノ書類等悉皆取纏メ各葉ノ合目ニ契印シ一帳簿毎ニ其紙數ヲ記シ之ニ官印ヲ捺シ別ニ引繼帳簿目錄ヲ添ヘ來ル明治二十年一月二十九日ヲ以テ管轄登記所ヘ引繼方<sup>ソ</sup>儀相連候<sup>ニ</sup>付テハ登記所ニ於テハ其受取方取計<sup>ヲ</sup>可<sup>シ</sup>

(一一)登記ヲ後見人ヨリ請求手續(同上第卅九號)

來ル明治二十年二月一日以後登記法施行ニ付後見人ヨリ地所建物船舶ノ登記ヲ請<sup>フ</sup>トキハ明治十六年七月十日内務省達ノ通り其證書又ハ願書ニ親屬連署ノ上ナラテハ登記ヲ爲サ<sup>ル</sup>儀ト心得可<sup>シ</sup>

(一二)登記法施行ニ付物品假差押手續(明治十九年十二月四日司法省告示第七號)

本年法律第一號ヲ以テ登記法創定セラレタルニ付テハ明治十五年第六十號布告公證猶豫願ノ手續ハ明治二十年二月一日以後消滅スヘキヲ以テ地所建物船舶ニ對シ假差押ヲ爲サント欲スル者ハ管轄裁判所ニ其請求ヲ爲ス可キモノトス

〔一三〕地所書入質入規則(明治十六年一月十七日)

先般田地永代賣買被差許候ニ付自今質入書入致シ候節ハ左ノ規則ノ通り可相心得事

地所質入書入規則

- 第一條 金穀ノ借主<sup>地</sup>ヨリ返済スヘキ證據トシテ貸主<sup>金</sup>ニ地所ト証文トヲ渡シ貸主其作徳采ヲ以テ貸高ノ利息ニ充候<sup>地</sup>地所ノ質入ト云フ
- 第二條 金穀ノ借主<sup>地</sup>ヨリ返済スヘキ證據トシテ貸主<sup>金</sup>ニ地所引當ノ証文ノミヲ渡シ借主ノ作徳采ノ全部又ハ一部ヲ貸主ニ渡シ利息ニ充候<sup>地</sup>書入ト云フ
- 第三條 金穀ノ借主<sup>地</sup>ヨリ返済スヘキ證據トシテ貸主<sup>金</sup>ニ地所引當ノ証文ノミヲ渡シ借主ヨリ其利息トシテ采又ハ金ヲ拂ヒ候<sup>地</sup>テモ亦書入ト云フ
- 第四條 地所ヲ質入<sup>地</sup>ニ致シ候節ハ地券ヲモ相渡シ可申其年期ノ儀ハ三ケ年ヲ限ル可<sup>シ</sup>尤三ケ年以下期限取極候儀ハ勝手タルヘク且ツ年限取極候廉ハ判然証文面ニ記載致シ置可申事
- 但書入ノ儀ハ地券ヲ相渡スニ及ハス其年限長短其本文ノ限ニアラスト雖<sup>地</sup>凡<sup>地</sup>双方相對ニテ取極候年限ハ本文同様証文面ニ記載致シ置可申事
- 第五條 質入又ハ書入ノ地所期限ニ至リ貸主借主相談ノ上金穀ヲ返サスシテ地所ヲ引渡候節ハ舊地主其地券ノ裏ニ金主ニ可引渡旨相認メ其地ノ戶長加判ノ止金主ヨリ新地券書替

可願出事

第六條 質入ノ地所ハ金主ニテ其地所耕作可致等ニ付テハ地租諸役トモ總テ金主ニテ可相勤事

但其段管轄廳へ届出證書可差出事

第七條 書入ノ地所ハ地主ニテ耕作致シ候儀ニ付地租諸役トモ無論地主ヨリ可相勤事

但管轄廳へ届出ニ不及候事

第八條 管轄違ノ者或ハ同管轄ト雖モ縣隔ノ地所ヲ質ニ取候節ハ其現地ノ村町へ金主ノ名代人相定置其地租諸役トモ差支無之様可爲相勤事

第九條 質入又ハ書入証文ニハ必ス其村町戸長ノ與書証印ヲ取ル可シ其村町戸長ノ役場ニ

此條七年  
六號布告  
正ヲ以テ改ス

ハ與書割印帳ヲ備へ置キ証文ノ與書割印ヲ願出ル時ハ帳面ト證文トニ番號ヲ朱書シ割印ヲ押シ與書ヲ爲ス可シ若シ書與並ニ割印ナキ証文ハ一質入又ハ書入ノ證據ニハ不相成ニ付右証文ヲ以テ訴出ルニ於テハ負債主財産分産ノ時債主他ノ債主ニ對シ先キ取リノ特權ヲ失ヒ獨リ質入又ハ書入ナキ金穀貸借ノ處分ヲ可受事

但戸長不在ノ節ハ其旨ヲ記シ副戸長與書調印スヘシ

此條七年  
五十二號  
布告ヲ以テ改ス

第十條 一箇所ノ地ヲ二重三重ニ書入候儀ハ不相成候得共若シ第一番ノ金主へ引當ニ入シ置候事ヲ第二番ノ金主承知ノ上ニテ地所代價ノ餘分ヲ見込「又其地所ヲ引當ニ借添へ致

シ候儀ハ不苦尤借主身代限リノ處分ニ相成候節ハ右地所糶賣ノ代金ヲ以テ第一番ノ者へ元利ノ金數ヲ引渡シ其餘金ヲ以テ第二番ノ者へ元利ノ金數ヲ引渡シ第三番以下右ニ準シ引渡可申若シ糶賣ノ金高ヲ以テ先ッ第一番ノ金主へ元利ノ金數ヲ引渡シ其餘金第二番ノ金主へ引渡スヘキ元利ノ金數ニ不足スルモ其不足ノ分ヲ償フテ並ニ第三番以下ノ金主ニ償フコトハ平常引當ナキ債主ニ身代限償却ノ例ニ從ヒ外物品糶賣代價ノ内ニテ相當ノ割賦ヲ以テ引渡可申事

但第二番ノ金主へ受取候証文ハ地所代價ノ餘分ヲ見込借添候旨ヲ書載可申事

但第二番ノ金主へ受取候証文ハ地所代價ノ餘分ヲ見込借添候旨ヲ書載可申事

第十一條 地所ハ勿論地券ノミタリトモ外國人へ賣買質入書入等致シ金子請取又ハ借受候儀一切不相成候事

第十二條 質入年季中天災ニテ地所流亡等其地ノ全形ヲ失フニ至ル時ハ地券ハ消滅「スル

理ニ付貸主ヨリ借主ニ對シ外地所又ハ物品ヲ代リ質ニ差入サセ証文書替ヲ求ムルコトヲ得

此條七年  
五十二號  
布告ヲ以テ改ス

ヘシ若シ代リ質ニ差入ルヘキ地所物品等コレナキモハ訴訟ノ末身代限リノ處分ニ及ナベシ又池成野地成等ニ變換シ或ハ闕崩等ノタメニ其地ノ幾分ヲ失フモハ變換ノ模様及殘存ノ大小ニ應シ規則ニ基キテ地券書替願出ヘキ儀ニ付若シ其變換殘存ノ地ハ貸金數高ノ償ヲナスニ足ラサルト見込場合ニ於テハ貸主ヨリ借主ニ對シ外地所又ハ物品ヲ増質ニ差入



レサセ證書替ヲ求ムルヲ得可シ若シ増質ニ差入ヘキ地所物品等無之時ハコレ亦訴訟ノ末身代限ノ處分ニ及フヘキ事

但貸主借主相對示談ハ格別ノ事

第十三條 質入ノ地所年期中天災ニ因リ荒蕪ト相成ハ貸主<sup>主金</sup>ヨリ起返ノ見込ヲ定メ借主<sup>主地</sup>承諾ノ證書ヲ取リ其管轄ヘ可願出尤モ入費ハ借主ヨリ償フ可キ事

但借主起返ノ入費ヲ出スヲ能ハサルハ證書ヲ以テ其地所ヲ貸主ニ引渡シ可申尤相對示談ノ處置ハ格別ノ事

第十四條 當今質入又ハ書入致シ置年期中ノ分ハ前文規則ニ照準シ當七月限リ証文相改メ可申事

第十五條 是迄質入書入ニ致シ置候分ハ前約ノ年季据置不苦尤証文面等前文規則ニ觸候廉ハ總テ相改可申事

第十六條 從前取結ヒタル質入書入ノ約定ニテ明治六年七月三十一日前ニ期限ヲ過去リタル分ニテ債主ニ於テ貸金返済方ニ付延期ノ勘辨ヲ加フル者ハ來十月三十一日迄ニ其地所所管ノ戶長役場ヘ届出地所質入書入規則第九條ニ準シ與書割印ヲ受クヘシ若シ右日限内與書割印ヲ受ケスレテ後日其證書ヲ以テ訴訟ニ及フ時ハ質入書入ノ證據ニハ相立サルニ付裁判上糶賣分配ノ時ハ先取ノ權利ヲ失ヒ質入書入ナキ貸借同様ノ處分ニ及ラヘキ事

六年百六十七號布告  
十五年以テ  
十五條ヲ  
増補ス  
六年第七十六號ヲ  
以テ增加ス

○第四拾六號明治六年三月廿七日司法省布達

從前質地ヨリ起ル訴訟ハ證文中ニ年季明不受戻候ハ、流地ニ可致旨之文言有之分ハ期月ヨリ二ヶ月右文言無之分ハ十年ノ内訴出候ハ、受戻申付候處當八月ヨリ以後ハ流地文言有無ニ不抱年季期不受戻シテ訴訟ヲ爲ス時ハ明治六年第五拾壹號御布告ニ基キ二ヶ月亦ハ十年ノ猶豫ヲ與ヘス直ニ糶賣ノ手續ヲ以テ裁判可致事  
但原告被告雙方熟議ノ濟方ハ此限ニアラス

〔一四〕利息制限法

六十六號布告(明治十年九月)

利息制限法左ノ通相定候條此旨布告候事

第一條 凡ソ金銀貸借上ノ利息ヲ分テ契約上ノ利息ト法律上ノ利息トス

第二條 契約上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ定メ得ヘキ所ノ利息ニシテ元金百圓以下

ハ一個年ニ付百分ノ二十二(二割)百圓以上千圓以下百分ノ十五(一割五分)千圓以上百分ノ十二(一割二分)以下トス若シ此限ヲ超過スル分ハ裁判上無効ノモノトシ各其制限ニ迄引直サシムヘシ

第三條 法律上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ利息ノ高ヲ定メサル時裁判所ヨリ官渡ス

所ノモノニシテ元金ノ多少ニ拘ハラズ百分ノ六(六分)トス  
 第四條 第二條ニ依リ定限利息ノ外總テ人民相互ノ契約ヲ以テ禮金棒利等ノ名目ヲ用ル者  
 アルトモ總テ裁判上無効ノモノトス  
 第五條 返還期限ヲ違フル時ハ負債主ニ對シ若干ノ價金罰金違約金科料等ヲ差出ス可キト  
 ナ約定スルコトアルモ概シテ損害ノ補償ト看做シ裁判官ニ於テ該債主ノ事實受ケタル損害  
 ノ補償ニ不當ナリト思量スル時ハ之レニ相當ノ減少ヲ爲スコトヲ得

(一五)利息計算法(明治六年十月廿八日司 法省第七十四號布達)

明治六年當省第三拾八號金穀貸借利息ノ儀裁判決定迄計算可致旨及布達置候處右ハ貸借ノ  
 金穀返濟之日亦ハ身代限配當金處分濟ノ日迄利息ヲ計算致シ候ト可相心得此旨布達候事

〔タ〕(一六)貸借ノ證書他人へ讓渡方(明治九年七月六日 第九拾九號布告)

金穀等借用證書ヲ其貸主ヨリ他人ニ讓渡ス時ハ其借主ニ證書ヲ書換ヘシムヘシ若シ之ヲ書  
 換ヘシメサルニ於テハ貸主ノ讓渡證書有之モ仍ホ讓渡ノ効ナキモノトス此旨布告候事

〔ヨ〕(一七)養子女(明治八年十二月九日 第二百九號達)

婚姻又ハ養子養女ノ取組若クハ其離婚離縁令相對熟談ノ上タリモ雙方ノ戶籍ニ登記セザ  
 ル内ハ其效ナキ者ト看做スヘク候條右等ノ届方等閑ノ所業無之様精々説諭可致置此旨相達  
 候事

明治十年六月十九日司法省達

丁第四十六號

大審院  
 上等裁判所  
 地方裁判所

八年第二百九號御達ノ儀ニ付有馬判事ヨリ甲號ノ通出ニ因リ乙號ノ通大政官へ上申候處  
 丙號ノ通御裁令相成候條此段爲心得相達候事  
 甲號

擬律伺

明治八年第二百九號公布婚姻又ハ養子養女ノ取組若クハ其離婚離縁令相對熟談ノ上タリ  
 トモ雙方戶籍ニ登記セサル内ハ其效ナキ者ト看做ス可ク云々ト有之條付テハ雙方父母親屬  
 熟談ノ上人ノ妻トナリ男女ノ子アル者ト雖モ戶籍ニ登記無之者ハ犯姦告訴等ノ節無論處女  
 ト看做シ處分致ス儀ニ可有之尤右ノ者夫又ハ夫ノ祖父母父母ヲ謀殺毆傷罵詈等ニ至ル迄總  
 テ凡人ヲ以テ論シ且人ノ養子女トナリテ同居シ實際親子ノ會釋ヲ爲ス者ト雖モ前同斷ノ者  
 ハ皆凡人ヲ以テ處分致シ可然哉已ニ戶籍法規則確定ノ上ハ婚姻又ハ養子女其時々送籍等ヲ

不爲者ハ無之候等ニ候得共邊土僻隅ノ愚民ニ至テハ絶テナシトモ難確定候ニ付犯者アルニ  
臨ミ實際ト條理上ト不都合ヲ可生様有之關係不勘聊疑義ヲ生シ候條豫メ御指揮ヲ受置度此  
旨相伺候也

在宮崎縣

明治九年四月十八日

七等判事有馬純行

司法卿大木喬任殿

乙號

太政官へ上申

婚姻又ハ養子女ノ取組若クハ離縁等ノ儀ニ付テハ八年第二百九號ヲ以テ使府縣へ達セラレ  
タリ然ルニ該達ハ文意稍明確ナ欠キ或ハ宮崎縣伺ノ如キ疑團ヲ生スルアリト雖モ篤ト該達  
ノ文意ヲ熟案スルニ仮令ヒ相對熟談ノ上タリモ云々ノ文字アリテ既ニ其婚姻ヲ行ヒ夫婦ト  
爲リタル者ヲ指的スルニアラス其主意ヲ約言スレハ婚姻養子ノ取組等ヲ爲スニ當リ雙方ノ  
熟談ノミニテハ一概ニ之ヲ夫婦父子ト見ル可カラサル旨ヲ示シタルモノナリ(尤モ最初該  
達施行ノ際ハ此辨明ト其旨意ヲ異ニセシヤモ知ル可カラサレト今日ノ日法律ノ改良脩正ヲ  
要スルニ當テハ成ルヘク舊法ヲ破毀セス之カ辨明ヲ以テ其効ヲ得セシムルヲ良トス)然ル  
ニ若シ之ヲ以テ既ニ婚姻ヲ行ヒ親族隣里モ之ヲ認許セシ者ニ適用シテ凡人ヲ以テ處分スル

ハ實ニ人類社會ノ根本タル一家親族ノ大倫ヲ亂スヘキ法律ト云ハサルヲ得ス  
別紙有馬判事伺ノ如キ其實明々タル夫婦親子ニシテ獨リ戶籍ノ登記ヲ欠ク者若シ謀殺故殺  
犯姦等ノニアランニ凡人ヲ以テ之ヲ論セン耶是レ其形ヲ論シテ其實ヲ論セサル者大ニ法律  
ノ原旨ニ悖戻スト謂フ可シ

然リト雖モ其戶籍登記ノ届ヲ爲サ、ル情實ニ因リ元ト其婚姻等ノ成リ立タサル不良ノ所爲  
アルモノハ其効ヲ失ハシムル者モ之レアルヘシ因テ別紙之通指令可及ト存候且左ノ指令案  
ノ趣旨ニ從ヒ各裁判所へ念ノ爲メ本省ヨリ布達ニ及ヒ度此段相伺候條早速御裁令相成度存  
候也

丙號

太政官ヨリ御指令

何之趣八年第二百九號ノ諭達後其登記ヲ怠リシ者アリト雖モ既ニ親族近隣ノ者モ夫婦若ク  
ハ養父子ト認メ裁判官ニ於テモ其實アリト認ムル者ハ夫婦若シク養父子ヲ以テ論ス可キ儀  
ト相心得ヘシ

〔タ〕(一八代人規則(明治六年六月十八日) 人民一般商業及ヒ其他ノ事ニ因リ代人ヲ以テ契約取引等致シ候規則別紙ノ通被定候條此旨

相達候事

代人規則

第一條 凡ソ何人ニ限ラス己レノ名義ヲ以テ他人ヲシテ其事ヲ代理セシムルノ權アルヘシ  
但シ本人幼年等ニテ其事理ヲ辨シ難キ時ハ其後見人及ヒ親族ノ者協議ノ上代人ヲ任ス  
ルヲ得ヘシ

第二條 凡他人ノ委任ヲ受ケ其事件ヲ取扱フ者ハ代人ニシテ其事件ヲ委任スル者ハ本人ナ  
リ故ニ代人委任上ノ所行ハ本人ノ關係タルヘシ

第三條 「凡代人ハ心術正實ニシテ滿廿歲以上ノ者ヲ撰ムヘシ」

第四條 代人ハ總理代人部理代人ノ別アリ總理代人ハ其本人一身上諸般ノ事務ヲ代理スル  
者ニシテ部理代人ハ特ニ其委任スル部内ノ事務ヲ代理スルヲ得ル者トス

第五條 凡本人ヨリ代人ヲ任シ他人ト契約取扱ヲ爲サント欲スル時ハ必ス實印ヲ押シタル  
委任狀ヲ與フ可シ

但シ其家業取扱ノ場所ニ於テ通常ノ事務ヲ取扱ハシムルノ類ハ別段委任狀ヲ與フルコ  
及ハス

第六條 委任狀ハ總理代人又ハ部理代人タル事及ヒ其委任シタル權限ヲ明白ニ記載ス可シ  
第七條 委任狀書式左ノ通

九年第  
拾四號  
正全告  
文ヲ以  
改テ

(拙者拙者共)儀某ノ事件ニ付何誰ヲ以テ(總理代人部理人)ト定メ拙者ノ名義ニテ左ノ件  
々ノ事ヲ代理爲致候事

一何々ノ事但權限ノ次第ヲ分條記載スヘシ  
右代理ノ委任狀仍而如件

年號何月何日

住所身分

姓

名

印

後見人等ハ住所身分何  
誰ノ後見人ト記スヘシ

第八條 代人ヲ任スルノ權限ハ豫メ規定シ難キモノト雖モ其本人幼弱疾病事故等ニテ長ク  
委任セントスルキハ其地方ニ新聞紙アラハ之ニ記入セシメ世上ニ公布スヘシ

(一九)建物書入質規則及賣買讓渡規則(明治八年九月三十日)

諸建物書入質規則并ニ賣買讓渡規則別紙ノ通相定候條來ル十二月一日ヨリ施行可致此旨布  
告候事

建物書入質規則

第一條 金穀ノ借主又ハ預リ主ヨリ返済スヘキ證據トシテ預ケ主ニ對シ引當ト爲ス所ノ建  
物ノ圖面ト證人トニ戸長ノ公證ヲ受ケタル者預ケ主ニ渡シ置タルヲ建物ノ書入質ト云フ

第二編 建物書入質規則及賣買讓渡規則

第二條 書入質ト爲ス建物自身所有ノ地所ニ建テ在ルキハ書入質證文ニ自身持地ノ建物ナ  
ルコトヲ記入スヘシ又借地ニ建テ在ルキハ書入質ヲ爲スモノ其地主チシテ貸地タルコトヲ證  
スルノ與書ヲ爲サシムヘシ若シ借地ノ建物コシテ地主ノ與書ナキ證文ハ書入質ノ效ナキ  
ニ付書入質ナキ借用證文ト看做スヘシ

「但官有ノ借地ニ建テ、在ル時ハ其所屬管廳ニ請ヒテ其貸地タルコトヲ證スルノ與書ヲ  
請クヘシ」

第三條 金穀ノ預借主ヨリ建物引當ノ證文ト建物ノ圖面トヲ建物ノ在ル地ヲ管轄スル戸長  
役場ニ差出シ戸長ノ與書割印ヲ受クルコトヲ公證ヲ受クルト云フ

第四條 建物書入質ノ證文ニ添フタル圖面中ニ書入質ト爲ス所ノ建物ノ圖ハ朱引朱字ト爲  
シ書入質ノ外ナル建物ノ圖ハ墨引墨字ト爲スヘシ第一號書式及ヒ二號  
書式ヲ見合スヘシ

第五條 戸長役場ニ於テハ建物書入質記載帳ヲ備ヘ置キ證文ノ與書割印ヲ願出ル時ニ其大  
旨ヲ帳面ニ記入シ而シテ帳面ト證文ト番號ヲ朱書シ割印ヲ押シ與書ヲ爲シ圖面ニモ同シ  
番號ヲ朱書シ割印ヲ押スヘシ若シ戸長不在ノ節ハ其旨ヲ記シ副戸長與書割印スヘシ

第六條 建物ヲ以テ金穀借用又ハ預リノ引當ト爲シタル證文ニテ前條ノ規則ニ背キ公証ヲ  
受ケサル者ハ書入質ノ效ナキニ付書入質ナキ借用證文ト看做ス可シ

第七條 此規則施行以後建物書入質ノ借用證文ハ領リ証文ニハ必ラス返濟ノ期限ヲ定ム可

シ若シ其期限ヲ定メサル者ハ書入質ノ效ナキニ付書入質ナキ(借用)證文ト看做ス可シ

第八條 此規則施行以前ニ契約シタル建物質入又ハ引當ノ借用金穀又ハ預リ金穀ニテ返濟  
期限ヲ定メナキ証文ヲ所持スル者ハ明治九年二月廿八日迄ニ金穀預主又ハ其相續人ニ掛  
合此規則ニ從ヒタル書入質ノ證文ニ改ム可シ若シ預主又ハ其相續人証文ヲ改メサルキハ  
明治九年四月三十日迄ニ建物ノ在ル地ヲ管轄スル裁判所ニ訴フ可シ

但シ明治九年四月三十日ヲ以テ訴入發途ノ期ト定メ其訴人ノ住所又ハ寄留ノ地所ト裁  
判所トノ距離八里ニ一日ノ猶豫ヲ與フ

第九條 此規則施行以前ニ契約シタル建物質入又ハ引當ノ金穀借用證文又ハ預リ證文ヲ所  
有スル者ハ返濟滿期ニ至ルト至ラサルトニ論ナシ明治九年二月廿八日迄ニ金穀預主又  
其相續人ニ掛合此規則ニ從ヒタル書入質ノ證文ニ改ムヘシ預主  
借主若シ又ハ其相續人証  
文ヲ改メサルキハ明治九年四月三十日迄ニ建物ノ在ル地ヲ管轄スル裁判所ニ訴フヘシ

但書前同斷

第十條 建物ノ在ル地ヲ管轄スル裁判所ニ於テハ原告人ノ訴狀ヲ受取タルキヨリ三日内ニ  
裁判所ヨリ被告人ノ建物ノ在ル地ノ戸長ニ對シタル報知狀ヲ原告人ニ下付シ速ニ戸長ニ

送達セシムヘシ右ノ報知狀ニハ何府管下寄留何某ノ訴訟ニ因リ何大區何小區何番地ノ建  
物ヲ書入質ニ爲ス証文ニ公証スルコトヲ差留ムル旨ヲ記載スヘシ而シテ其訴訟落着ニ至リ

シ時ハ公証ノ差留ヲ解クヲ速ニ戸長ニ報知スヘシ  
第十一條 第八條及ヒ第九條ノ規則ニ背キ明治九年五月一日以後ニ至リ此規則施行以前ニ  
契約シタル建物質入又ハ引當ノ金穀預借預リ証文ヲ所有スル者ハ書入質ノ效ナキニ付書入質  
ナキ預借預リ証文ト看做スヘシ

第十二條 一棟ノ建物ヲ二重三重ニ書入質ト爲スコトハ嚴禁ナレモ若シ第一番ノ金主ニ書入  
質ト爲シタルコトヲ第二番ノ金主承諾ナレハ建物代價ノ餘分ヲ見込ミ又其建物ヲ書入質ニ  
借添ト爲スコトヲ得ヘシ尤借主身代限ノ處分ニ至ルキハ右建物糶賣ノ代金ヲ以テ第一番ノ  
者ニ元利ノ金數ヲ引渡シ其餘金ヲ以テ第二番ノ者ニ元利ノ金數ヲ渡シ第三番以下右ニ準  
シ引渡スヘク若シ糶賣ノ金高ヲ以テ先ツ第一番ノ金主ニ元利ノ金數ヲ引渡シ其餘金第二  
番ノ金主ニ引渡スヘキ元利ノ金數ニ不足スルキハ其不足ノ分ヲ償フコトハ平生書入質ナキ  
貸主ニ身代限ノ償却ノ例ニ從ヒ外物品糶賣代價ノ内ニテ相當ノ割賦ヲ以テ引渡スヘシ  
但第二番ノ金主ニ渡シ置ク書入質ノ証文ニハ建物代價ノ餘分ヲ見込ミ借添タル旨ヲ書  
載スヘシ

第十三條 書入質ト爲シタル建物燒失流亡等ニ至リシ時ハ建物ノ所持主又ハ代理人ヨリ遲  
クトモ七日内ニ其趣ヲ書面ニ記シ戸長役場ニ届出ツヘシ戸長役場ニ於テハ建物書入質記  
載帳ノ朱書番號ニ引合セ朱筆ヲ以テ點合ヲ爲シ其傍ニ燒失流亡等ノ趣ヲ略記シ年月日ヲ

記シ戸長ノ實印ヲ押スヘシ第三號書式ヲ見合スヘシ

第十四條 書入質ノ建物燒失流亡等ニ至リシキハ貸主ヨリ借主ニ對シ代リ質ヲ受取ルコトノ  
求メヲ爲スコトヲ得ヘシ若シ借主代リ質ヲ出スコトヲ肯ハス又ハ出シ能ハサルキハ借用金穀  
返濟期限未滿内ト雖モ貸主ヨリ借主ニ對シ元利返濟ヲ求ルノ訴ヲ爲スコトヲ得ヘシ

建物賣買讓渡規則

第一條 自身所有ノ地ニ建テ在ル建物ヲ賣渡シ又ハ讓渡シテ爲サント欲スル者ハ讓渡証文  
ト圖面トニ戸長ノ與書割印ヲ受ク可シ又借地ニ建テ在ル建物ノ讓渡証文ニハ其地主ニ請  
ヒ其地主ヨリ貸地タルコトヲ証スルノ與書ヲ受ケタル上ニテ戸長ノ與書割印ヲ受ク可シ  
「但官有ノ借地ニ建テ在ル時ハ其所屬官廳ニ請ヒテ其貸地タルコトヲ證スル與書ヲ受ク  
ヘシ」

第二條 建物ノ買受又ハ讓受ヲ爲サント欲スル者ハ自身又ハ其代人建物ノ在ル地ノ戸長役  
場ニ至リ建物書入質記載帳ヲ見合シタル上其讓渡証文ヲ受取リ然シテ後ニ戸長役場ニ至  
リ戸長又ハ副戸長ノ面前ニテ何太區何小區何番地ノ何番ノ建物ヲ何某ヨリ讓受スル旨ヲ  
書入質記載帳ニ記入シ年月日并ニ苗字名ヲ記シ實印ヲ押スヘシ第四號書式ヲ見合スヘシ

「但官有ノ借地ニ建テ在ル時ハ其所屬官廳ニ請ヒテ其貸地タルコトヲ證スルノ與書ヲ受  
クヘシ」

十年一月十七日  
號布告  
追加

十年四月廿五日  
號布告  
追加

十年八月廿九日  
號布告  
下六字ヲ削除ス

第三條 戶長役場ニ於テ建物買渡証文ノ奥書割印ヲ願出ル時ハ是亦建物書入質記載帳ニ記入ナルヲ及ヒ証文ニ奥書シ圖面ニ割印スルヲ建物書入質規則第五條ニ準シ公証ヲ與ルノ手續ヲ爲スヘシ

第四條 書入質ト成リタル建物ヲ買受タル者ハ其建物ノ書入質トナリタル金數ノ償却ヲ引受クヘシ但シ買受人ニ於テ其建物所有ノ權ヲ拋棄スル時ハ書入質ノ金數ノ償却ヲ引受クルニ及ハス

第五條 第四條ノ場合ニ於テ口主ノ後ヲ受ケタル相續人ハ前戶主ヨリ讓受タル建物所有ノ權ヲ拋棄スト雖モ書入質ノ金數ノ償却ヲ引受ク可シ

第一號 書式美濃紙大半紙又ハ右寸法ニ同シキ紙ヲ用ユ (△印ハ朱書ナリ)

明治何年何月何日書入質

何大區何小區何番地建物

第一番 何 坪

第二番 何 坪

第三番 何 坪

譬へハ圖ノ如キ朱引ノ建物ヲ書入質ト爲スルハ第一番ヨリ第三番ニテ合三棟ヲ書入質ト爲スヲ証文ニ記入シ圖面ト共ニ質取主ニ渡シ置クヘシ但シ圖面ノ寫一枚ヲ戶長役場ニ出シ置クヘシ

何府何大區何小區何番地住居寄留

何縣何大區何小區何番地

建物持主 何 某 印

何 某 殿

第二番 何 坪

第三番 何 坪

第二號 書式若シ一枚ノ紙ニテ狹キ片ハ何枚モ繼キ合セ繼目ノ裏ニ繼目印ヲ押スヘシ

明治何年何月何日書入質

何大區何小區何番地建物

第一番 何 坪

第二番 何 坪

第三番 何 坪

書入質之外也

譬へハ圖ノ如ク朱引ノ建物ノミニテ第一番第二番合二棟ヲ書入質ト爲スルハ其旨ヲ証文ニ記入シ他ノ建物ハ墨引ニテ書入質ノ外也ト記シ圖面ト共ニ質取主ニ渡スヘシ但シ圖面ノ寫一枚ヲ戶長役場ニ出シ置クヘシ

何府何大區何小區何番地住居寄留  
 建物持主 何某印  
 何某殿

第三號 書式 建物購入質記帳帳ニ燒先流亡等ノコヲ書込ムノ法

△何號 何年何月何日  
 何大區何小區何番地何番ノ建物ヲ何某ヨリ何某ニ書入質ト爲タリ  
 △何年何月何日 燒失  
 △戶長 △何某印  
 △何號 何年何月何日

第四號 建物購入質記帳帳ニ建物ノ買受又ハ讓受ノコヲ書込ムノ法

何年何月何日  
 何年何月何日何大區何小區何番地ノ何番ノ建物ヲ何某ヨリ 買受 申候也  
 何大區何小區何番地 住居 寄留  
 何某印

（二〇）單身戶主死亡跡財產處分方（明治二十年九月十日長崎縣同令十一月十六日內務司法連帶指令）

單身戶主死亡跡相續者無之者ノ財產成規ニ依リ五ヶ年間區戶長ニ於テ保管中左ノ場合ニ於テ處理上疑團ヲ生シ候ニ付此段請訓候也

第一條 遺留財產ノ內土地ハ税金不納ノ爲成規ニヨリ公賣ニ付シ所有權已ニ落札人ニ歸シタルヲ以テ地主ヨリ土地引渡ヲ請求スレバ該地ニアル建物ハ第一第二債主アリテ今猶保管中ナレハ之レカ處分ヲ了ルノ後ニ非レハ右ニ當ル敷地落札人へ引渡スヘカラサル義ト相心得可然哉

第二條 第一債主ハ戶主ト生前契約アル趣ヲ以テ依然遺留家屋ニ住居セリ然ルニ未タ所有權ノ第一債主ニ移リタルニ非ス郡區役所ニ於テ保管スヘキ筈ナルヲ以テ右等居住者ハ無論保管者ヨリ退去ヲ命スヘキモノト相心得可然哉

第三條 返金契約期限ヲ經過スルモ債主ヨリ裁判處分ヲ仰カサルカ爲メ成規ノ期限間之ヲ保管スルキハ益負債額相嵩ミ且ツ第一條ノ如キ地主ノ權利ヲ妨ケザルト不都合ヲ生ス右ノ場合ニ於テハ保管者ヨリ債主ヲ促シ告訴セシムヘキ義ニ候哉

指令  
 第一條 建物ノ保管中ニ拘ハラヌ公賣ニ付セラレタル敷地ハ落札人へ引渡スヘキモノトス



第二條 家屋ノ所有者生存中負債ノ爲メニ債主ニ家屋ヲ貸與シ債主ニ於テ所有者生存中ヨリ引續キ現ニ住居シタルモノナレハ直ニ退去ヲ命スルヲ得サルモノトス但負債者ノ利益ノ爲メ家屋貸借ノ解約ヲ爲スハ格別ナリ

第三條 債主ヲ促シ出訴セシムヘキモノニアラス但該財産成規ノ期限内保管ノ上ハ官没ノ處分ヲ爲スヘキモノナルヲ以テ負債償却方ニ付保管者ニ於テ意見アルキハ裁判所ノ處分ヲ仰ガシムヘシ

〔二二一〕連借証書處分方(明治八年四月廿日)

金穀其他借用証書中借主數名連印ニテ各自分借ノ員數ヲ記載セサル分ハ右連印中失踪又ハ死亡シテ相續人ナキ者等有之トモ其借用シタル金銀其他ノ總額ヲ其連印中現在ノ者ヘ償却可申付候條此旨布告候事

但右証書中分借ノ員數無之トモ別ニ明記アルハ此限ニアラス

〔二二二〕相續法(明治六年一月廿二日)

今般華士族家督相續ノ儀ニ付左ノ通被相定候條此相達候事

「家督相續ハ必ス總領ノ男子タルヘシ若シ亡没或ハ廢疾等不得止ノ事故アルハ其事實ヲ

六年二百六十三號  
ヲ以テ改  
正及追加  
ス

詳ニシテ次男三男又ハ女子ニ養子相續願出ツヘシ次男三男女子無之者ハ血統ノ者ヲ以テ相續願出ツヘシ若シ故ナク順序ヲ越テ相續致ス者ハ相當ノ咎可申付事

「婦女子相續ノ後ニ於テ夫ヲ迎ヘ又ハ養子致シ候ハ、直ニ其夫又ハ養子ヘ相續可相讓事」  
幼少ニテ家督爲致候節ハ親戚又ハ他人ニテモ相當ノ者相撰後見可爲致事

當主隱居致シ實子又ハ養子家督相續致候上其相續人多病或ハ不埒ノ儀有之歟又ハ病死致シ最前ノ隱居壯健ニテ再相續願出候節ハ聞届不苦事  
但再相續人ト可稱事

當主壯年ナレトモ疾病其外無據事故有之養子致シ候處前主疾病平愈又ハ事故相解候節再家致シ右養子ハ實家ヘ立戻リ候歟又ハ當主他ヘ縁付候共双方熟議ノ上願出候ハ、聞届不苦事

父兄伯叔總テ目上ノ者子弟甥等ノ目下ノ家ヲ繼承スルトキハ相續人ト稱シ養子ト稱ス可カラス

當主死去跡嗣子無之婦女子ノミニテ已チ得サル事情アリ養子難致者ハ婦女子ノ相續差許從前ノ通給祿可支給事

右之通候條華族ハ管轄廳ヨリ正院ヘ相伺士族ハ管轄廳ニ於テ聞届可申事  
○明治九年六月五日第五十八號達

實子アル者養子ヲ以テ相續人トシ子女アルノ寡婦夫ヲ迎ヘテ前夫ノ跡相續人ト定ムル等ハ一般難差許定規ニ候得共華士族ヲ除クノ外現實極貧或ハ老病等コテ實子孫アリト雖モ幼少ナルカ又ハ有子ノ寡婦タリトモ極貧或ハ其子女幼少且後見スヘキ者モ無之歟ノ場合ニテ親族協議ヲ以テ願出候節不得止事情ニ係ル者ハ地方官限リ聽許不苦此旨相達候事

○明治十年十二月廿八日第九拾九號

平民ノ養子相續人等ノ儀ニ付明治九年<sup>六</sup>第五十八號ヲ以テ相達候處士族ト雖モ同様取計不苦候條此旨更ニ相達候事

ク(二三)外國人へ地所家屋貸與等約定方(明治七年八月十二日第八拾五號布告)

外國人へ家屋地所等貸渡ノ節約束上輕忽疎漏ヨリ竟ニ内外人民ノ間ニ不都合ヲ生シ候テハ自然交際ニモ差響候條自今學校其他ノタメ備入レ居留地外へ住居スヘキ外國人及公使館附屬書記官等へ貸家賃地ノ節ハ先ツ約定草案相添其管轄廳へ伺出許可ノ上結約可致此旨布告候事

但建物取毀賣拂ノ分ハ幾日以内取拂ノ約定取結可賣渡尤賣渡ノ上ハ其旨管轄廳へ可届出事

ケ(二四)契約証書解釋方法(明治十年十二月十五號達)

契約証書解釋方法ノ儀太政官へ相伺候處別紙ノ通御指令相成候ニ付心得ノ爲メ此旨相達候事

裁判上契約証書解釋方法ノ儀ニ付上申

抑モ契約証書ナル者ハ雙方ノ權利義務ヲ定メ其趣旨目的ヲ確實ナラシムルモノニシテ素ヨリ輕易ニ付スヘカラサルナリ然ルニ各人契約ノ証書動モスレハ疎漏ニ流レ訴訟トナルニ及ンテ意義ノ解釋ニ苦シム文意汎漫曖昧ニシテ契約ノ趣旨目的明割ナラサル者アリ意義兩端ニ渉ル者アリ其他地方ノ慣習ニ因リ文言ノ其趣旨ニ適セサル者アリ裁判官タルモノ活眼以テ之ヲ解シ明察以テ其要旨ヲ探ラサレハ裁判其當ヲ失ヒ冤ヲ吞ミ憾ヲ含ミ却テ人民ヲシテ冤屈ニ沈マシム慎マサルヘケンヤ

現今裁判上ノ景況ヲ視ルニ特リ其文詞ニ拘泥シ其契約ノ主旨ヲ誤リ或ハ文意ノ曖昧ナル者ハ概シテ無効トナスカ如キノ弊害アルヲ免レサルナリ果シテ然ルキハ權利者却テ權利ヲ失ヒ義務者却テ義務ヲ免ル、ニ至リ雙方ノ權利ヲ錯亂シ各人ノ權利財産ノ安固ヲ妨害スル實ニ鮮少ナラサルヘシ是ニ於テ道途ニ基キ便益ヲ測リ猶佛國民法ノ法理ニ據リ契約証書ノ解釋法ヲ指示シ裁判上ノ謬誤ヲ豫防スルヲ目今ノ一大急務タリ

因テハ別紙ノ通疑シキ契約証書ノ解釋方法兼テ於當省釐定イタシ置キ此主旨ヲ以テ伺出シ

向キへ指令ニ及ヒ度又時宜ニ因リ各裁判所爲心得相達候ノ儀モ有之ヘク存候抑モ是等ノ事  
ハ事理ノ然ラサルヘカテサル者ニ候得共爲念一應相伺候條至急御裁令ヲ請

明治十年六月廿三日

司法卿大木喬任

右大臣岩倉具視殿

御指令

伺之趣へ修正ノ通相心得ヘシ

明治十年七月十七日

別紙原案ハ之レヲ略ス

修正

契約書解釋必得

- 一 契約書ヲ解釋スルニハ其文字ノミニ依著スルヨリ寧ロ其契約ヲ爲シタル雙方ノ者ノ旨趣如何ヲ考案スヘシ
- 二 一個ノ條款ニ様ノ意ヲ帶ルルハ其契約ノ効ナカラシム可キ意ニ之レヲ解スルヨリ寧ロ其効ヲ生セシムヘキノ意ニ之ヲ解スヘシ
- 三 文詞ニ様ノ意ヲ帶ルルハ其契約ノ目的ニ最モ適シタル意ニ之ヲ解スヘシ
- 四 文意ノ曖昧タルモノハ其契約ヲ結ヒタル地方ノ習慣ニ從テ之ヲ解スヘシ

- 五 習慣上通常記載スル條款ヲ契約書中ニ記セサルモ仍ホ之ヲ記シタルモノト看做ス可シ
- 六 契約書中ノ條款ハ皆其全文ノ大意ニ從ヒ互ニ相解釋スヘシ
- 七 疑ノ場合ニ於テハ契約ハ其義務ヲ行フ可キ者ノ利益トナル様之ヲ解釋スヘシ
- 八 契約書中ノ文詞如何ニ泛キトモ其契約ヲ結ヒタル雙方ノ者互ニ相思擬シタル可シト推知スルヲ得ヘキ者ヲ除クノ外ハ之レヲ包含セヌ
- 九 義務ヲ解釋スル爲メ契約書中ニ一箇ノ事項ヲ掲ケタリトモ其契約上當然ニ包含ス可キ事件他ノ事項ヲ除去シタル者ト看做ス可ラス

(二五)契約証書姓名記載法(明治十年七月七號布告)

諸証書ノ姓名ハ必ス本人自ラ書シテ實印ヲ押スヘシ若シ自書スルヲ能ハサル者ハ他人ヲシテ代書セシムルヲ得ルト雖モ必ス其實印ヲ押スヘシ其代書セシ者ハ本人姓名ノ傍ニ其代書セシ事由ト己レノ姓名トヲ記シテ實印ヲ押スヘシ

右布告候事

(二六)戶籍法(明治四年四月布告)

今般府藩縣一般戶籍ノ法別紙之通改正被仰出候條管内普ク布告シ可申事

戸籍検査編製ハ來申年二月一日ヨリ以後ノ事ニ候得共右ニ關係スル諸般ノ事ハ今ヨリ處置致ス可ク尤三府及各開港場ハ人民輻輳ノ地ニテ取締向速ニ不相立候テハ難相成ニ付送籍入籍並旅行寄留ノ者ニ籍札渡方寄留表取調方等當六月廿九日ヨリ後ル可ラサル事

但不審ノ廉ハ民部省ニ可承合事

右之通被仰出候事

人生始終ヲ詳ニスルハ切要ノ事務ニ候故ニ自今人民天然ヲ以テ終リ候者又ハ非命ニ死シ候者等埋葬ノ處ニ於テ其時々其由ヲ記録シ名前書員數共毎歲十一月中其管轄廳又ハ支配所ニ差出サセ十二月中辨官ニ可差出候事

右之通管内社寺ニ可觸達候事

戸數人員ヲ詳ニシテ撰ナラザラシムルハ政務ノ最モ先ニ重スル所也夫レ全國人民ノ保護ハ太政ノ本務ナルヲ素ヨリ云フヲ待タス然ルニ其保護スヘキ人民ヲ詳ニセズ何ヲ以テ其保護スヘキヲ施スヲ得ンヤ是レ政府戸籍ヲ詳ニセサルヘカラサル儀ナリ又人民ノ各安康ヲ得テ其生ヲ遂ル所以ノモノハ政府保護ノ庇蔭ニヨラサルハナシ去レハ其籍ヲ逃レ其數ニ漏ル、モノハ其保護ヲ受ケサル理ニテ自ラ國民ノ外タルニ近シ此レ人民戸籍ヲ納メサルヲ得サルノ儀ナリ中古以來各地方民治趣ヲ異ニセシヨリ僅ニ東西ヲ隔ツレハ忽チ情態ヲ殊ニシ聊カ遠近アレハ即チ志行ヲ同フセス隨テ戸籍ノ法モ終ニ錯雜ノ弊ヲ免レヌ或ハ此籍ヲ逃レ或ハ

彼籍ヲ欺キ去就心ニ任セ往來規ニヨラス沿襲ノ習人々自ラ度外ニ附スルニ至ル故ニ今般全國總體ノ戸籍法ヲ定メラル、ヲ以テ普ク上下ノ通義ヲ辨ヘ宜シク粗略ノコナカルヘシ

第一則 戸籍舊慣ノ錯雜アル所以ハ族屬ヲ分ツテ之ヲ編製シ地ニ就テ之ヲ收メサルヲ以テ

遺漏ノ事アリト雖モ之ヲ檢査スルノ便ヲ得サルニ依レリ故ニ此度編製ノ法臣民一般(華

族士族卒祠官僧侶平民迄ヲ云以下准之)其住居ノ地ニ就テ之ヲ収メ專ラ遺スナキヲ旨ト

ス故ニ各地方土地ノ便宜ニ隨ヒ豫メ區畫ヲ定メ每區戸長並ニ副ヲ置キ長並ニ副ヲシテ其

區内戸數人員生死出入等ヲ詳ニスル事ヲ掌ンシムヘシ

第二則 戸長ハ必ス長ト副トニ限ルヘカラス時宜ニヨリ長副數名アルモ妨ケナシトス

但戸長ノ務ハ是迄各處ニ於テ莊屋名主年寄觸頭ト唱ル者ニ掌ラシムルモ又ハ別人ヲ用

ユルモ妨ケナシ

第三則 凡ソ區畫ヲ定ムル譬ハ一府一郡ヲ分テ何區或ハ何十區トシ其一區ヲ定ムルハ四五

町若クハ七八村ヲ組合スヘシ然レモ其小ナルモノハ數十ニ及ヒ大ナルモノハ一二ニ止ル

モ都テ其時宜ト便利トニ任セ妨ケナシ

但急ニ區畫ヲ定メ難キ所ハ假ニ便宜ニ從ヒ一村一町ニテ檢査セシムルモ妨ケナシ官ノ學

校兵隊屯所等又ハ大社大寺ノ別ニ區域ヲナセシハ其官司ノ吏員其社寺ノ執事等ニテ戸

長ノ事ヲ扱ハシムルモ妨ケナシ

長ノ事ヲ扱ハシムルモ妨ケナシ

第四則 戸長其區内ノ戸籍ヲ式ノ如ク之ヲ集メ二通ヲ清書シ更ニ第一號ト第二號ノ式ノ如ク其區内總計ノ戸籍表ト職分表トヲ作り其集ル所ノ籍ハ戸長ニ備ヘ置キ清書二通りト共ニ其支配所ニ差出スヘシ支配所之ヲ其應ニ差出シ其應之ヲ第五號第六號ノ式ノ如ク其管内總計ノ戸籍表ト職分表トヲ作り戸籍一通ハ其應ニ備ヘ置キ一通ニ應印ヲ押シ表ト共ニ六ケ年目ニ改メ太政官ヘ差出スヘシ(支配所トハ管轄内廣遠ノ處別ニ一小部ヲ置キ支配セシムル所ヲ云フ總テ出張所トイフノ類ナリ)

但支配所ナキ所ハ直ニ其應ニ出スヘシ以下准之

第五則 編製ハ爾後六ケ年目ヲ以テ改ムヘシト雖モ其間ノ出生死去出入等ハ必ス其時々戸長ニ届ケ戸長ハ其應ニ届出テ(支配所アル者ハ支配所ニ届支配所ヨリ其應ニ届ク)其應之ヲ受ケ人員ノ増減等本書ヘ加除シ毎年十一月中戸籍表ヲ改メ十二月中太政官ニ届出ヘシ

第六則 管轄廳ニ於テ戸籍專任ノ吏員ヲ置キ其事ニ擔當セシムヘシ若シ遺漏粗略ノ事アルニ於テハ其吏員並ニ戸長戸長ナキ大社大寺ハ執事ノ責タルヘシ

第七則 區内ノ順序ヲ明ニスルハ番號ヲ用フヘシ故ニ每區ニ官私ノ差別ナク臣民一般番號ヲ定メ其住所ヲ記スニ都テ何番屋鋪ト記シ編製ノ順序モ其號數ヲ以テ定ルヲ要ス

但區内ノ屋敷亡所トナリ又ハ一所ヲ割テ二戸トシ二戸ヲ合セテ一戸トナスコアルモ其由ヲ戸籍ニ記シ番號ハ其儘據置六ケ年目ニ至リ改ムヘシ

第八則 各地方貫屬或ハ平民等事務アリテ全戸他ノ管轄所ニ引移ルモノハ其由ヲ本貫管轄

廳ヘ願出其應ヨリノ送リヲ取り在留地ノ廳ニ届出其所ノ籍ニ編入スヘシ又故アリテ元ノ管轄廳ヘ引移ル時ハ之ヲ戻スコト其始出ル時ノ如クシ其所ノ籍ニ編入スヘシ

但當時全戸既ニ引移リシ官員ノ如キハ其官省ヨリ名前書ヲ在留地ノ廳ニ達シ夫ヲ證トシ其住居ノ地區ニテ其籍ヲ收ムヘシ又本貫管轄廳ニハ其由ヲ其官省ヨリ達シ其應之ヲ聽キ其所ノ籍ヲ除クヘシ尤此ヨリ後引移ルモノハ此限コアラズ送籍スルコト本條ノ如クスヘシ(第八則ヲ云)若シ全戸引移ルト雖モ情故アリテ本貫管轄廳ノ籍ニアルヲ願フモノ其地寄留ノ部ニ入レ情願ニ任ズルモ妨ナシ

第九則 他ノ管轄地ニ引移ル時元ノ廳ヨリ送籍スルニハ其當人ヨリ元住所ノ組合並ニ戸長ニ其由ヲ届ケ長副連印シ其應ニ届ケ其應之ヲ受ケ其應聽知ルノ證ヲ押シ當人ニ渡スヘシ但管轄内廣遠ノ場所別ニ支配所アラハ其支配所ニテ之ヲ達セシメ往來困却ノ弊ナカラシムルヲ要ス

第十則 他ノ管轄所ヨリ此管轄所ニ入籍スル時ハ元ノ管轄所ノ證ヲ持參シ其入ル所ノ戸長ニ其由ヲ通シ戸長其相違ナキヲ糾シ其所ノ籍ニ入ルヘシ而シテ戸長其元應ノ證ト其入籍セシ事ノ由ヲ時々其應ニ届クヘシ

第十一則 管轄内甲ノ區ヨリ乙ノ區ニ移ルカ如キモ第十則迄ノ例ヲ見合スヘシ但管轄内ナルヲ以テ送籍ハ戸長ヨリ之ヲ致シ入籍ノ上其入ル所ノ戸長ヨリ其應ニ届ケ

其應之ヲ聽キ即チ本書ニ加除スヘシ(加除ハ甲ノ籍ヲ除キ乙ノ籍ニ入ルノ類)ヲ云但其  
區ニ於テ時々加除スルハ勿論ナルヘシ

第十二則 全戸引移ラヌ又ハ一時公私ノ用ニテ寄留スルモノハ其本貫管轄廳ノ鑑札ヲ持參  
シ寄留地戸長ニ通シ其寄留スル所ノ廳ニ名前書ヲ添ヘ鑑札ヲ差出シ其應之ヲ受ケ即チ其  
應ノ鑑札ト引替遣スヘシ鑑札ニハ當人名住所職分ヲ記スヘシ而シテ其者歸國スル節ハ同様ノ例ヲ  
以テ元ノ鑑札ト引替歸國スヘシ名住所職分ヲ變スル時ハ引替スヘシ

但管轄内廣遠ノ場所別ニ支配所アラハ其支配所ニテ引替シムヘシ故ニ鑑札ハ豫メ支配  
所ヘモ備ヘ置クヲ要ス

鑑札引替ノ節其戸長官ノ學校兵隊屯所ノ如キハ其役與大社大寺ノ執事ニ差出ス名前書ニハ官員ハ常人兵隊ハ隊長證  
印シ自餘ハ戸主備主請人證印スルヲ要ス名前屆書式ハ第  
三號見合スヘシ

第十三則 修行又ハ奉公ノ爲メ他國ニ寄留スルモノモ第十二則ノ例タルヘシ  
全戸引移リシ官員等ノ内寄留情願ノ者モ第十二則ノ例タルヘシ(第八則但書ト見合スヘ  
シ)

但是迄修行又ハ奉公イタシ寄留スル者及ヒ事務アリテ寄留スルモノ其本貫ノ廳ニ届ケ  
鑑札請取第十二則ノ例ヲ以テ引替ヘシ若シ道路懸隔リ當人ヨリ本貫ノ廳ニ届ケ難キ事  
故アルモノハ其寄留地ノ廳ニ於テ戸主備主請人等ノ證書ヲ出サシメ其應ヨリ直ニ其本

四年七月  
廿二日  
ヲ以テ  
寄留  
鑑札  
ヲ  
廢  
ス

貫ノ廳ニ掛合鑑札受取ルヘシ但自今以后ハ此例ニアラス

第十四則 凡ソ旅行スルモノ官員ハ其官省等ノ鑑札ヲ所持シ自餘ハ臣民一般其管轄廳ノ鑑  
札ヲ所持スヘシ寄留ノモノハ其所持  
スル鑑札ヲ用フヘシ故ニ旅行ヲ以テ渡世トスルモノ、如キハ急速ノ便ヲ得ル  
爲メ豫メ其鑑札ヲ申受置モ妨ケナシトス十二則但書ノ通所置シ  
急速ノ便得セシムヘシ

但其管轄廳ノ鑑札ニハ當人名住所ト職分ヲ記スヘシ名住所及職分ヲ變セシ時ハ右鑑札  
ヲ引替ヘシ

四年七月廿二日布告ヲ以テ旅行鑑札ヲ廢ス

第十五則 驛遞旅宿ニ於テハ其鑑札ヲ認メ之ヲ宿帳ニ記シ止宿セシムヘシ此證據ナキモノ  
ハ止宿セシムヘカラス

第十六則 宿帳ハ七日目毎ニ驛遞ハ其驛出帳驛遞掛ノ改ヲ受ケ自餘ハ其戸長ヘ出シ改ヲ受  
クヘシ旅籠屋ニ於テハ都テ逗留三日以上ハ其戸長ニ届ケ人民輻輳スル三都府ノ如キハ  
其時々戸長ヨリ其廳ニ届ヘシ九十日以  
上ハ寄留トシ第十二則ノ手續ヲナスヘシ旅人病氣又ハ異變ノ節速ニ届ケ出ルハ勿論ナリ  
但戸籍改ノ節滞留スルモノハ其所持ノ鑑札ニ突合セ檢査スヘシ

第十七則 各地ニ出張スル官員出入トモ其管轄廳ヘ届ケ其出張先ノ地方廳ヘモ届クヘシ  
但地方ノ廳懸隔リシ場所一時出張シ或ハ急遽ノ事務等アレハ其手續ナキコアルヘシ  
第十八則 僧侶ハ其得度ノ地ヲ以テ本貫トシ他寺ニ轉住スル時ハ送籍シ行脚遍參スルモノ

六年百八  
十七號布  
告ヲ以テ  
僧侶ノ族  
籍編入  
以テ  
族籍  
ヲ定ム

ハ天下府藩縣一般二月一日ヨリ五月十五日ヲ以テ終ルヲ法トスヘシ此間凡  
第二十二則 六ヶ年目毎ニ二月一日ヨリ五月十五日迄凡百日ノ間ハ戸籍ノ出入ヲ止ムヘシ  
但不得止事故アルニ由リ其人ハ移轉セシメ他ノ所ニ行カシムト雖モ戸籍ノ調ハ其本住  
所ノ廳ニテ之ヲ取集ムヘシ此百日ノ間ニ一般ノ戸籍調終ルヲ待テ五月十六日ヨリ送籍  
入籍ノ事ヲ處置スヘシ  
但戸籍檢査ノ日ニ當リテ 二月一日ヨリ五月十  
五日迄凡百日ノ間 不得已移轉セシモノハ送籍入籍ノ時 五月十六  
ハ必ス其由ト其月日ト本書ニ書顯スヘシ  
第二十三則 六ヶ年目毎ニ五月十六日迄ニ戸籍檢査既ニ終リ其廳ニ於テ六月中第四則ノ例  
ノ如ク其管轄内總計ノ戸籍表ヲ作リ 第五號式 本書共ニ七月中太政官ヘ差出スヘシ 第四則ト見  
但一紙ハ其廳ニ留置毎年出ス所ノ表ノ基トスヘシ  
第二十四則 寄留者ノ届書ハ其寄留スル支配所ニテ 支配所ナキ  
モノハ其廳 其時々之ヲ記録シ寄留表ヲ第  
七號式ノ如ク製シ出入人員増減ヲ隔月檢査シテ其廳ニ出シ其廳之ヲ受ケ毎年十二月太政  
官ヘ差出スヘシ  
但支配所アルハ某支配所ト表ノ左傍ニ記スヘシ  
第二十五則 三都府ハ人民幅濶ノ地ナルヲ以テ寄留表ハ他ノ藩縣ニ拘ラス隔月檢査ノ時々  
即チ太政官ヘ差出スヘシ

七百四十九

第二十六則 民産調ノ如キハ一般ノ御布告アルヘシト雖此迄地方官ニテ戸籍中家産等書載サセ來リシハ其儘出スヘシ

第二十七則 戸籍表ノ用紙ハ厚紙ヲ用ヒ戸籍ノ用紙ハ美濃紙ノ寸法ヲ準トシ公用ノ郵紙ヲ用フヘシ戸長ト其廳ヘ收ムル分ハ其土地求メ易キ適宜ノ品ヲ用フヘシ故ニ每區戸長ヘ本書分ノ公用郵紙ヲ其廳ヨリ下渡スヘシ

第二十八則 各地ノ戸籍一例ナルヲ要スレハ字ノ細大行ノ高低ハ其記事ヲ標別スル爲メナルヲ以テ能々注意シ成丈ケ細字ニ記スルヲ要ス

第二十九則 此迄厄介ト號セシモノ或ハ縁故アリテ養育スルモノ等ハ其族屬ト續柄ヲ肩書シテ其事由ヲ其名前ノ上ニ記スルヲ式ノ如クスヘシ

第三十則 華族等ノ從僕其邸内ニ住居シテ一戸ヲナセルモノハ式ノ如ク其主人ノ次ニ記シ社中寺内ニアルモノ此例ニ準スヘシ

第三十一條 凡ソ僧尼ハミナ式ニ依テ其本貫得度ノ年月及ヒ其所ヲ記シ院内受職ノ外ハ皆弟子ヲ以テ記スヘシ

第三十二則 穢多非人等平民ト戸籍ヲ同フセサルモノ、如キハ其最寄ノ區ニテ其戸長ヘ名前書ヲ出サセ年齢癡疾等ヲモ認ムヘシ其人員男女ヲ分チ戸籍表ニ書入シ差出シ廳ニテモ戸籍表ニ入ル、式ノ如クスヘシ

四年八月廿八日布告ヲ以テ穢多非人等ノ稱ヲ廢シ一般民籍ニ編入ス

但生死出入其最寄戸長ニテ取扱寄留旅行ノ規則等平民同様ノ例ニ從ヒ名前書ヲ六ヶ年目ニ出サシムルヲ戸籍ノ如クスヘシ

第三十三則 都テ書式ハ臣民トモ體裁一ナレハ彼此相通シ參用シテ妨ナシ

(二七)婚姻法(明治四年八月廿三日)

華族ヨリ平民ニ至ル迄互婚姻被差許候條雙方願ニ不及其時々戸長ヘ可届出事

但送籍方ノ儀ハ戸籍法第八則ヨリ十一則迄ニ照準可致事

○明治六年三月十四日第百三號布告

自今外國人ト婚姻差許左ノ通條規相定條候此旨可相心得事

一 日本人外國人ト婚嫁セントスル者ハ日本政府ノ允許ヲ受クヘシ

一 外國人ニ嫁シタル日本ノ女ハ日本人タルノ分限ヲ失フヘシ若事故有ツテ再ヒ日本人タルノ分限ニ復セシムルヲ願フ者ハ免許ヲ得能フ可シ

一 日本人ニ嫁シタル外國ノ女ハ日本ノ國法ニ從ヒ日本人タルノ分限ヲ得ヘシ

一 外國人ニ嫁スル日本ノ女ハ其身ニ屬シタル者ト雖日本ノ不動産ヲ所有スルヲ許サズ但シ日本ノ國法並ニ日本政府ニテ定メタル規則ニ違背スルヲナクハ金銀動産ヲ持携スルハ妨ケナシトス



一日本ノ女外國人ヲ婿養子ト爲ス者モ亦日本政府ノ免許ヲ受クヘシ  
 一外國人日本人ノ婿養子トナリタル者ハ日本國法ニ從ヒ日本人タルノ分限ヲ得ヘシ  
 一外國ニ於テ日本人外國人ト婚嫁セントスル者ハ其國或ハ其近國ニ在留ノ日本公使又ハ領事官ニ願出許可ヲ乞フヘシ公使及ヒ領事官ハ裁可ノ上本國政府ヘ届出ヘシ

(二一八)公證人規則(明治十九年八月十一日)

第一章 總則

第一條 公證人ハ人民ノ囑託ニ應ジ民事ニ關スル公正證書ヲ作ルヲ以テ職務ト爲ス  
 第二條 公證人ハ法律命令ニ背キタル事件ノ公正證又ハ他ノ官吏ノ作ル可キ公証書類ヲ作ルコトヲ得ス若シ之ヲ作リタルトキハ公正ノ効ヲ有ス  
 第三條 公證人ノ作リタル公正證書ハ完全ノ證據ニシテ其正本ニ依リ裁判所ノ命令ヲ得テ執行スル力アルモノトス  
 但刑事裁判所ニ偽造ノ訴アルトキハ其證書ノ執行ヲ中止ス可シ又民事裁判所ニ偽造ノ申立アルトキハ其證書ノ執行ヲ中止スルコトヲ得  
 第四條 公證人ハ治安裁判所ノ管轄地ヲ以テ受持區トシ其區内ニ於テ司法大臣ノ認可ヲ受ケタル町村内ニ住居シ其居宅ニ役場ヲ設ケ役場ニ於テ職務ヲ行フヘシ但役場外ニ住居セ

ントスルトキハ管轄始審裁判所ノ認可ヲ受クヘシ  
 己ムヲ得サル事件ニ付テハ受持區内ニ限リ役場外ニ於テ其職務ヲ行フヘシ  
 第五條 各區内公證人ノ員數ハ司法大臣之ヲ定ム  
 第六條 公證人ハ司法大臣ニ隸屬シ控訴院長始審裁判所長ノ監督ヲ受クルモノトス  
 第七條 公證人其受持區内ニ於テハ區外人ノ爲メニモ職務ヲ行フヘシ但シ受持區外ニ於テハ何人ノ爲ニモ職務ヲ行フコトヲ得ス若シ之ヲ行ヒタルキハ其書類ニ公正ノ効ヲ有セス  
 第八條 公證人ハ理由ナクシテ人民ノ囑託ヲ拒ムコトヲ得ス若シ之ヲ拒ミタルトキハ囑託人ノ求メアレハ其理由ヲ記シテ渡スヘシ  
 第九條 公證ノ職務執行上ニ關シ不服アル者ハ管轄始審裁判所ニ抗告スルコトヲ得ス  
 第十條 公證人ハ公證人何某ト刻シタル方六分ノ役印ヲ作り其印鑑ニ氏名ヲ手書シ之ヲ管轄始審裁判所及治安裁判所ニ差出スヘシ  
 前項ノ印鑑ヲ差出サ、ル間ハ職務ヲ行フコトヲ許サス若シ之ヲ行ヒタルトキハ其書類ハ公正ノ効ヲ有セス  
 第十一條 公證人已ムヲ得サル事故アリテ職務ヲ行フコト能ハサルトキハ近隣ノ公證人ニ代理ヲ囑シ管轄始審裁判所ニ其旨ヲ届出ヘシ  
 第十二條 公證人ハ筆生ヲ置キ書類ヲ作ル補助ヲ爲サシムルコトヲ得

第十三條 公證人ノ作ル證書及謄本ノ用紙ハ某始審裁判所管内公證人役場ト刻シタル野紙ヲ用フ可シ

第十四條 公證人ノ取扱フ可キ書類左ノ如シ

- 第一 原本 證書ノ本紙ニシテ公證人ノ保存スルモノ
- 第二 正本 原本ノ全文ヲ記シタルモノニシテ本文義務ノ執行ヲ裁判所ニ願出ヘキ旨ヲ其末尾ニ記載シタルモノ

第三 抄録正本 原本ノ一部分ヲ記シ其末尾ニ前項ト同一ノ記載アルモノ

第四 正本謄本 原本ノ全文ヲ寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得ヘキモノ

第五 抄録正式謄本 原本ノ一部分ヲ抄寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得ヘキモノ

第六 謄本 原本ノ全文ヲ寫シタルモノ

第七 抄録 本原本ノ一部分抄寫シタルモノ

第八 見出帳日々授受シタル書類ノ番號書類等ヲ順次ニ記入スルモノ

第十五條 原本其他書類ノ本書ハ役場ニ之ヲ保存シ他ノ官吏ノ公證ヲ受ケタル爲メノ外裁判所ノ命令ニ依ルニ非サレハ役場外ニ出スコトヲ得ス

第十六條 裁判所ノ命令ニ依ルノ外關係外ノ者ニ書類ノ謄本ヲ渡スヘカラス

第十七條 公證人ハ其取扱ヒタル公證事件ヲ漏洩スヘカラス

第二章 公證人ノ選任及試験

第十八條 公證人タル可キ者ハ左ノ件々ヲ具備スルヲ要ス

第一 滿二十五歳以上ナル事

第二 身元保證金ヲ管轄始審裁判所ニ差入ル、事

第三 定式試験ノ及第證書ヲ有スル事 但裁判官檢察官タリシ者及法學士法科大學卒業生代言人ハ此條件ヲ要セス

第四 丁年者二名以上ニテ其品行ヲ保證スル證書ヲ有スル事

第十九條 保證金ノ額ハ土地ノ景況ニ從ヒ貳百圓以上五百圓以下ニ於テ豫メ司法大臣之ノヲ定ム

第二十條 左ニ掲クル者ハ公證人タルコトヲ得ス

第一 公權剝奪若クハ停止中ノ者

第二 盜罪詐僞罪賄賂收受ノ罪及贓物ニ關スル罪ヲ犯シ刑ヲ受ケタル者

第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辦償終ヘサル者

第四 官吏懲戒令ニ依リ免職セラレタル者

第二十一條 公證人ヲ試験スル場所及期日ハ司法大臣之ヲ定メ少クトモ二箇月前ニ告示スヘシ

第二十二條 試験委員ハ控訴院若クハ始審裁判所ノ裁判官二名検査官一名トシ司法大臣臨時之ヲ命ス

第二十三條 試験ノ科目ハ公證人規則 民法 訴訟法 商法其他公證人ノ職務ニ關スル法律命令

第二十四條 公證人ヲラント欲スル者ハ願書ニ試験及第證書ノ寫ヲ添ヘ管轄始審裁判所若クハ控訴院ヲ經テ司法大臣ニ差出スヘシ

但裁判所檢察官アリシ者ハ其官記法學士ハ其學位記法科大學卒業生ハ其卒業證代言人ハ其免許狀ヲ以テ及第證書ニ代フルコトヲ得

第二十五條 公證人ハ司法大臣之ヲ任ス

第二十六條 試験ノ方法ハ筆記口述ノ二種トス筆記試験ニ合格セサル者ハ口述試験ヲ受クルコトヲ得ス

第二十七條 試験及第者ニハ及第證書ヲ授與ス

第二十八條 公證人證書ヲ作ルニハ其囑託人ノ氏名ヲ知り面識アルヲ必要トシ且丁年者一名ノ立會人ヲ要ス之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第一節 證書ノ原本

第三章 證書

公證人囑託人ノ氏名ヲ知ラズ面識ナキトキハ其本籍或ハ寄留地ノ郡區長若クハ戶長ノ證明書又ハ公證人氏名ヲ知り面識アル丁年者二人以上ヲ以テ其人ヲ證セシムヘシ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第二十九條 左ニ掲クル者ハ立會人タルコトヲ得ス

第一 公證人及囑託人ノ親屬雇人又ハ公證人ノ筆生

第二 第二十條ニ掲ケタル者

第三十條 證書ニハ其本旨ノ外左ノ件々ヲ記載スベシ

第一 囑託人及立會人ノ族籍住所職業氏名年齢

第二 囑託人及代理人ナルトキハ委任狀ヲ所持シタルコト及其本人ノ族籍住所職業氏名年齢

年齢

第三 囑託人後見人ナルトキハ後見人タルノ證書ヲ所持シタルコト及其本人ノ族籍住所職業氏名年齢

職業氏名年齢

第四 郡區長戶長ノ證明書ヲ以テ證シタルトキハ其旨又證人ヲ要シタルトキハ其族籍住所職業氏名年齢

所職業氏名年齢

第五 證書ヲ作りシ場所及其年月日若シ場所ヲ記セス又ハ年月日ノ記入ヲ遺脱シタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十一條 證書ヲ作ルニハ普通平易ノ語ヲ用ヒ字畫明瞭ナルヲ要ス  
 接續スベキ字行ニ空白アルトキハ墨線ヲ以テ之ヲ接續スヘシ  
 數量並ニ年月日ヲ記スルニハ壹貳參肆伍陸柒捌玖拾陌阡萬ノ字ヲ用フベシ  
 第三十二條 度量衡貨幣ノ數量名稱及曆法ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ之ヲ記スヘシ  
 既ニ廢シタル度量衡貨幣法又ハ外國ノ度量衡貨幣曆法ヲ記セサルヲ得サル場合ニ於テハ  
 之ヲ用フルコトヲ得

第三十三條 證書ニ追加改正ヲ爲ストキハ其文字並ニ何行ニ追加改正ヲ爲シタルコトヲ欄  
 外又ハ末尾ノ餘白ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印スヘシ又文中消字ヲ爲ストキハ其原字  
 ノ尙ホ明カニ讀得ヘキコトヲ要ス 但何行ニ若干字ヲ消シタルコトヲ欄外又ハ末尾ノ餘  
 白ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ追加改正消字ノ効チ有セス  
 第三十四條 證書ヲ作りタルトキハ關係人ニ讀聞セ其旨ヲ記入シ然ル後ニ公證人並ニ關係  
 人各自署名捺印シ公證人ハ某治安裁判所管内某地住居ト肩書ス可シ  
 公證人並ニ關係人ノ署名捺印ナキトキハ其證書ハ公正ノ効チ有セス若シ署名スル能ハサ  
 ル者アルトキハ明治十年第五十號ノ布告ニ從フ可シ之ニ違ヒタルキハ其證書ハ公正ノ効  
 チ有セス

第三十五條 證書ノ綴目合目ニハ公證人並ニ囑託人之ニ捺印ス可シ

第三十六條 公證人ハ自己及親屬ノ爲メニ證書ヲ作ルコトヲ得ス其親屬他人ノ代理人タル  
 トキモ亦同シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効チ有セス

第三十七條 公證人若シ囑託人ノ爲メ訴訟代人若クハ代言人ト爲リ又ハ爲リタルコトアル  
 トキハ其訴訟事件ニ付キ證書ヲ受ルコトヲ得ス之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効チ  
 有セス

第三十八條 公證人ハ自己親屬立會人又ハ證人ノ爲メニ利益アル條件ヲ證書中ニ記ス可カ  
 ラス若シ之ヲ記シタルトキハ其條件ハ無効トス

第三十九條 公證人ハ證書ノ原本ヲ保存ス可シモシ之ヲ保存セズ又ハ亡失シタル場合ニ於  
 テ第四十七條ノ手續ヲ爲サハルトキハ其證書ハ公正ノ効チ有セス

第四十條 囑託人若シ代理人又ハ後見人ナルトキハ其委任狀又ハ其證書ノ寫ヲ原本ニ連續  
 ス可シ其寫ニハ本書ト對照シ相違ナキ旨ヲ附記シ公證人並ニ關係人署名捺印シ其寫ト本  
 書トニ割印ス可シ

第四十一條 證書ニ關係ノ書類ハ之ヲ原本ニ連續スルコトヲ得之ヲ連續シタルトキハ其旨  
 チ原本ノ欄外又ハ末尾ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印スヘシ

第四十二條 原本ニハ證券印稅規則ニ定メタル印紙ヲ貼用スヘシ

第二節 正本及謄本

第四十三條 正本ハ數量ノ定リタル金錢其他換用物若クハ有價證券ノ支辨ニ限リ權利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡スヘシ之ニ違ヒタルトキハ正本ノ効ヲ有セス

正式正本及抄録正式謄本ハ權利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡スヘシ

第四十四條 正本又ハ正式謄本ハ原本ト同時ニ又ハ原本ヲ作リタル後ニ於テ之ヲ作ルコトヲ得原本ト同時ニ作ルトキハ關係人ノ面前ニ於テス原本ヲ作リタル後ニ作ルトキハ更ニ義務者ノ立會ヲ以テス可シ義務者出席セサルトキハ正本又ハ正式謄本ヲ求ムル者ヨリ管轄始審裁判所ニ出願シ其命令ニ依テ他ノ公證人一員又ハ裁判所ノ裁判官檢察官又ハ書記一員ノ立會ヲ以テ之ヲ作ルヘシ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セス

裁判所ノ命令ニ依テ正本又ハ正式謄本ヲ作リタルトキハ其末尾并ニ原本ノ末尾ニ其旨ヲ附記シ其命令書ハ之ヲ原本ニ通綴スヘシ

第四十五條 正本又ハ正式謄本ヲ作ルトキハ第三十一條第三十三條第三十四條第三項及第三十五條ノ規定ニ依ルヘシ

正本又ハ正式謄本ニハ權利者ノ氏名並ニ之ヲ作リタル年月日及場所ヲ記シ公證人並ニ義務者署名捺印ス可シ前條第一項ノ場所ニ於テハ公證人又ハ裁判所ノ官吏署名捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セス

第四十六條 正本又ハ正式謄本ヲ渡シタルトキハ原本ノ末尾ニ其旨ト年月日トヲ附記シ權

利者ヲシテ署名捺印セシムヘシ

第四十七條 正本又ハ正式謄本ハ原本ノ亡失シタルトキ管轄始審裁判所ノ認可ヲ經之ヲ原本トシテ保存スヘシ

第四十八條 數事件ヲ列記シ數人各自ニ關係ヲ異ニスル證書ハ權利者ノ請求ニ依リ其有用部分ヲ抄録シテ正本又ハ正式謄本ヲ作ルコトヲ得

正本又ハ正式謄本ヲ渡シタル者ニハ更ニ抄録正式謄本ヲ渡スヘカラス又抄録正本又ハ抄録正式謄本ヲ渡シタル者ニハ更ニ正本又ハ正式謄本ヲ渡スヘカラス之ヲ渡スト雖モ其効ヲ有セス

第四十九條 正本又ハ正式謄本ハ管轄始審裁判所ノ命令アルニ非サレハ再度之ヲ渡スコトヲ得ス之ヲ渡スト雖モ其効ヲ有セス

再度以上正本又ハ正式謄本ヲ得ント欲スル者ハ其事由ヲ具シテ管轄始審裁判所ニ願出ツ可シ管轄始審裁判所ハ原本ヲ保存スル公証人ニ其正本又ハ正式謄本ヲ渡ス可キコトヲ命スルコトアル可シ

其正本又ハ正式謄本ニハ幾度ノ正本又ハ正式謄本ナルコトヲ末尾ニ附記シ公證人署名捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セス

第五十條 抄録正本又ハ抄録正式謄本ハ總テ正本又ハ正式謄本ト同一ノ手續ニ依リ之ヲ作

ル可シ其効力モ亦同シ

第五十一條 證書ノ謄本及其附屬書類ノ寫ハ關係人ノ求メニ應シ之ヲ渡スヘシ

第五十二條 謄本ニハ原本ノ全文ヲ寫シ其末尾ニ謄本ト記シ公證人署名捺印スヘシ

第五十三條 抄録謄本ニハ原本ノ年月日及囑託人ノ族籍住所職業氏名ヲ記シ末尾ニ抄録謄本ト記シ公證人署名捺印スヘシ

第五十四條 管轄始審裁判所ノ命令ニ依リ關係外ノ者ニ謄本ヲ渡シタルトキハ其命令書ヲ原本ニ連綴シ末尾ニ命令書ヲ受ケタル旨並ニ年月日ヲ附記シ受取人ヲシテ署名捺印スヘシ

第三節 見出帳

第五十五條 公證人ハ見出帳ヲ作り記入前管轄始審裁判所ニ差出シ綴目合目ニ其所長ノ官印ヲ受クヘシ

第五十六條 見出帳ニハ日々取扱ヒタル書類中ヨリ第三十一條及第三十三條ノ規定ニ從ヒ左ノ件々ヲ記入ス可シ

第一 囑託人ノ住所氏名

第二 書類ノ番號種類

第三 書類ヲ取扱ヒタル年月日

第四節 兼任及書類ノ授受

第五十七條 公證人死去失踪免職辭職轉職又ハ他ノ役場ニ轉ノ直ニ後任者ノ命セラレザル場合又ハ停職ノ場合ニ於テハ管轄始審裁判所ハ近隣ノ公證人ニ命シテ其事務ヲ兼任セシムヘシ役場ヲ廢シタルトキハ書類ノ引繼ヲ近隣ノ公證人ニ命スヘシ

第五十八條 前條ノ場合ニ於テ兼任者ナキトキ其他必要ト認ムル場合ニ於テハ管轄始審裁判所ハ直ニ其役場ノ書類ニ封印ヲ爲スヘシ

第五十九條 公證人免職辭職轉職又ハ他ノ役場ニ轉シタル場合ニ於テハ後任者又ハ兼任者ハ前任者ト立會ヒ書類ノ提要目錄ヲ作り共ニ署名捺印シテ授受スヘシ

死去失踪其他ノ事故ニ因リ引渡ナキ場合ニ於テハ後任者又ハ兼任者ハ管轄始審裁判所ノ官吏ト立會ヒ提要目錄ヲ作り受取ル可シ

書類封印後ニ命セラレタル後任者又ハ兼任者ハ管轄始審裁判所ノ官吏ト立會封印ヲ解キ提要目錄ヲ作り受取ルヘシ

後任者又ハ兼任者ハ提要目錄ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其目錄ノ寫一通ヲ管轄始審裁判所ニ差出スヘシ

第六十條 公證人停職ノ場合ニ於テハ兼任者ハ第五十九條ノ手續ヲナスコ及ハス書類ノ保存ハ停職者之ヲ擔當スヘシ兼任者ハ停職者ノ役場ニ於テ其職務ヲ行フヘシ

第六十一條 兼任者引繼ノ書類ヲ更ニ他ノ公證人ニ引渡ストキハ其命ヲ受ケタル日ヨリ三日以内ニ自己ノ引續キタルトキノ目錄ニ依テ引渡ヲ爲シ其始末書ヲ作り受繼人ト共ニ署名捺印スヘシ

受繼人ハ始末書ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其寫一通ヲ作り管轄始審裁判所ニ差出スヘシ

第六十二條 停職者復任スルトキハ管轄始審裁判所ヨリ兼任者ニ解任ヲ命スヘシ

第六十三條 前任者ノ作りタル原本ニ依テ後任者正本又ハ謄本ヲ渡ストキハ其受繼人タル旨ヲ附記スヘシ

本任者ノ原本ニ依テ兼任者正本又ハ謄本ヲ渡ストキハ兼任者タル旨ヲ附記スヘシ

第四章 手数料及旅費日當

第六十四條 公證人ハ此章ニ定メタル程限ニ從ヒ囑託人ヨリ手数料及旅費日當ヲ受クルコトヲ得

第六十五條 手数料ハ原本一枚ニ付テ貳拾五錢正本及謄本ハ一枚ニ付テ拾錢

但一行二十字二十行ヲ以テ一枚トシ十行以上ハ一枚十行以下ハ半枚ヲ以テ算ス

第六十六條 囑託人ノ求メニ依リ先ツ證書ノ草案ヲ渡シ後其原本ヲ作りタルトキハ草案ノ手数料ヲ別ニ請求スルコトヲ得ス

但其原本ヲ作ラサルトキハ原本手数料ノ半額ヲ受クルコトヲ得

第六十七條 公證人其役場ヨリ一里以外ノ地ニ行テ職務ヲ行フトキハ往返トモ旅費トシテ

一里毎ニ二拾錢ヲ受クルコトヲ得其職務ヲ行フ爲メ或ハ災變ノ爲メニ其場所又ハ途中ニ

滞留スルトキハ日當七拾錢ヲ受クルコトヲ得

第六十八條 兼任者本任者ニ代リテ其職務ヲ行フトキハ其手数料ハ總テ兼任者之ヲ受ク可

第六十九條 手数料ノ外證券印紙並ニ野紙ノ代價ハ囑託人ヨリ之ヲ受クルコトヲ得

第七十條 囑託人ノ求メアルトキハ手数料ノ計算書ヲ與フヘシ

第七十一條 手数料等ニ係リ争ノ生シタルキハ其金額ニ拘ラス管轄始審裁判所ニ訴フヘシ

第五章 懲罰

第七十二條 公證人此規則ヲ犯シタル時ハ管轄始審裁判所ニ於テ第七十三條ヨリ第七十六條マテニ定メタル規定ニ依リ處分ス可シ

第七十三條 左ノ違犯ハ五拾錢以上壹圓以下ノ過料ニ處ス

第八條ニ違ヒタル時

第十一條ニ違ヒタル時

第十三條ニ違ヒタル時

- 第三十條ノ第一第二第三第四ノ規定ニ違ヒタル時
- 第三十一條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時
- 第三十二條ノ第一項ニ違ヒタル時
- 第三十四條ノ第一項ニ違ヒ讀聞セシコトヲ記入セズ又ハ厚書ヲ爲サズリシ時
- 第三十五條ニ違ヒタル時
- 第四十條ニ違ヒタル時
- 第四十一條ニ違ヒタル時
- 第四十二條ニ違ヒタル時
- 第四十四條ノ第二項ニ違ヒタル時
- 第四十六條ニ違ヒタル時
- 第五十二條ニ違ヒタル時
- 第五十三條ニ違ヒタル時
- 第五十四條ニ違ヒタル時
- 第五十五條ニ違ヒタル時
- 第五十九條ニ違ヒタル時
- 第六十一條ニ違ヒタル時

- 第六十三條ニ違ヒタル時
- 第七十四條 左ノ違犯ハ貳圓以上五圓以下ノ過料ニ處ス
- 第四十三條ニ違ヒタル時
- 第四十四條ノ第一項ニ違ヒタル時
- 第四十五條ノ第二項ニ違ヒタル時
- 第四十八條ノ第二項ニ違ヒタル時
- 第四十九條ノ第一項又ハ第三項ニ違ヒタル時
- 第七十五條 左ノ違犯ハ五圓以上三拾圓以下ノ過料ニ處ス
- 第二條ニ違ヒタル時
- 第七條ニ違ヒタル時
- 第十條第二項ニ違ヒタル時
- 第二十八條ニ違ヒタル時
- 第三十條ノ第五ノ規定ニ違ヒタル時
- 第三十三條ニ違ヒタル時
- 第三十四條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時
- 第三十六條ニ違ヒタル時



第三十七條ニ違ヒタル時

第三十八條ニ違ヒタル時

第三十九條ニ違ヒタル時

第七十六條 左ノ違犯ハ一月以上四月以下ノ停業ニ處ス

第四條ノ第一項ニ違ヒタル時

第十五條ニ違ヒタル時

第十六條ニ違ヒタル時

第十七條ニ違ヒタル時

第七十七條 公證人前數件ニ掲ケタル懲罰處分ニ對シ不服アルトキハ管轄控訴院ニ抗告スルヲ得 但抗告ハ其處分ノ執行ヲ停止スルノ効力ナキモノトス

第七十八條 公證人停職ニ當ル所爲三度ニ及ヒタルトキハ司法大臣其職ヲ免ス

第二十條ノ第一第二第三ニ記載シタル處分ヲ受ケ又ハ身許保證金ヲ差入レサルトキ亦前項ニ同シ

第七十九條 公證人此規則ヲ犯シタルニ依リ他人ニ損害ヲ生シタルハ之ヲ賠償スヘシ

(二一九)公證人規則施行條例(明治十九年八月二號)

第一條 公證人ハ一受持區ニ五名以下ヲ置クモノトス

若シ公證人ノ員數不足スルキハ受持區ニ依リテハ全ク之ヲ置カサルコトアル可シ

第二條 公證人ハ其受持區内ニ於テ住居セント欲スル町村ヲ定メ其願書ヲ始審裁判所ニ差出シ控訴院ヲ經テ司法大臣ノ認可ヲ請フヘシ

始審裁判所長及控訴院長ハ公證人ヨリ差出タル住居願ニ意見ヲ附シテ之ヲ司法大臣ニ送達ス可シ

司法大臣ニ於テ公證人ヨリ願出タル住居ヲ認可セサルキハ直チニ其住居スヘキ町村ヲ指定ス

第三條 公證人既ニ住居ノ認可ヲ受タル後火災其他ノ事故アリテ他ニ轉居セントスルキモ亦前條ノ手續ニ從フヘシ

第四條 公證人ノ役場ニハ公證人某役場ト記セル表札ヲ掲クヘシ 役場ニハ成ヘク倉庫又ハ堅牢ナル建物ヲ以テ書類保存ノ所ト爲スヲ要ス 書類ハ當ニ書箱ニ藏メ非常持退ノ準備ヲ爲シ置クヘシ

第五條 公證人規則ニ從ヒ試験ヲ受ケント欲スル者ハ試験願書ニ履歷書ヲ添ヘ試験期日ノ告示アリタルヨリ試験期日一箇月前迄ニ試験ヲ行フ控訴院若クハ始審裁判所ニ差出スヘシ

試驗願書及履歷書ニハ本籍區長若クハ戶長ノ與書ヲ受ク可シ

第六條 試驗ハ各所同時ニ之ヲ行フモノトス

第七條 試驗委員ハ筆記試驗ノ答案ヲ調査シ其合格不合格ヲ決定シタル後口述試驗ヲ行フ

第八條 試驗問題答案ノ適否ハ試驗委員ノ判斷ニ決スルモノトス

試驗ノ結果ハ筆記口述二種ノ總點ニ依リ之ヲ定ムヘシ

第九條 試驗委員ハ口述試驗ノ大略及試驗全體ノ結果ヲ記錄ニ記載スヘシ

第十條 試驗ニ及第シタル者ニハ試驗委員ノ連署シタル及第證書ヲ授與スヘシ

試驗ヲ行フタル控訴院若クハ始審裁判所ニ試驗及第人名簿ヲ製シ之ニ及第者ノ住所族籍氏名年齢及ヒ及第ノ年月日ヲ登錄スヘシ

第十一條 試驗委員ハ試驗ニ關スル一切ノ書類ヲ其試驗ヲ行フタル始審裁判所若クハ控訴院ノ長ニ差出スヘシ始審裁判所ニ於テ試驗ヲ行フタル時ハ其裁判長ハ及第者ニ關スル一切ノ書類ニ意見ヲ附シテ控訴院ニ送致シ控訴院長モ亦意見ヲ附シテ司法大臣ニ差出スヘシ控訴院ニ於テ試驗ヲ行フタルハ前項ノ書類ニ控訴院長ノ意見ヲ附シテ司法大臣ニ差出スヘシ

第十二條 公証人タラント欲スル者ハ其願書ニ試驗及第證書官記學位記卒業證書又ハ免許

狀ノ寫及丁年者二名以上ニテ品行ヲ保證スル證書ヲ添ヘ之ヲ差出スヘシ

試驗及第證書ヲ要セサル出願人ハ別ニ履歷書ヲ添フヘシ

第十三條 公証人願ヲ受タル始審裁判所ノ裁判長及上席檢事ハ出願人ノ身上ニ付品行ノ正

否理財ノ整否詳細ノ取調ヲ爲シ控訴院ニ送致シ控訴院長及檢事長モ亦意見ヲ附シテ之ヲ

司法大臣ニ差出スヘシ

第十四條 公証人願書ヲ直チニ控訴院ニ差出タルハ控訴院長及檢事長ハ前條ノ取調ヲ爲

シ且意見ヲ附シ之ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第十五條 公証人願書ニハ其職務ヲ行ハントスル地ヲ明記スヘシ

第十六條 司法大臣公証人ヲ任スルハ辭令書ヲ其公証人ノ職務ヲ行フヘキ地ノ管轄控訴院及始審裁判所ヲ經テ本人ニ下付ス

控訴院及始審裁判所ニ於テハ公証人名簿ヲ備置キ公証人ニ任セラレタル者ノ住所族籍氏

名年齢及任地ヲ記録スヘシ

第十七條 公証人ニ任セラレタル者ハ身元保証金トシテ現金又ハ相當ノ價格アル公債証書

若クハ日本銀行株券ヲ管轄始審裁判所ニ納ムヘシ

第十八條 公証人ノ納ムヘキ身元保証金ノ額ハ左ノ如シ

東京及大坂 金五百圓

他ノ地方ニ於テハ

人口貳拾万以上ナル受持區 金四百圓

人口貳拾万未満拾万以上ナル受持區 金三百圓

人口拾万未満ナル受持區 金二百圓

前項ノ金額ハ人口ニ増減アリト雖モ既ニ完納シタル者ハ之ヲ増減セス

第十九條 公証人ハ身元保証金ヲ管轄始審裁判所ニ完納セサル間ハ其職務ヲ行フコト得ス

公証人任命ノ辭令書ヲ受取タルヨリ三十日以内ニ身元保証金ヲ完納セサルキハ公証人規則第七十八條第二項ニ依リ司法大臣其職ヲ免ス

第二十條 公証人ノ身元保証金ハ公証人規則第五章ニ定メアル過料其他賠償ノ抵保ニ充ツルモノトス

第二十一條 過料賠償其他ノ事故ニ依リ身元保証金ノ全部又ハ一部ヲ消滅シタルキハ管轄始審裁判所長ハ速ニ保証金ヲ補充スヘキ旨ヲ公証人ニ命スヘシ

公証人保証金ヲ補充スル迄始審裁判所長ハ假ニ職務執行ノ停止ヲ命スルコト得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ司法大臣ニ具申スヘシ

公証人保証金補充ノ命令ヲ受ケ六十日ヲ過キ之ヲ補充セサルキハ始審裁判所長ハ控訴院ヲ經テ司法大臣ニ具申シ免職ノ處分ヲ請フヘシ

第二十二條 公証人他ノ役場ニ轉スル場合ニ於テ其保証金ニ不足ヲ生スレハ之ヲ補充セシメ若シ餘分アレハ之ヲ還付スヘシ

第二十三條 公証人其職務ヲ罷メタルキハ身元保証金ヲ還付スヘシ

第二十四條 公証人死去失踪シ又ハ停職ノ處分ヲ受ケタルトキハ管轄始審裁判所ハ控訴院ヲ經由シ其旨ヲ司法大臣ニ具スヘシ

停職者復任シタルキハ又前項ノ手續ニ從フヘシ

第二十五條 公証人死去失踪停職復任辭職免職又ハ轉職シタルキハ始審裁判所及控訴院ハ其旨ヲ公証人名簿ニ記入スヘシ

第二十六條 公証人規則ニ定メアル懲罰處分ハ民事裁判所之ヲ管轄シ刑法及治罪法ノ例ヲ用ヒス

第二十七條 公証人試験ノ書式履歷書及公証人願書式ハ左ノ如シ

第一 公証人試験願書式

公証人試験料

其遺紙

族 籍 戶主嗣子又ハ二  
三男兄弟ノ別

氏 年 名

私儀公証人試験相受度此段奉願候也

現住所

氏 名 印

年月日

某控訴院長誰殿又ハ某始審官  
判所長誰殿

前書ノ通族籍年齢等相違無之候也

年月日

(本籍)

區長又ハ戶長 印

第二 履歷書式

履歷書料紙美  
濃紙

族籍

氏 名 印

年 齡

一何年何月ヨリ何年何月迄縣何某ニ就キ又ハ公私何學校何塾ニ於テ何學修業

一何年何月何々職業仕官進退賞罰等  
ニ關スル一切ノ件

一公証人規則第二十條ノ各項ニ相觸候儀一切無之候

氏 名 印

前書ノ通相違無之候也

(本籍)

區長又ハ戶長 印

年月日

第二 公証人願書式

公証人願書料紙美  
濃紙

族籍戶主嗣子又ハ二  
三男兄弟ノ別

氏 名 年 齡

年 齡

私儀何府國某治安裁判所管下公証人受持區ニ於テ公証人ノ職務ヲ行ヒ度志願ニ有之候ニ

付御登用被下度試験及第証書(官記學位記卒業証書免許狀)ノ寫及ヒ品行保証書相添此段

奉願候也

現住所

氏 名 印

年月日

司法大臣誰殿

私儀何府國某治安裁判所管下及何府何國某治安裁判所管下(某始審裁判所管下又ハ其

控訴院管下)ノ内何レノ公証人受持區ニ於テナリトモ御命令ニ從ヒ公証人ノ職務ヲ行ヒ